第２部

教育研究年報

（2022 年度）

教育研究年報の背景

本学においては 2005 年度より、医療系高等教育機関としての質の向上を図る活動の一環として、本学の教育活動と研究活動の実績を社会に公表し、社会的責任を果たすことを目的に「群馬パース大学年報」を年１回発行してきた。

この年報については、発行以来何度か見直しを行い、（1）各領域の教育活動の総括、（2）教育活動の諸記録、（3）研究活動の諸記録、（4）FD 活動の記録、（5）学生サービスの記録、の内容を掲載してきた。

2018 年度からは上記（1）（4）（5）の内容を自己点検評価書に組み入れ、（2）（3）の内容を「群馬パース大学教育研究年報」として、「教育活動の記録」及び「研究活動の記録」の 2 部で構成し、自己点検評価書とともに毎年度作成・公表している。

Ｉ．教育活動の記録

教育活動の記録は、各専任教員が担当した科目において実施内容とシラバスとの対応性、授業の方法、使用した教材、成績評価における学習目標の到達度の測定などを教育実績として収集したデータである。

個人、また各学科で毎年教育実績を振り返ることで改善の促進をはかり、PDCA サイクルを機能させることで、大学に求められる役割の一つである「学生の教育の充実」に対する継続的な教育活動の質の向上に繋げ、教育面での自己点検の一環として、一つの指標となっている。

本年度、各専任教員が担当した学部、大学院の各科目の実施内容とシラバスの対応性は、全体で 97.1%の科目でシラバス通りに講義が進められており、成績評価における学習目標の到達度の測定においては全体で 99.3%の科目において的確に測定できているという結果となった。

看護学部 看護学科 教育活動の記録（専任教員）

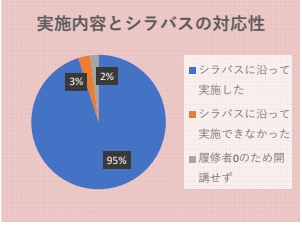
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
心理学	1	後期	選択	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○					○		できた	
教育心理学	1	後期	選択	1	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○					○		できた	
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○	○				○	○	○			○	○	プレゼンテーション	できた	
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○					○			板書		○	○		できた	
生命倫理	2	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○							○			○				できた	
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○					○				○	○		プレゼンテーション	できた	
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	後期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○		○				○	○	○		できた	
大学の学び入門	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○	○							○	○					○		できた	
多職種理解と連携	2	後期	必修	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○									○	○					○		できた	
解剖学Ⅰ	1	前期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
解剖学Ⅱ	1	後期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
臨床解剖学	4	後期	選択	1	浅見知市郎	履修者0のため開講せず																				
生理学Ⅰ	1	前期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○	○		○	○			できた	
生理学Ⅱ	1	後期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○	○		○		○		できた	
臨床生理学	4	後期	選択	1	洞口 貴弘	履修者0のため開講せず																				
生化学	1	後期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○			○	○			できた	
病理学	1	後期	必修	1	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○				できた	
薬理学	1	後期	必修	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
臨床薬理学	4	後期	選択	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
臨床病理学	4	後期	選択	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
免疫・感染症学	2	前期	必修	1	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
臨床検査学	2	前期	必修	1	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
発達心理学	2	前期	必修	1	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○					○		できた	
臨床心理学	2	前期	選択	1	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○					○		できた	
社会福祉・社会保障制度論	2	後期	必修	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
地域保健行政	3	前期	選択	2	小林亜由美	シラバスに沿って実施した		○					○		○	○	○	○	○	模造紙教材	○	○			できた	
カウンセリング	2	後期	必修	1	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○					○	○					○		できた	
看護学概論Ⅰ	1	前期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した		○	○		○				○		○	○			○		○		できた	
看護学概論Ⅱ	1	後期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した		○	○		○				○		○	○			○		○		できた	
基礎看護技術演習	1	前期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○		○	○	○		○		○		できた	
コミュニケーション論	1	後期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○			○		○	○			○		○		できた	
日常生活援助学演習Ⅰ（活動・食事・排泄）	1	後期	必修	1	千葉今日子	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○	○		○	○	○	○	○		○		○		できた	
日常生活援助学演習Ⅱ（清潔・安楽）	1	後期	必修	1	堀込 由紀	シラバスに沿って実施できなかった	COVIT-19感染防止を考慮	○	○	○		○			○	○	○			自作の動画	○		○	プレゼンテーション	できた	
治療援助学演習	2	前期	必修	2	長嶺めぐみ	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○	○		○		○	○			○	○	○		できた	
看護援助学総合演習	2	後期	必修	1	長嶺めぐみ	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○		○	○			○	○	○		できた	
基礎看護学特論	4	後期	選択	1	堀込 由紀	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○				○	○	○				○	プレゼンテーション	できた	
地域・在宅看護学概論	1	後期	必修	1	齋藤 基	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○			○	○		○		○		できた	
成人看護学総論	1	後期	必修	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○					ゲストスピーカーの招聘	○	○	○	○			○		○		できた	
成人看護学総論	2	前期	必修	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○		○				○	○	○	○			○				できた	
成人看護方法論Ⅰ	2	後期	必修	1	堀越 政孝	シラバスに沿って実施した		○					○		○	○	○	○	○		○				できた	
成人看護方法論Ⅱ	3	前期	必修	1	金子 吉美	シラバスに沿って実施した		○					○		○	○	○	○	○		○				できた	
周手術期看護論	3	前期	必修	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○	○	○	○	○		○			授業時間外に中間試験を実施	できた	
クリティカルケア看護論	3	前期	必修	1	堀越 政孝	シラバスに沿って実施した		○				○	○		○	○	○	○	○		○				できた	
成人看護学演習	3	前期	必修	1	金子 吉美	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○		○	実技試験	できた	
救急法	3	前期	選択	1	小池菜穂子	シラバスに沿って実施した		○				○			○		○	○			○				できた	
成人看護学特論	4	後期	選択	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○		○		○	ゲストスピーカーの招聘			○	○	○				○		できた	
老年看護学総論	1	後期	必修	1	関 妙子	シラバスに沿って実施した		○	○			○		高齢者へのライフヒストリー・インタビューを課題とした	○	○		○			○		○		できた	
老年看護学総論	2	前期	必修	1	関 妙子	シラバスに沿って実施した		○	○			○			○	○		○			○		○		できた	

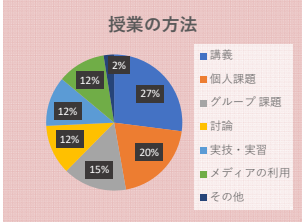
看護学部 看護学科 教育活動の記録（専任教員）

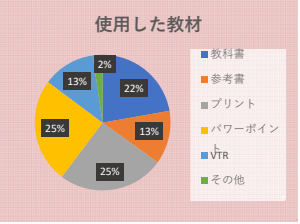
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
老年看護方法論Ⅱ	2	後期	必修	1	傳谷 典子	シラバスに沿って実施した	一部順序を入れ替えた	○	○				○		○	○	○	○	○		○		○		できた	
老年看護学演習	3	前期	必修	1	傳谷 典子	シラバスに沿って実施した	一部順序を入れ替えた	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○		○		できた	
老年看護学特論	4	後期	選択	1	関 妙子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○				○	○	○				○	課題発表（資料作成・討議参加姿勢等）	できた	
小児看護学総論	2	前期	必修	1	中下 富子	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○	○			○		○		できた	
小児看護方法論	2	後期	必修	1	中下 富子	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○		○	○	○		○	○	○		できた	
小児看護学特論	4	後期	選択	1	中下 富子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○					○	○				○		できた	
母性看護学総論	2	前期	必修	1	中島久美子	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○	○	○	○	○		○				できた	
母性看護方法論	3	前期	必修	1	堀越 摂子	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○			○	○			できた	
母子の健康支援	2	前期	必修	1	早川 有子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○	○	○	○			○				できた	
母性看護学演習	3	前期	必修	1	堀越 摂子	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○	○	○	○	○		○		○		できた	
母性看護学特論	4	後期	選択	1	早川 有子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○	○						○		できた	
精神保健	1	後期	必修	1	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○	○		○			定期試験に加え講義後に提出するレフレクションシートを30%評価に加えた	できた	
精神保健	2	前期	必修	1	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○	○		○			定期試験に加え講義後に提出するレフレクションシートを30%評価に加えた	できた	
精神看護学総論	2	前期	必修	1	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○	○		○			定期試験に加え講義後に提出するレフレクションシートを30%評価に加えた	できた	
精神看護方法論	2	後期	必修	1	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○	○		○			定期試験に加え講義後に提出するレフレクションシートを30%評価に加えた	できた	
精神看護学演習	3	前期	必修	1	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○						○	○			○			定期試験に加え講義後に提出するレフレクションシートと演習課題（個人・グループ）を30%評価に加えた	できた	
精神看護学特論	4	後期	選択	1	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○			○					○	○	○	○				○	定期試験に加え講義後に提出するレフレクションシートを30%評価に加えた	できた	
在宅看護学概論	2	前期	必修	1	齋藤 基	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○			○	○		○				できた	
在宅看護方法論Ⅰ	2	後期	必修	1	反町 真由	シラバスに沿って実施した		○		○	○		○	発表	○		○	○	○		○	○		グループワーク	できた	
在宅看護方法論Ⅱ	3	前期	必修	2	反町 真由	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	発表	○		○	○	○		○	○	○		できた	
看護学への誘い	1	前期	必修	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○						○	○					○		できた	
多職種理解と連携	1	後期	必修	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○				○		できた	
国際看護論	3	前期	必修	1	長嶺めぐみ	シラバスに沿って実施した		○		○	○		○		○	○		○		トランプ	○				できた	
災害看護論	3	前期	必修	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○			○				○	○		○	○		○		○		できた	
臨床看護管理学	4	前期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した		○	○		○		○		○	○	○	○			○		○		できた	
公衆衛生看護学概論	2	後期	必修	2	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○	○	○	○	○		○		○		できた	
公衆衛生看護方法論	2	後期	選択	2	廣田 幸子	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○		○		○	○	○		○		○		できた	
公衆衛生看護活動展開論	4	前期	選択	2	小林亜由美	シラバスに沿って実施した		○		○	○	○		見学	○	○	○	○		行政資料、インターネット	○		○	成果発表	できた	
対象別公衆衛生看護活動論Ⅰ	3	前期	選択	1	廣田 幸子	シラバスに沿って実施した		○					○		○		○	○	○		○				できた	
対象別公衆衛生看護活動論Ⅱ	3	前期	選択	1	廣田 幸子	シラバスに沿って実施した		○					○		○		○	○	○		○				できた	
公衆衛生看護管理	4	前期	選択	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○		○	○				○			○			○		○		できた	
助産学概論	4	前期	選択	1	早川 有子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○	○	○	○			○				できた	
母子と家族の心理・社会学	4	前期	選択	1	中島久美子	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○	○	○	○	○		○		○	実技	できた	
助産基礎医学	4	前期	選択	1	早川 有子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○		○	○	○	○			○				できた	
妊娠期助産診断技術学	4	前期	選択	1	堀越 摂子	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○	○	○	○			○		○		できた	
分娩期助産診断技術学	4	前期	選択	2	中島久美子	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○	○	○	○			○		○		できた	
産褥期助産診断技術学	4	前期	選択	1	堀越 摂子	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○	○	○	○			○		○		できた	

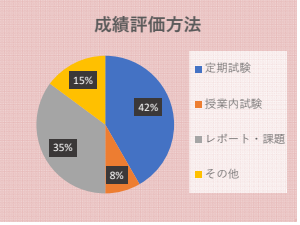
看護学部 看護学科 教育活動の記録（専任教員）

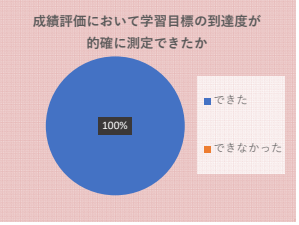
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
新生児・乳幼児期助産診断技術学	4	前期	選択	1	堀越 摂子	シラバスに沿って実施した		○	○			○			○	○	○	○			○		○		できた	
助産診断技術学演習	4	前期	選択	2	中島久美子	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○		○	○	○	○	○		○			実技	できた	
助産管理	4	後期	選択	2	早川 有子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○		○	○	○	○			○				できた	
看護基礎実習	1	後期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した						○												評価表	できた	
基礎看護学実習Ⅱ	2	前期	必修	2	萩原 一美	シラバスに沿って実施した						○												評価表	できた	
成人看護学慢性期実習	3	後期	必修	3	堀越 政孝	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○	○		○	○	○					○	○		できた	
成人看護学急性期実習	3	後期	必修	3	萩原 英子	シラバスに沿って実施した			○		○	○			○	○	○	○					○	実習評価表に基づき評価	できた	
老年看護学実習	3	後期	必修	4	傳谷 典子	シラバスに沿って実施できなかった	コロナ対応として実習方法を変更した		○	○	○	○	○		○	○	○		○					実習評価	できた	
小児看護学実習	3	後期	必修	2	中下 富子	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○	○		○	○	○	○	○				○		できた	
母性看護学実習	3	後期	必修	2	堀越 摂子	シラバスに沿って実施できなかった	COVID-19のため、実習スケジュールを一部変更した		○	○	○	○	○		○	○	○		○	タブレット			○	実習における態度等	できた	実習評価項目
精神看護学実習	3	後期	必修	2	西川 薫	シラバスに沿って実施できなかった	学内実習に変更になったため一部、未実施					○					○		○					実習目標に基づいた評価（事前課題、最終レポート含む）	できた	
在宅看護学実習	4	前期	必修	2	反町 真由	シラバスに沿って実施した	スケジュール一部変更(コロナ対策)		○	○	○	○	○				○	○	○				○	実習到達目標に基づいた評価表	できた	
総合実習	4	前期	必修	2	中島久美子	シラバスに沿って実施した			○	○		○	○		○		○						○		できた	
公衆衛生看護学実習	4	後期	選択	5	小林亜由美	シラバスに沿って実施した	実習要項に沿って実施した	○	○	○	○	○		ZOOM			○	○		行政資料			○	口頭試問	できた	
助産学実習	4	後期	選択	11	中島久美子	シラバスに沿って実施した			○	○		○			○	○	○						○		できた	
看護研究概説	3	前期	必修	1	小林亜由美	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○	○		インターネット	○		○		できた	
卒業研究	4	通年	必修	4	中島久美子	シラバスに沿って実施した			○	○				調査／成果発表									○		できた	









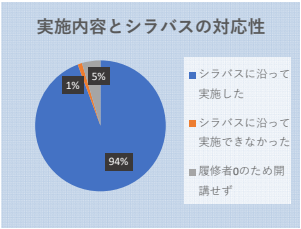


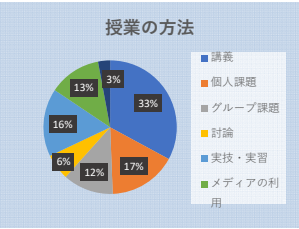
リハビリテーション学部 理学療法学科 教育活動の記録（専任教員）

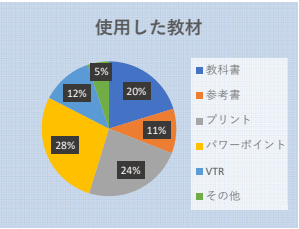
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
心理学	1	後期	必修	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○					○		できた	
教育心理学	1	後期	選択	2	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○				○		できた	
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○	○			できた	
健康スポーツ実技	1	後期	必修	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した						○								ホワイトボード		○			できた	
生命倫理	3	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○							○			○				できた	
人工知能・ロボットと社会	1	前期	必修	2	佐藤 満	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○					○	○	Webサイト		○	○	プレゼンテーション	できた	
人間関係・コミュニケーション論	2	後期	必修	1	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○					○	○					○		できた	
基礎物理学	1	前期	必修	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○									○			自作ノート	○		○		できた	
物理学	1	前期	必修	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○									○			自作ノート	○		○		できた	
医療英語会話	1	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○			○			○	○		プレゼンテーション	できた	
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	履修者0のため開講せず																				
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	前期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○		○				○	○	○		できた	
データサイエンス入門	1	後期	選択	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○			○			○		○		できた	
大学の学び入門	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○	○							○	○					○		できた	
大学の学び－専門への誘い－	1	後期	必修	1	佐藤 満	シラバスに沿って実施した		○		○	○						○	○					○		できた	
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	佐藤 満	シラバスに沿って実施した		○									○	○					○		できた	
運動器解剖学	1	前期	必修	2	後藤 遼佑	シラバスに沿って実施した	授業進度が遅く、一部を変更	○							○		○	○			○				できた	
臓器解剖学	1	後期	必修	2	後藤 遼佑	シラバスに沿って実施した	授業進度が遅く、一部を変更	○							○		○	○			○				できた	
局所解剖学（言語・聴覚・発声・嚥下）	2	後期	選択	1	浅見知市郎	履修者0のため開講せず																				
解剖学演習	2	前期	必修	1	後藤 遼佑	シラバスに沿って実施した		○				○			○			○			○				できた	
表面解剖学と触診法	1	後期	必修	1	浅田 春美	シラバスに沿って実施した		○		○		○			○	○	○	○		骨模型	○	○			できた	
生理学Ⅰ	1	前期	必修	2	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○	○		○	○			できた	
生理学Ⅱ	1	後期	必修	2	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○	○		○		○		できた	
生理学実習	2	前期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○	○		○	○	実習書	○		○		できた	
生化学	1	後期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○			○					
運動学	1	後期	必修	2	高橋 正明	シラバスに沿って実施した		○					○		○	○	○	○	○	自作の力学教材のデモ	○				できた	
臨床運動学	2	後期	必修	2	浅田 春美	シラバスに沿って実施できなかった	コロナによる休講等あり	○				○			○	○		○	○		○		○		できた	
運動学実習	2	前期	必修	1	岡崎 大資	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○				○	○	○			○	○	○		できた	
人間発達学	2	前期	必修	1	橋口 優	シラバスに沿って実施した		○				○			○		○	○							できた	
生涯発達心理学	2	後期	選択	2	齊藤 吉人	履修者0のため開講せず																				
学習・認知心理学	2	前期	選択	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○					○	○					○		できた	
心理測定法	2	前期	選択	2	榎本 光邦	履修者0のため開講せず																				
病理学	1	後期	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○				できた	
薬理学	2	前期	必修	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
臨床薬学	2	後期	必修	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
公衆衛生学	1	前期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
臨床検査・画像診断学演習	2	後期	必修	1	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
臨床医学関連領域論	2	後期	必修	1	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○					○				○	○	○		○			問題・質問への解答	できた	
整形外科学	2	前期	必修	1	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○					○		○		○	○	○		○			問題・質問への解答	できた	
神経内科学	2	前期	必修	1	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○					○				○	○	○		○			問題・質問への解答	できた	
精神医学	3	前期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○	○		○				できた	
リハビリテーション医学	2	後期	必修	2	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○					○				○	○	○		○			問題・質問への解答	できた	
救急・免疫・感染症学	3	前期	必修	1	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○							○		○				○	○			できた	
緩和医療学	3	前期	必修	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○				○				○	○	○	教科書指定せず		○	○		できた	
リハビリテーション概論	1	前期	必修	1	佐藤 満	シラバスに沿って実施した		○	○								○	○			○				できた	
リハビリテーション関連領域論	3	前期	必修	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○				○					○	○	○		○				できた	
チーム医療とリハビリテーション	1	後期	必修	1	岡崎 大資	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○						○	○					○		できた	
臨床心理学	2	前期	必修	1	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○					○		できた	
医療統計学	2	前期	必修	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○	PCの使用	○		○	○	○	教科書参照ページ示唆	○		○		できた	問題難易度がマッチした
社会福祉・地域サービス論	2	後期	必修	1	金谷 春代	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○		○	○			○			ミニッツペーパー	できた	

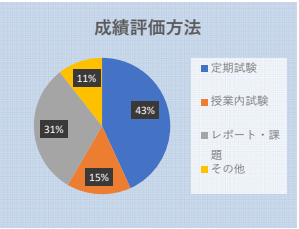
リハビリテーション学部 理学療法学科 教育活動の記録（専任教員）

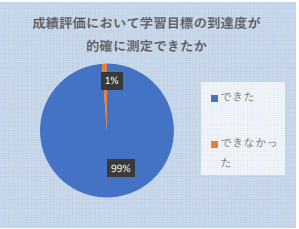
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
理学療法概論	1	前期	必修	1	木村　朗	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	○		できた	
理学療法特論	4	後期	必修	1	目黒　力	シラバスに沿って実施した		○		○	○		○			○	○	○					○		できた	
障害と理学療法	1	後期	必修	1	佐藤　満	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○		○	○	○			○	○		できた	
理学療法研究論	3	後期	必修	1	木村　朗	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	○		できた	
障害者スポーツ・レクリエーション論	1	前期	選択	1	城下　貴司	シラバスに沿って実施した		○				○	○				○	○	○				○		できた	
生体計測工学	3	後期	必修	1	目黒　力	シラバスに沿って実施した		○		○		○	○		○		○	○			○				できた	
支援工学	3	前期	選択	1	目黒　力	シラバスに沿って実施した		○	○							○		○	○				○		できた	
国際理学療法学	2	後期	選択	1	高橋　正明	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○				○		○					プレゼンテーション	できた	
卒業研究	4	後期	選択	2	木村　朗	シラバスに沿って実施した	多様性あり	○	○	○	○		○	多様性あり	○	○	○	○		研究の遂行		○	○		できなかった	多様性あり
理学療法管理学	3	後期	必修	2	岡崎　大資	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○		○		できた	
理学療法管理学	4	後期	選択	1	岡崎　大資	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○		○		できた	
理学療法診断学	1	後期	必修	1	加茂　智彦	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○		○	○	○	○	○		○	○			できた	
基礎理学療法診断学演習	2	前期	必修	1	黒川　望	シラバスに沿って実施した		○	○			○			○		○	○			○			実技試験	できた	
運動機能系理学療法診断学演習	2	前期	必修	1	城下　貴司	シラバスに沿って実施した		○				○	○		○	○	○	○	○		○	○			できた	
神経機能系理学療法診断学演習	2	後期	必修	1	鈴木　学	シラバスに沿って実施した		○				○			○			○			○			実技試験	できた	
臨床動作分析学	3	前期	必修	1	高橋　正明	シラバスに沿って実施した		○		○		○	○		○	○	○	○	○		○	○	○		できた	
基礎運動療法	2	前期	必修	1	田辺　将也	シラバスに沿って実施した		○				○	○		○	○		○	○		○				できた	
運動機能系理学療法治療学演習	2	後期	必修	1	城下　貴司	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○		○	○	○	○	○		○	○	○		できた	
脊髄疾患理学療法学演習	3	前期	必修	1	城下　貴司	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○		○	○	○	○	○		○	○	○		できた	
神経機能系理学療法治療学演習Ⅰ	2	後期	必修	1	鈴木　学	シラバスに沿って実施した		○				○			○			○			○			実技試験	できた	
神経機能系理学療法治療学演習Ⅱ	3	前期	必修	1	鈴木　学	シラバスに沿って実施した		○				○			○			○			○				できた	
内部機能系理学療法治療学演習	3	後期	必修	1	木村　朗	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	SMBG機器	○	○	○		できた	
発達支援理学療法学	3	後期	必修	1	橋口　優	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○							できた	
理学療法特殊講義	3	後期	必修	1	木村　朗	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	多様性あり	○	○	○	○	○	多様性あり	○	○			できた	
物理療法学	2	後期	必修	2	黒川　望	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○			○		○		できた	
物理療法学演習	3	前期	必修	1	目黒　力	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○	○	○				○		○		できた	
装具学	3	前期	必修	2	橋口　優	シラバスに沿って実施した		○	○			○			○		○	○							できた	
スポーツ理学療法学	3	後期	必修	1	城下　貴司	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○	○		○	○	○	○	○		○	○	○		できた	
日常生活活動学	2	後期	必修	2	浅田　春美	シラバスに沿って実施した		○		○		○			○	○		○		杖、車いす	○		○		できた	
高齢者理学療法学演習	3	後期	必修	1	岡崎　大資	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○			○		○	○					○		できた	
地域理学療法学	3	前期	必修	2	岡崎　大資	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○	○		○		○		できた	
生活環境学	3	前期	必修	2	目黒　力	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○			○			○		○		できた	
環境理学療法学	3	後期	必修	2	目黒　力	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○		○			○			○		○		できた	
見学実習	2	後期	必修	1	浅田　春美	シラバスに沿って実施した								学外実習										学外実習成績・学内教員ルーブリック	できた	
評価学実習	3	後期	必修	5	橋口　優	シラバスに沿って実施した						○												OSCE/成果報告会	できた	
地域理学療法実習	3	後期	必修	1	浅田　春美	シラバスに沿って実施できなかった	実習施設内の感染拡大により期間変更など							学外実習										学外実習成績・学内教員ルーブリック	できた	
総合臨床実習Ⅰ	4	前期	必修	7	鈴木　学	シラバスに沿って実施した			○			○		学外・学内		○							○		できた	
総合臨床実習Ⅱ	4	前期	必修	7	鈴木　学	シラバスに沿って実施した			○			○		学外・学内		○							○		できた	









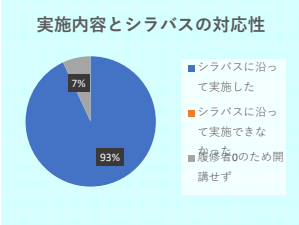


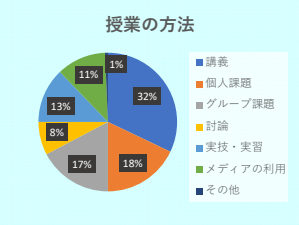
リハビリテーション学部 作業療法学科 教育活動の記録（専任教員）

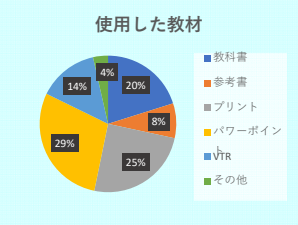
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
心理学	1	後期	必修	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○					○		できた	
教育心理学	1	後期	選択	2	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○				○		できた	
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○	○			できた	
健康スポーツ実技	1	後期	必修	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した						○								ホワイトボード		○			できた	
人工知能・ロボットと社会	1	後期	必修	2	佐藤 満	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○					○	○	Webサイト		○	○	プレゼンテーション	できた	
人間関係・コミュニケーション論	2	後期	必修	1	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○					○	○					○		できた	
基礎物理学	1	前期	選択	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○									○			自作ノート	○				できた	
物理学	1	前期	選択	1	山﨑 真	履修者0のため開講せず																				
医療英語会話	1	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○			○			○	○		プレゼンテーション	できた	
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	履修者0のため開講せず																				
データサイエンス入門	1	後期	選択	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○			○			○		○		できた	
大学の学び入門	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○	○							○	○					○		できた	
大学の学び－専門への誘い－	1	後期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した			○	○	○						○	○	○				○		できた	
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○		○	○		○				○	○	○				○	グループ発表	できた	
運動器解剖学	1	前期	必修	2	後藤 遼佑	シラバスに沿って実施した	授業進度が遅く、一部を変更	○							○		○	○			○				できた	
臓器解剖学	1	後期	必修	2	後藤 遼佑	シラバスに沿って実施した	授業進度が遅く、一部を変更	○							○		○	○			○				できた	
局所解剖学（言語・聴覚・発声・嚥下）	2	後期	選択	1	浅見知市郎	履修者0のため開講せず																				
解剖学演習	2	前期	必修	1	後藤 遼佑	シラバスに沿って実施した		○				○			○			○			○				できた	
生理学Ⅰ	1	前期	必修	2	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○	○		○	○			できた	
生理学Ⅱ	1	後期	必修	2	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○	○		○		○		できた	
生理学実習	2	前期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○	○		○	○	実習書	○		○		できた	
運動学	1	後期	必修	2	高橋 正明	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○		自作力学教材の利用	○				できた	
運動学実習	2	前期	必修	1	岡崎 大資	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○				○	○	○			○	○	○		できた	
生化学	1	後期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○			○				できた	
人間発達学	2	前期	必修	1	吉岡 和哉	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○	○		○			○	○		○		○		できた	
生涯発達心理学	2	後期	選択	2	齊藤 吉人	履修者0のため開講せず																				
学習・認知心理学	2	前期	選択	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○					○	○					○		できた	
心理測定法	2	前期	選択	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○					○		できた	
病理学	1	後期	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○				できた	
薬理学	2	前期	必修	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
臨床薬学	2	後期	選択	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
公衆衛生学	1	前期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
臨床検査・画像診断学演習	2	後期	必修	1	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
臨床医学関連領域論	2	後期	必修	1	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○					○				○	○	○		○			問題・質問への解答	できた	
整形外科学	2	前期	必修	1	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○					○		○		○	○	○		○			問題・質問への解答	できた	
神経内科学	2	前期	必修	1	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○					○				○	○	○		○			問題・質問への解答	できた	
精神医学Ⅰ	2	前期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○	○		○				できた	
精神医学Ⅱ	2	後期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○		○					○		○	○	○		○				できた	
リハビリテーション医学	2	後期	必修	2	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○					○				○	○	○		○			問題・質問への解答	できた	
リハビリテーション概論	1	前期	必修	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○					○				○	○	○		○				できた	
チーム医療とリハビリテーション	1	後期	必修	1	馬場 順子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○				○	○					○	参加態度	できた	
臨床心理学	2	前期	必修	1	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○					○		できた	
社会福祉・地域サービス論	2	後期	必修	1	金谷 春代	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○		○	○			○			ミニッツペーパー	できた	
医療統計学	2	前期	必修	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○	PCの使用	○		○	○	○	教科書参照ページ示唆	○		○		できた	問題難易度がマッチした
作業療法学概論	1	前期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○				できた	
基礎作業学	1	前期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○	○	○	○			○		○		できた	
基礎作業学演習	1	後期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○			○	○	○	○			○		○		できた	
基礎作業学実習	2	前期	必修	1	岡田 直純	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○	○			○	○		できた	
作業療法管理学Ⅰ	2	前期	必修	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○		○		○	○	○				○		できた	
作業療法評価学	1	後期	必修	2	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○		○		できた	

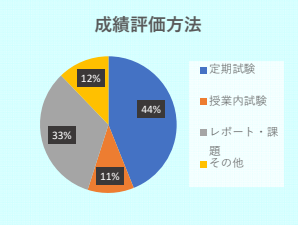
リハビリテーション学部 作業療法学科 教育活動の記録（専任教員）

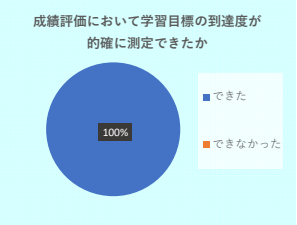
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
作業療法評価学演習	2	前期	必修	1	宮寺 寛子	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○	○	○	○			○		○		できた	
作業療法評価学実習	2	後期	必修	1	岡田 直純	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○	○		○		○	○	○			○	○		できた	
身体領域の作業療法学	2	後期	必修	2	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○		○		できた	
精神領域の作業療法学	2	後期	必修	2	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○	○			○			できた	
発達領域の作業療法学	2	後期	必修	1	吉岡 和哉	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○	○		○	○		○		○		できた	
日常生活活動学	2	前期	必修	1	宮寺 寛子	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○		○	○			○		○		できた	
見学実習	2	後期	必修	2	宮寺 寛子	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○			○	○	○	○	○					発表	できた	







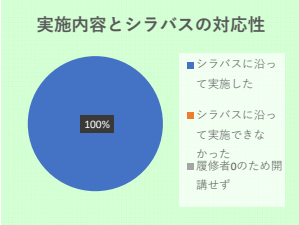


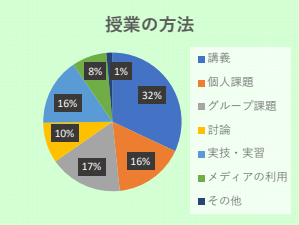


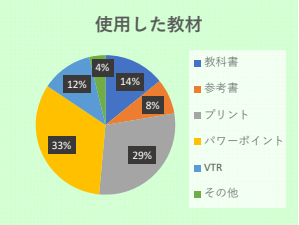
リハビリテーション学部 言語聴覚学科 教育活動の記録（専任教員）

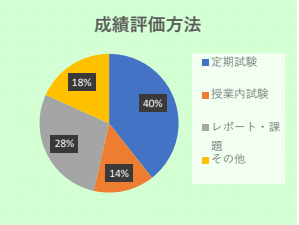
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
心理学	1	後期	選択	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○					○		できた	
教育心理学	1	後期	選択	2	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○				○		できた	
健康スポーツ理論	1	前期	必修	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○	○			できた	
健康スポーツ実技	1	後期	必修	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した						○								ホワイトボード		○			できた	
人工知能・ロボットと社会	1	後期	必修	2	佐藤 満	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○					○	○	Webサイト		○	○	プレゼンテーション	できた	
人間関係・コミュニケーション論	2	後期	必修	1	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○					○	○					○		できた	
基礎物理学	1	前期	選択	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○									○			自作ノート	○				できた	
物理学	1	前期	選択	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○									○			自作ノート	○				できた	
医療英語会話	1	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○			○			○	○		プレゼンテーション	できた	
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○					○				○	○		プレゼンテーション	できた	
データサイエンス入門	1	後期	選択	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○			○			○		○		できた	
大学の学び入門	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○	○							○	○					○		できた	
大学の学び－専門への誘い－	1	後期	必修	1	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○		○	○	○				○	○	○					○		できた	
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○				○					○	○			○				できた	
医学概論	1	前期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
解剖学総論	1	前期	必修	1	後藤 遼佑	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
局所解剖学（言語・聴覚・発声・嚥下）	1	後期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
基礎生理学	1	前期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○	○		○				できた	
基礎病理学	1	後期	必修	1	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○				できた	
医療危機管理（窒息・誤嚥・吸引含む）	1	後期	必修	1	佐田 充	シラバスに沿って実施した		○										○			○				できた	
精神医学	1	前期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○	○			○			できた	
リハビリテーション医学	2	後期	必修	2	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○					○				○	○	○		○			問題・質問への解答	できた	
リハビリテーション関連領域実技実習	1	前期	必修	1	浅田 春美	シラバスに沿って実施した		○				○				○	○	○			○			実技試験	できた	
神経内科学	2	前期	必修	1	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○					○				○	○	○		○			問題・質問への解答	できた	
脳神経外科学	2	前期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○										○			○				できた	
臨床心理学	2	後期	必修	1	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○					○		できた	
生涯発達心理学	1	後期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○	○				○				○	○	○		○		○		できた	
学習・認知心理学	2	後期	必修	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○					○	○					○		できた	
言語学	1	後期	必修	2	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○			○		○	○	○		○				できなかった	
音声学	2	前期	必修	2	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○			○		○	○	○		○				できた	
言語発達学	2	前期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○		○					○	○			○				できた	
ICFとリハビリテーション	1	前期	必修	1	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○							○	○					○		できた	
チーム医療とリハビリテーション	1	後期	必修	1	神山 政恵	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○			○		○		学生は各自で参考書を用いた			○	グループ発表	できた	測定できた
社会福祉制度・関連法規	1	後期	必修	1	金谷 春代	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○		○	○			○			ミニッツペーパー	できた	
言語聴覚障害学概論	1	前期	必修	1	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○					○	○					○		できた	
言語聴覚障害学演習	1	前期	必修	1	神山 政恵	シラバスに沿って実施できなかった	ICFとリハビリテーションと統合して実施	○	○	○	○	○	○	ゼミごとの学修あり		○	○	○	○				○	グループ発表	できた	測定できた
言語聴覚障害診断学	1	後期	必修	1	神山 政恵	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○	ゼミごとの学修あり		○	○	○	○				○	グループ発表	できた	測定できた
地域リハビリテーション学	1	前期	必修	1	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○							○	○					○		できた	
失語症学	2	前期	必修	2	三浦 康子	シラバスに沿って実施した	シラバス作成後ゲストスピーカー決定の為,若干変更となったがバージョンアップと考える	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○		○	○	○		できた	
高次脳機能障害学	2	後期	必修	2	神山 政恵	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○	○		○	○	○	○			○	○	○		できた	測定できた
言語発達障害学	2	後期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○	○			○				できた	
病理音声学	2	前期	必修	2	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○			○		○	○	○		○				できた	
発声発語・嚥下障害評価法	2	後期	必修	2	三浦 康子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○		できた	
聴覚障害学	2	前期	必修	2	岡野 由実	シラバスに沿って実施した		○		○	○					○	○	○	○				○		できた	
聴覚検査法	2	後期	必修	2	岡野 由実	シラバスに沿って実施した		○	○			○			○		○	○	○		○	○			できた	
地域参加支援演習Ⅰ	2	後期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○	○						○	○						グループ活動への貢献度	できた	
見学実習	1	後期	必修	1	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○				○					○	○						実習評価票	できた	
観察実習	2	後期	必修	3	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○				○					○	○						実習評価票	できた	

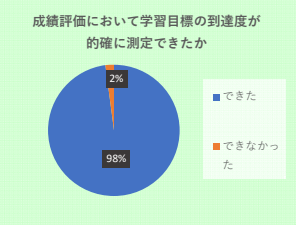
リハビリテーション学部 言語聴覚学科 教育活動の記録（専任教員）









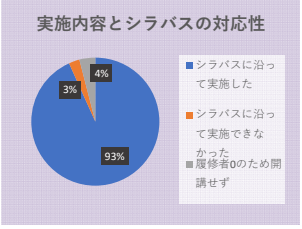


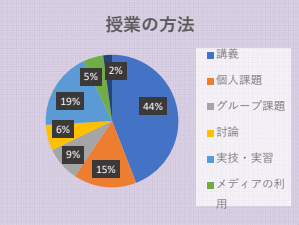
医療技術学部 検査技術学科 教育活動の記録（専任教員）

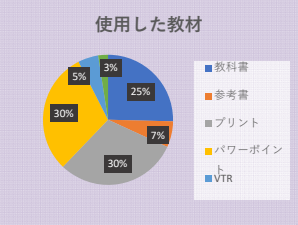
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
心理学	1	後期	選択	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○					○		できた	
教育心理学	1	後期	選択	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○		○	○					○		できた	
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○	○				○	○	○			○	○	プレゼンテーション	できた	
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○					○			板書		○	○		できた	
生命倫理	2	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○							○			○				できた	
基礎物理学	1	前期	選択	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○									○			自作ノート	○		○		できた	
物理学	1	後期	選択	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○									○			自作ノート	○		○		できた	
医療英語会話	1	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○			○			○			○	○		プレゼンテーション	できた	
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○					○				○	○		プレゼンテーション	できた	
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	前期	選択	1	David Andrews	履修者0のため開講せず																				
データサイエンス入門	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																				
大学の学び入門	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○	○							○	○					○		できた	
大学の学び－専門への誘い－	1	前期	必修	1	亀子 光明	シラバスに沿って実施した				○	○		○	各自テーマの検索									○	テーマ発表	できた	
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	長田 誠	シラバスに沿って実施できなかった		○									○	○					○		できた	
解剖学Ⅰ	1	前期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
解剖学Ⅱ	1	後期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
解剖学実習	2	通年	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○				○			○	○	○	○				○	○		できた	
生理学Ⅰ	1	前期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○	○		○	○			できた	
生理学Ⅱ	1	後期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○	○		○		○		できた	
生化学	1	後期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○			○	○			できた	
基礎発生工学	1	前期	必修	1	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○	○									○			○		○		できた	
病理学	1	後期	必修	1	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○				できた	
薬理学	2	前期	必修	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
遺伝と病気	1	後期	選択	1	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○	○			できた	
感染と免疫	1	後期	必修	1	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○			○	○			できた	
健康食品学	3	前期	選択	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○	○			できた	
生殖医療技術学	2	後期	選択	2	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○	○			○					○	○	○		○		○		できた	
医学概論	1	前期	必修	2	古田島伸雄	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○	○			できた	
公衆衛生学	1	前期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
カウンセリング	2	前期	選択	1	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○				○		できた	
臨床心理学	1	後期	選択	1	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○		○	○	○	○	○				○		できた	
社会福祉・地域サービス論	2	後期	選択	1	金谷 春代	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○		○	○			○			ミニッツペーパー	できた	
医用電子工学	2	後期	必修	1	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○	○			できた	
医用電子工学実習	2	後期	必修	1	木村 博一	シラバスに沿って実施した						○			○			○			○		○		できた	
医療システムとマネージメント	2	後期	選択	1	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○	○			○				できた	
情報科学概論	3	後期	必修	2	長田 誠	シラバスに沿って実施できなかった		○							○		○	○			○				できた	
生体計測工学	3	後期	選択	1	目黒 力	履修者0のため開講せず																				
医療統計学	1	前期	必修	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○	PCの使用	○		○	○	○	教科書参照ページ示唆	○		○		できなかった	問題難易度がマッチせず
医療統計学	2	前期	選択	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○	PCの使用	○		○	○	○	教科書参照ページ示唆	○		○		できた	問題難易度がマッチした
臨床検査解析学（Reversed CPC） Ⅰ	3	前期	必修	1	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○		○	○						○	○			○				できた	
臨床検査解析学（Reversed CPC） Ⅱ	3	後期	必修	1	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○		○	○				○		○	○			○				できた	
臨床検査医学	2	後期	必修	2	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
電気泳動分析病態解析学	3	後期	必修	2	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○				○				○	○	○			○		○		できた	
ピットフォール解析学	3	前期	必修	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○			○					○	○	○			○				できた	
血液検査学	2	通年	必修	2	林 由里子	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○	○			できた	
血液検査学実習	3	前期	必修	2	林 由里子	シラバスに沿って実施した						○			○		○	○			○		○		できた	
病理細胞検査学	2	通年	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
病理細胞検査学実習	3	後期	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○	○			○			○	○	○				○		○		できた	
臨床検査学総論	2	通年	必修	2	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○							○		○				○	○			できた	
臨床検査学総論実習	2	後期	必修	2	藤本 友香	シラバスに沿って実施した		○	○			○			○		○	○			○		○		できた	
医動物学実習	1	後期	必修	1	藤本 友香	シラバスに沿って実施した		○	○			○			○		○	○	○		○	○	○		できた	

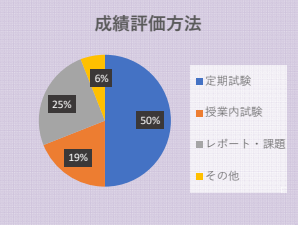
医療技術学部 検査技術学科 教育活動の記録（専任教員）

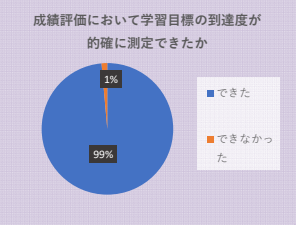
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
免疫検査学	2	通年	必修	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○			○				○	○	○	○			○	○			できた	
免疫検査技術学実習	3	前期	必修	2	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○				○			○		○	○			○		○		できた	
臨床化学検査学	2	通年	必修	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○	○	○		できた	
臨床化学検査学実習	3	後期	必修	2	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した						○			○		○	○			○	○	○		できた	
RI検査学	3	後期	必修	1	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○	○			できた	
食品衛生学	3	前期	選択	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○	○			できた	
遺伝子検査学	2	前期	必修	2	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
遺伝子検査学実習	2	後期	必修	2	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○				○					○	○			○		○		できた	
遺伝子工学	3	前期	選択	1	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○	○			○				できた	
輸血検査学	3	後期	必修	1	林 由里子	シラバスに沿って実施した		○				○			○		○	○			○				できた	
微生物検査学	2	通年	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
微生物検査学実習	3	前期	必修	2	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○	○			○			○		○	○				○	○		できた	
生理機能画像検査学	2	通年	必修	2	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
生理機能画像検査学実習	3	前期	必修	2	長田 誠	シラバスに沿って実施した						○			○		○	○				○	○		できた	
画像解析検査学	3	前期	必修	2	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
関係法規	1	前期	必修	2	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
関係法規	3	前期	必修	1	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
臨床検査学総合演習Ⅰ	3	後期	必修	3	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○			○				できた	
臨床検査学総合演習Ⅱ	4	後期	必修	4	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○			○				できた	
医療安全管理学演習	2	前期	必修	1	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○	○			○			○		○	○	○		○				できた	
医療機器管理学	1	後期	必修	1	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
臨地実習	4	前期	必修	7	長田 誠	シラバスに沿って実施した						○					○				○			臨地実習先の評価	できた	
卒業研究	4	通年	必修	8	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した				○	○	○					○	○						発表・論文	できた	









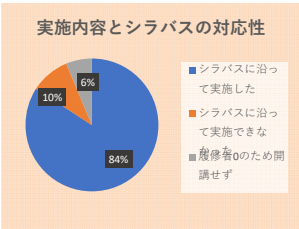


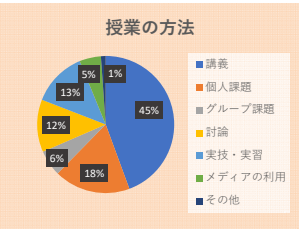
医療技術学部 放射線学科 教育活動の記録（専任教員）

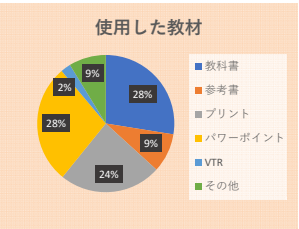
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
心理学	1	後期	選択	2	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○		○	○	○	○	○				○		できた	
教育心理学	1	後期	選択	2	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○				○		できた	
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○	○				○	○	○			○	○	プレゼンテーション	できた	
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○					○			板書		○	○		できた	
生命倫理	2	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○							○			○				できた	
基礎数学	1	前期	選択	1	今尾 仁	シラバスに沿って実施した		○									○	○				○			できた	
数学	1	後記	選択	1	今尾 仁	シラバスに沿って実施した		○									○	○				○			できた	
基礎化学	1	前期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施できなかった		○	○						○			○			○		○		できた	
化学	1	後期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施できなかった		○	○						○			○			○		○		できた	
基礎物理学	1	前期	選択	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○									○			自作ノート	○		○		できた	
物理学	1	後期	選択	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○									○			自作ノート	○		○		できた	
英語リーディング	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○		○				○		○	多読（達成語数）	できた	
医療英語リーディング	2	後期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○				○	○	○		できた	
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	履修者0のため開講せず																				
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	前期	選択	1	杉田 雅子	履修者0のため開講せず																				
情報処理	1	前期	選択	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○			○			○		○		できた	
情報リテラシー	1	後期	選択	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○			○				○	○		できた	
データサイエンス入門	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																				
大学の学び入門	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○	○							○	○					○		できた	
大学の学び－専門への誘い－	1	後期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○		○		○	○		○					○		できた	
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○					○		できた	
解剖学Ⅰ	1	前期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
解剖学Ⅱ	1	後期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
薬理学	2	前期	必修	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
生化学	1	前期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○			○				できた	
公衆衛生学	1	後期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
看護技術論	2	後期	必修	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○			○	○					○	○					○	各回のMinutesPaper	できた	
臨床心理学	2	前期	選択	1	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○		○	○	○	○	○				○		できた	
画像診断学Ⅰ	2	後期	選択	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○							○			○		講義資料電子版配布	○				できた	
画像診断学Ⅱ	3	前期	選択	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○							○			○		講義資料電子版配布	○				できた	
医療基礎数学	1	前期	選択	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○				○		○		できた	
医療基礎化学	1	前期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施できなかった		○	○						○			○			○		○		できた	
医療基礎物理学	1	前期	必修	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○							○		○			自作ノート	○		○		できた	
医療電気・電子工学Ⅰ	1	前期	必修	2	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
医療電気・電子工学Ⅱ	1	後期	選択	2	齋藤 祐樹	履修者0のため開講せず																				
医療電気・電子工学演習	2	前期	選択	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○									○						○		できた	
医療電気・電子工学実験	2	後期	必修	1	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した						○					○	○					○		できた	
医療統計学	2	後期	必修	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○		○				○				○		○		できた	
放射線医療学概論	1	前期	必修	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○		○	○				○						○		○		できた	
放射線救急医学	2	後期	選択	1	加藤 英樹	履修者0のため開講せず																				
放射線文献講読Ⅰ	3	前期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施できなかった		○	○								○	○				○	○		できた	
放射線文献講読Ⅱ	3	後期	選択	1	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○	○		○	○					○	○		文献		○	○	プレゼンテーション	できた	
放射線物理学Ⅰ	2	前期	必修	2	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○							○		○			自作ノート	○		○		できた	
放射線物理学Ⅱ	2	後期	必修	2	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○							○		○			自作ノート	○		○		できた	
放射線物理学演習	3	前期	選択	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○									○						○		できた	
放射化学	2	前期	必修	2	酒井 健一	シラバスに沿って実施できなかった		○	○						○			○			○		○		できた	
放射化学演習	2	後期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施できなかった		○	○						○			○			○		○		できた	
放射線生物学	1	後期	必修	2	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
放射線生物学演習	2	前期	選択	1	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
放射線計測学Ⅰ	2	後期	必修	2	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
放射線計測学Ⅱ	3	前期	必修	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○	○			○		○				○		○		できた	

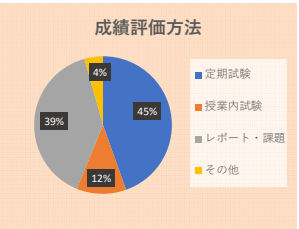
医療技術学部 放射線学科 教育活動の記録（専任教員）

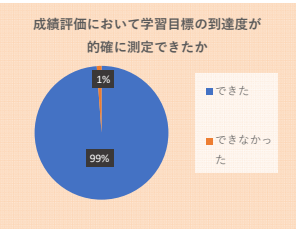
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
放射線計測学演習	3	後期	選択	1	西澤　徹	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
放射線計測学実験	3	前期	必修	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○		○	○	○					○						○		できた	
診療放射線学概論	1	前期	必修	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○		○							○				○		○		できた	
診療画像検査学概論	1	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○							○			○		講義資料電子版配布	○		○		できた	
診療放射線学実習直前演習	3	後期	必修	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○		○	○	○			○	○	○					○	○		できた	
診療放射線学総合臨床実習	4	前期	必修	2	西澤　徹	シラバスに沿って実施できなかった						○													できなかった	
診療画像解析学Ⅰ	1	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○							○			○		講義資料電子版配布	○				できた	
診療画像解析学Ⅱ	2	前期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○							○			○		講義資料電子版配布	○				できた	
診療画像解析学Ⅲ	2	後期	必修	2	谷口 杏奈	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
診療画像解析学演習	3	前期	選択	1	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○	○						○			○		講義資料電子版配布	○	○			できた	
診療画像解析学実習Ⅰ	3	前期	必修	1	谷口 杏奈	シラバスに沿って実施した						○			○		○	○	○		○		○		できた	
診療画像解析学実習Ⅱ	3	前期	必修	1	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した			○			○			○			○		講義資料電子版配布	○		○		できた	
診療画像解析学実習Ⅲ	3	後期	必修	1	今尾　仁	シラバスに沿って実施した						○			○		○	○			○		○		できた	
診療画像解析学特論	3	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○	○		○							○		講義資料電子版配布	○		○		できた	
医療放射線機器学Ⅰ	1	後期	必修	2	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
医療放射線機器学Ⅱ	2	前期	必修	2	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
医療放射線機器学Ⅲ	2	後期	必修	2	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
診療画像解剖学Ⅰ	1	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○	○		講義資料電子版配布	○	○	○		できた	
診療画像解剖学Ⅱ	2	前期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○	○		講義資料電子版配布	○	○	○		できた	
診療画像解析学臨床実習Ⅰ	4	前期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した						○			○								○	実習ノート	できた	
診療画像解析学臨床実習Ⅱ	4	前期	必修	2	谷口 杏奈	シラバスに沿って実施した						○			○	○	○						○		できた	
核医学検査技術学Ⅰ	2	前期	必修	2	渡邉　浩	シラバスに沿って実施した		○			○				○	○	○	○			○	○			できた	
核医学検査技術学Ⅱ	2	後期	必修	2	渡邉　浩	シラバスに沿って実施した		○			○				○	○	○	○			○	○			できた	
核医学機器工学	3	前期	必修	2	渡邉　浩	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○			○	○			できた	
核医学検査技術学演習	3	前期	選択	1	渡邉　浩	シラバスに沿って実施した		○			○	○			○	○	○	○			○		○		できた	
核医学検査技術学実習	3	後期	必修	1	渡邉　浩	シラバスに沿って実施した		○			○	○			○	○	○	○			○		○		できた	
核医学検査技術学臨床実習	4	前期	必修	2	渡邉　浩	シラバスに沿って実施した						○		臨床実習先病院での方式に委ねられている						臨床実習先病院での方式に委ねられている			○		できた	
放射線治療技術学Ⅰ	2	前期	必修	2	岩井 譜憲	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
放射線治療技術学Ⅱ	2	後期	必修	2	岩井 譜憲	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
放射線治療機器工学	3	前期	必修	2	岩井 譜憲	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
放射線治療技術学演習	3	前期	選択	1	岩井 譜憲	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
放射線治療技術学実習	3	後期	必修	1	岩井 譜憲	シラバスに沿って実施した		○				○			○			○			○		○		できた	
放射線治療技術学臨床実習	4	前期	必修	2	岩井 譜憲	シラバスに沿って実施した						○		病院実習	○									実習評価	できた	
放射線情報システム学	3	前期	必修	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○			○				できた	
医療画像情報学演習	3	後期	選択	1	星野 修平	シラバスに沿って実施できなかった		○	○		○					○	○						○		できた	
放射線安全管理学	3	前期	必修	2	島崎 綾子	シラバスに沿って実施した		○			○				○			○			○	○			できた	
診療放射線技師の義務と役割	2	後期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施できなかった		○	○						○	○		○			○		○		できた	
放射線関係法規	2	後期	必修	1	西澤　徹	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
医療安全管理学	3	前期	必修	2	島崎 綾子	シラバスに沿って実施できなかった		○	○		○	○	○		○			○			○		○		できた	
放射線科学特別講義	4	前期	選択	1	倉石 政彦	履修者0のため開講せず																				
診療放射線学総合演習	4	通年	必修	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○							○						○				できた	
診療放射線技術と研究	3	後期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○								○							○		できた	
診療放射線学研究Ⅰ	3	後期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○		○					○		できた	
診療放射線学研究Ⅱ	4	通年	必修	4	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○		○					○		できた	









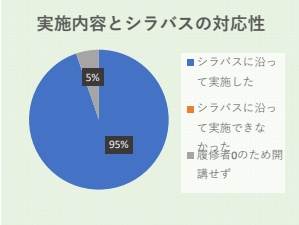


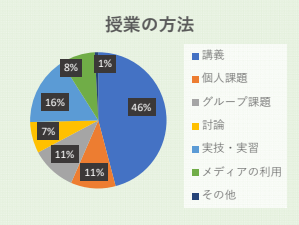
医療技術学部 臨床工学科 教育活動の記録（専任教員）

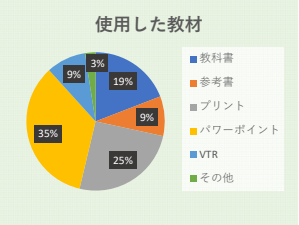
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
心理学	1	後期	必修	2	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○		○	○	○	○	○				○		できた	
教育心理学	1	後期	選択	2	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○				○		できた	
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○	○				○	○	○			○	○	プレゼンテーション	できた	
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○					○			板書		○	○		できた	
生命倫理	2	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○							○			○				できた	
基礎化学	1	前期	必修	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○							○						○				できた	
化学	1	後期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○							○						○				できた	
基礎物理学	1	前期	必修	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○									○			自作ノート	○		○		できた	
物理学	1	後期	選択	1	山﨑 真	シラバスに沿って実施した		○									○			自作ノート	○		○		できた	
英語リーディング	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○				○		○	多読（達成語数）	できた	
医療英語リーディング	2	後期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○				○	○	○		できた	
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	履修者0のため開講せず																				
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	前期	選択	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○						○								○		できた	
情報処理	1	前期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○			○			○		○		できた	
情報リテラシー	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																				
データサイエンス入門	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																				
大学の学び入門	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○	○							○	○					○		できた	
大学の学び－専門への誘い－	1	後期	必修	1	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○		○	○						○						○		できた	
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○										○					○		できた	
解剖学Ⅰ	1	前期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
解剖学Ⅱ	1	後期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
薬理学	1	後期	必修	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○							○						○				できた	
生化学	1	前期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○			○				できた	
公衆衛生学	1	後期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
基礎医学実習	2	後期	必修	1	近土真由美	シラバスに沿って実施した						○					○	○					○		できた	
看護学概論	2	後期	必修	1	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○									○	○					○	毎回提出されるミニッツペーパー	できた	
臨床生理学	2	前期	必修	1	佐田 充	シラバスに沿って実施した		○										○			○				できた	
臨床病理学	2	後期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○							○			○			○				できた	
臨床薬理学	2	後期	必修	1	佐田 充	シラバスに沿って実施した		○										○			○				できた	
臨床心理学	2	前期	選択	1	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○		○	○	○	○	○				○		できた	
臨床検査学総論	2	後期	選択	2	三浦 佑介	履修者0のため開講せず																				
医用電気工学実習	1	後期	必修	1	松岡雄一郎	シラバスに沿って実施した						○					○	○					○		できた	
医用電子工学実習	2	後期	必修	1	松岡雄一郎	シラバスに沿って実施した						○					○	○					○		できた	
計測工学	1	後期	必修	2	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
医用材料工学	2	後期	必修	2	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
医用機械工学	2	前期	必修	2	花田三四郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
医用機械工学演習	2	後期	必修	1	花田三四郎	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○				できた	
医療情報処理工学	2	前期	必修	2	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
医療情報処理工学演習	2	後期	必修	1	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した			○			○					○	○					○		できた	
医用情報通信工学	3	前期	必修	1	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○			○				できた	
基礎工学実験	1	後期	必修	1	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した				○		○					○	○					○		できた	
医用工学概論	1	前期	必修	1	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○				できた	
医用超音波工学	2	前期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○					○					○			○				できた	
放射線工学概論	2	後期	必修	1	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○				できた	
医用レーザ工学	3	前期	選択	2	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○					○					○			○				できた	
医用画像処理工学	3	前期	選択	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○										○			○				できた	
生体物性工学	3	前期	必修	2	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○							○						○				できた	
人間工学	2	後期	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した		○		○	○			グループワーク・発表			○	○			○	○		グループワーク・発表	できた	
医用機器学概論	1	後期	必修	2	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○										○			○				できた	
医用治療機器学	3	前期	必修	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○	○		○	○			できた	

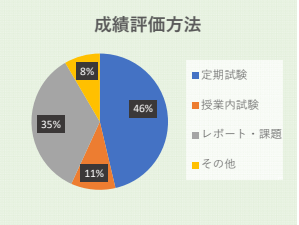
医療技術学部 臨床工学科 教育活動の記録（専任教員）

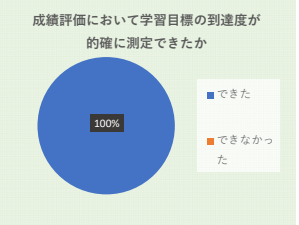
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
医用治療機器学実習	3	後期	必修	1	草間 良昌	シラバスに沿って実施した				○	○	○	○		○	○	○	○	○			○	○		できた	
生体計測装置学	2	前期	必修	2	島﨑 直也	シラバスに沿って実施した		○										○			○				できた	
生体計測装置学実習	2	後期	必修	1	島﨑 直也	シラバスに沿って実施した				○		○						○					○		できた	
生体機能代行装置学Ⅰ	3	前期	必修	2	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○										○			○				できた	
生体機能代行装置学Ⅱ	3	前期	必修	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○		○	○	○	○		○	○	○	○	○			○	○		できた	
生体機能代行装置学実習	3	後期	必修	1	大濱 和也	シラバスに沿って実施した						○					○						○		できた	
呼吸療法装置学	3	前期	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○	○		○				できた	
呼吸療法装置学実習	3	後期	必修	1	近土真由美	シラバスに沿って実施した						○			○	○	○	○	○				○		できた	
体外循環装置学	3	前期	必修	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○	○		○	○			できた	
体外循環装置学実習	3	後期	必修	1	草間 良昌	シラバスに沿って実施した				○	○	○	○		○	○	○	○	○			○	○		できた	
血液浄化療法装置学	3	前期	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○	○		○				できた	
血液浄化療法装置学実習	3	後期	必修	1	近土真由美	シラバスに沿って実施した						○			○	○	○	○	○				○	実技試験	できた	
医用機器安全管理学Ⅰ	2	前期	必修	2	島﨑 直也	シラバスに沿って実施した		○										○			○				できた	
医用機器安全管理学Ⅱ	2	前期	必修	2	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○										○			○				できた	
医用機器安全管理学実習	2	後期	必修	1	島﨑 直也	シラバスに沿って実施した				○		○						○				○	○		できた	
医療安全工学	2	後期	選択	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○		○		○		できた	
臨床医学総論Ⅰ	2	前期	必修	2	佐田 充	シラバスに沿って実施した		○										○			○				できた	
臨床医学総論Ⅱ	2	後期	必修	2	佐田 充	シラバスに沿って実施した		○										○			○				できた	
救急救命医学	3	前期	選択	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○		○				できた	
臨床実習Ⅰ	3	後期	必修	4	大濱 和也	シラバスに沿って実施した						○											○	実習態度等	できた	
臨床実習Ⅱ	3	後期	必修	3	大濱 和也	シラバスに沿って実施した						○											○	実習態度等	できた	
臨床工学総合演習Ⅰ	3	通年	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○	○			○				できた	
臨床工学総合演習Ⅱ	4	通年	必修	2	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○									○	○			○				できた	
臨床工学英文講読	3	後期	選択	2	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○	○		○									free articles on the web			○		できた	
臨床工学研究セミナー	4	前期	選択	2	島﨑 直也	シラバスに沿って実施した		○										○					○		できた	
卒業研究	4	通年	必修	4	大濱 和也	シラバスに沿って実施した				○						○								論文、発表	できた	









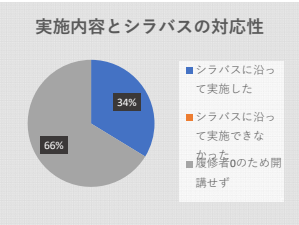


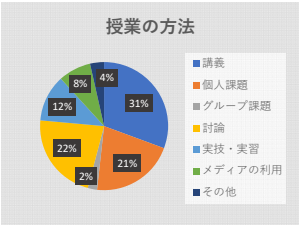
保健科学研究科保健科学専攻博士前期課程 教育活動の記録（専任教員）

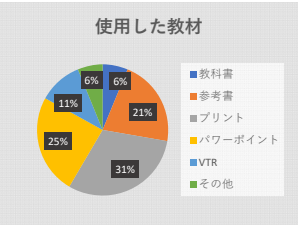
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
医療倫理学特論	1・2	前期	選択	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○							○				○			できた	
医療運営・管理学特論	1・2	前期	選択	2	亀子 光明	履修者0のため開講せず																				
人体の構造と機能学特論	1・2	前期	選択	2	宗宮 真	履修者0のため開講せず																				
加齢医学特論	1・2	前期	選択	2	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○									○				○				できた	
生殖補助医療技術学概論	1・2	前期	選択	2	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○	○		○		○					○	○				○		できた	
応用英語	1・2	前期	選択	2	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○							毎回の担当分の発表	できた	
研究方法特論	1	前期	必修	1	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○					○		できた	
研究方法論Ⅰ	1	前期	選択	1	矢島 正栄	履修者0のため開講せず																				
研究方法論Ⅱ	1	前期	選択	1	石井 良和	履修者0のため開講せず																				
研究方法論Ⅲ	1	前期	選択	1	小河原 はつ江	履修者0のため開講せず																				
研究方法論Ⅳ	1	前期	選択	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○			○						○					○	○		できた	
研究方法論Ⅴ	1	前期	選択	1	大濱 和也	履修者0のため開講せず																				
研究方法論Ⅵ	1	前期	選択	1	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○								○								討論内容	できた	
保健科学特別セミナー	1	後期	必修	1	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○					○		できた	
公衆衛生学特論	1・2	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○								○								討論内容	できた	
データ統計解析学特論	1・2	前期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○	PCの使用	○		○	○	○	教科書参照ページ示唆	○		○		できた	問題難易度がマッチした
情報アクセサビリティ学特論	1・2	前期	選択	2	木村 朗	履修者0のため開講せず																				
身体活動支援教育学特論	1・2	前期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○	PCの使用	○		○	○	○	教科書参照ページ示唆			○		できた	問題難易度がマッチした
医療情報科学特論	1・2	前期	選択	2	星野 修平	履修者0のため開講せず																				
医療安全管理学特論	1・2	前期	選択	2	渡邉 浩	履修者0のため開講せず																				
基礎・実践看護学特論	1	前期	選択	2	萩原 英子	履修者0のため開講せず																				
基礎・実践看護学演習	1	後期	選択	2	萩原 英子	履修者0のため開講せず																				
基礎看護学特別研究	2	通年	選択	10	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した					○									学生が作成した資料				修士論文	できた	
ウィメンズヘルス・助産学特論	1	前期	選択	2	中島 久美子	履修者0のため開講せず																				
ウィメンズヘルス・助産学演習	1	後期	選択	2	中島 久美子	履修者0のため開講せず																				
発達看護学特論	1	前期	選択	2	中下 富子	履修者0のため開講せず																				
発達看護学演習	1	後期	選択	2	中下 富子	履修者0のため開講せず																				
小児看護学特論	1	前期	選択	2	中下 富子	履修者0のため開講せず																				
母性看護学・助産学特論	1	前期	選択	2	早川 有子	履修者0のため開講せず																				
公衆衛生看護学特論	1	前期	選択	2	小林 亜由美	履修者0のため開講せず																				
公衆衛生看護学演習	1	後期	選択	2	小林 亜由美	履修者0のため開講せず																				
精神看護学特論	1	前期	選択	2	西川 薫	履修者0のため開講せず																				
在宅看護学特論	1	前期	選択	2	齋藤 基	履修者0のため開講せず																				
在宅看護学演習	1	後期	選択	2	齋藤 基	履修者0のため開講せず																				
臨床理学療法学特別研究	2	通年	選択	10	木村 朗	履修者0のため開講せず																				
高齢者理学療法学特論	1	後期	選択	2	浅田 春美	履修者0のため開講せず																				
地域理学療法学特論	1	後期	選択	2	目黒 力	履修者0のため開講せず																				
総合理学療法学特論	1	後期	選択	2	木村 朗	履修者0のため開講せず																				
総合理学療法学演習	1	後期	選択	2	佐藤 満	履修者0のため開講せず																				
総合作業療法学特論	1	後期	選択	2	石井 良和	履修者0のため開講せず																				
総合作業療法学演習	1	後期	選択	2	石井 良和	履修者0のため開講せず																				
コミュニケーション障害学特論	1	後期	選択	2	白坂 康俊	履修者0のため開講せず																				
病態検査解析学	1	前期	選択	2	藤田 清貴	履修者0のため開講せず																				
病態免疫化学検査学特論	1	前期	選択	2	藤田 清貴	履修者0のため開講せず																				
病態免疫化学検査学演習	1	後期	選択	2	藤田 清貴	履修者0のため開講せず																				
遺伝子情報検査学特論	1	前期	選択	2	長田 誠	履修者0のため開講せず																				
遺伝子情報検査学演習	1	後期	選択	2	長田 誠	履修者0のため開講せず																				
病態血液検査学特論	1	前期	選択	2	小河原 はつ江	履修者0のため開講せず																				
病態血液検査学演習	1	後期	選択	2	小河原 はつ江	履修者0のため開講せず																				
生体分子情報検査学特論	1	前期	選択	2	亀子 光明	履修者0のため開講せず																				
生体分子情報検査学演習	1	後期	選択	2	亀子 光明	履修者0のため開講せず																				

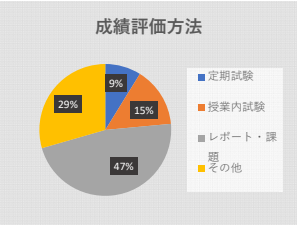
保健科学研究科保健科学専攻博士前期課程 教育活動の記録（専任教員）

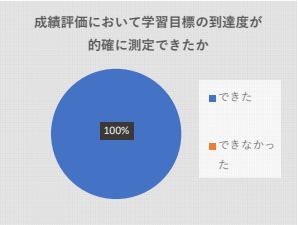
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
組織細胞検査技術学特論	1	前期	選択	2	岡山 香里	履修者0のため開講せず																				
組織細胞検査技術学演習	1	後期	選択	2	岡山 香里	履修者0のため開講せず																				
病原体ゲノム検査学特論	1	前期	選択	2	木村 博一	履修者0のため開講せず																				
生殖補助医療技術学特論	1	前期	選択	2	荒木 泰行	履修者0のため開講せず																				
生殖補助医療技術学演習	1	後期	選択	2	荒木 泰行	履修者0のため開講せず																				
病因・病態検査学特別研究	2	通年	選択	10	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した			○		○	○												学位論文発表会	できた	
病因・病態検査学特別研究	2	通年	選択	10	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した			○		○	○					○	○						発表・論文審査	できた	
放射線情報学特論	1	前期	選択	2	星野 修平	履修者0のため開講せず																				
放射線教育学特論	1	前期	選択	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○						○		できた	
放射線教育学演習	1	後期	選択	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○						○		できた	
放射線防護学特論	1	前期	選択	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○				○	○	○					○			
放射線防護学演習	1	後期	選択	2	渡邊 浩	履修者0のため開講せず																				
放射線利用学特論	1	前期	選択	2	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○			○					○	○	○					○		できた	
放射線利用学演習	1	後期	選択	2	酒井 健一	履修者0のため開講せず																				
放射線学特別研究	2	通年	選択	10	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○					○	○		できた	
放射線学特論	1	後期	選択	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○						○		できた	
放射線情報システム特論	1	後期	選択	2	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○				○	○	○				○		できた	
生体医工学特論	1	前期	選択	2	大濱 和也	履修者0のため開講せず																				
生体医工学演習	1	後期	選択	2	大濱 和也	履修者0のため開講せず																				
疫学特論	1	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○			○					○		○						討論内容	できた	
感染症学特論	1	後期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○			○					○								討論内容	できた	
生物統計学特論	1	前期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○	PCの使用	○	○	○	○	○	教科書参照ページ示唆	○	○			できた	問題難易度がマッチした
ヘルスコミュニケーション特論	1	後期	選択	2	木村 朗	履修者0のため開講せず																				
環境保健学特論	1	前期	選択	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○					○			できた	
産業保健学特論	1	後期	選択	2	木村 朗	履修者0のため開講せず																				
健康・医療政策特論	1	前期	選択	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○	○					○		できた	
国際保健政策特論	1	後期	選択	2	堀込 由紀	履修者0のため開講せず																				
地域ケアシステム管理学特論	1	前期	選択	2	矢島 正栄	履修者0のため開講せず																				
実践リーダー育成特論A	1	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○			○					○		○						討論内容	できた	
実践リーダー育成演習A	1	後期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した					○	○				○								討論内容	できた	
実践リーダー育成特論B	1	前期	選択	2	佐田 充	履修者0のため開講せず																				
実践リーダー育成演習B	1	後期	選択	2	佐田 充	履修者0のため開講せず																				
政策教育リーダー育成特論A	1	前期	選択	2	矢島 正栄	履修者0のため開講せず																				
政策教育リーダー育成演習A	1	後期	選択	2	矢島 正栄	履修者0のため開講せず																				
政策教育リーダー育成特論B	1	前期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○			○	○	○	○				○		できた	
政策教育リーダー育成演習B	1	後期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○			○	○	○	○				○		できた	
政策教育リーダー育成特論C	1	前期	選択	2	星野 修平	履修者0のため開講せず																				
政策教育リーダー育成演習C	1	後期	選択	2	星野 修平	履修者0のため開講せず																				





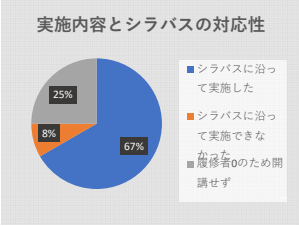


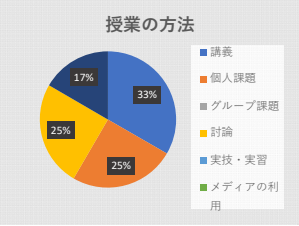


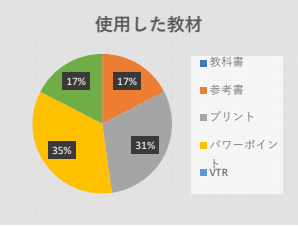


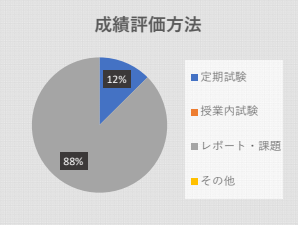
保健科学研究科保健科学専攻博士後期課程 教育活動の記録（専任教員）

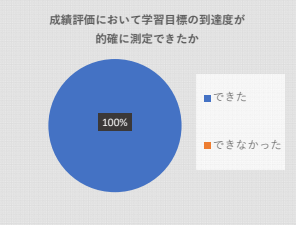
授業科目	学年	開講期	必修／選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
生命研究倫理論	1	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○							○			○				できた	
医療科学研究法Ⅰ	1	前期	選択	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○									○	○					○		できた	
医療科学研究法Ⅱ	1	前期	選択	2	長田 誠	履修者0のため開講せず																				
医療科学研究法Ⅲ	1	前期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○		○			多様性あり		○	○	○		多様性あり			○		できた	
特講Ⅰ（生体分子・病原体遺伝子）	1	前期	選択	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○									○	○					○		できた	
特講Ⅱ（細胞機能・生殖補助技術）	1	前期	選択	2	長田 誠	履修者0のため開講せず																				
特講Ⅲ（生体機能）	1	前期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○		○			多様性あり		○	○	○		多様性あり			○		できた	
演習Ⅰ（生体分子・病原体遺伝子）	1	後期	選択	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施できなかった	途中退学のため																			
演習Ⅱ（細胞機能・生殖補助技術）	1	後期	選択	2	長田 誠	履修者0のため開講せず																				
演習Ⅲ（生体機能）	1	後期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○		○			多様性あり		○	○	○		多様性あり			○		できた	
医療科学特別研究	1・2・3	通年	必修	6	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○		○			多様性あり		○	○	○		多様性あり			○		できた	
医療科学特別研究	1・2・3	通年	必修	6	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○	○					○		できた	











Ⅱ．研究活動の記録

研究活動の記録は、専任教員の研究活動状況について収集したデータである。

研究活動状況を広く社会へ公表することにより、地域の方々と連携した生涯学習や課題解決に取り組んだり、企業等との受託研究や共同研究などのかたちで研究成果の社会還元を促進したりすることを通じて、大学の目的である「地域社会への貢献」を恒常的に実施し、定着させることを目的としている。また、個人で毎年研究実績を振り返ることによりPDCA サイクルを機能させ、研究活動の推進と質の向上を図っている。

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　矢島正榮

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１）発達障害者（児）等に対する市区町村保健師の継続支援の実態	－	2022年12月	第11回日本公衆衛生看護学会学術集会	発達障害者（児）等に対する市区町村保健師の継続支援の実態について、全国市区町村統括保健師等に対する郵送調査を実施した。620件の回答（有効回答率35.6%）から、学齢期以降の市区町村保健師の関与機会の減少、人口規模による支援体制の特徴等が明らかになった。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共同発表者：矢島正榮、奥野みどり、廣田幸子、小林亜由美、桐生育恵

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）口

所属　看護学部　　氏名　早 川 有 子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
49.マタニティハラスメント被害の現況と妊婦の心身の自覚症状の変化	共著	令和3年	群馬パース大学紀要第26号	職場のマタニテイハラスメントについて、妊娠中に被害を受けた女性の被害前後の心身の自覚症状の変化と被害状況を明らかにすることとした。被害前後の自覚症状で有意差があったものは15項目中、身体的症状の腹部の締め付け感、食欲倦怠感、動機、疲労感、全身倦怠感、心理的症状の抑うつ気分、自己過評価、不満足感、イライラ感、無気力の計10項目だった(共同研究により本人担当部分抽出不可能)(広瀬文乃、中島久美子、早川有子)。
50.親への移行期における高年初産婦の夫婦が認識する夫婦の関係性の変化(査読付)	共著	令和3年	群馬パース大学紀要第26号	近年増加している高年初産婦は妊娠中から産後の心身の健康リスクが高く、新たに親役割への課題を担うことから良好な夫婦の関係性が重要となる。本研究の目的は、高年初産婦が認識する親への移行期における夫婦の関係性の変化を事例研究によって明らかにすることである。その結果、親への移行期の夫婦の関係性の様相は5つに分類された。(共同研究により本人担当部分抽出不可能)(中島久美子、臼井淳美、早川有子)
51.助産学実習への効果的な移行を目指した妊娠期シュミレーション教育の学習効果と課題(査読付)	共著	令和3年	群馬パース大学紀要第26号	妊娠期シュミレーション教育を通した学びの内容、助産学実習に活かされた内容を明らかにし、助産学実習への効果的な移行を目指した妊娠期シュミレーション教育の学習効果と今後の課題を検討する。その結果、妊娠期シュミレーション教育は、妊娠期の基本的助産技術の獲得と必要な知識の再確認後、コミュニケーション技術の向上が期待でき、助産師としてのアイデンティテチィの基礎が形成され、助産学実習前の準備性を高めることができることが示唆られた。(共同研究により本人担当部分抽出不可能)(中島久美子、広瀬文乃、臼井淳美、早川有子)

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
52. 産後1ケ月及び3ケ月の高年初産婦の心身の健康状態と妻が満足と感じる夫の関わりに対する夫婦の認識（査読付）	共著	令和3年11月	日本助産学会誌35巻2号 2021年	産後1ケ月及び3ケ月の高年初産婦の心身の健康状態と妻が感じる夫婦の認識を明らかにすることを目的とした。研究デザインは質的記述的研究である。その結果、高年初産婦は、産後1ケ月は心身の回復の遅れや育児の負担感、産後3ケ月は慢性的な睡眠不足や疲労感を感じる一方、育児と生活リズムの安定と高年齢ゆえの精神的な余裕を認識していた。妻が満足と感じる夫の関りは、妻の心身への気づかい、夫婦の家庭内役割の協同、夫の父親としての態度であった。特に、妻の心身への気づかいは夫婦で異なる認識が認められ、夫婦の認識の一致が得られ難いと言える。妻の心身の健康状態を安定に保つためには、夫婦の良好なコミュニケーションと意識の共有を図り、妻が満足と感じる夫の関りを高めることが重要である(共同研究により本人担当部分抽出不可能)(中島久美子、早川有子　臼井淳美)。
53 ソフロロジー式分娩と出産ストレスの関連　-初乳中IgA濃度測定と出産ストレス感情測定スケールの活用- （査読付）	共著	令和3年12月	日本母乳哺育学会　2022年　1号　6月刊行　(2021年12月26日アクセプト)	初乳中sIgA濃度と出産ストレス感情測定スケールを活用し、ソフロロジー式分娩と出産ストレスの関連について明らかにすることが目的である。方法は、正常分娩した産褥3日目の初産婦で、ソフロロジー式分娩実施群と未実施群の各30名を対象にした。sIgAはELISA法で測定、出産ストレス感情は立岡が作成した「出産ストレス感情測定スケールを用いて質問紙を作成し回答を得た。その結果、初乳中sIgAは実施群の方が未実施群に比べて低い傾向にあった。出産ストレス感情測定は、実施群と未実施群の総得点に有意差は見られなかった。結論、ソフロロジー分娩は、初乳中sIgA濃度の低い傾向が示され、出産ストレスの少ない分娩方法である可能性が示唆された(共同研究により本人担当部分抽出不可能　　(池下貴子、早川有子　中島久美子)
54 在留外国人への母乳育児支援	単著・	令和4年	日本母乳哺育学会　2022年16巻　1号	本研究の目的は、在留外国人女性に対する母乳育児支援の実態を明らかにし、その結果を基に外国人女性への母乳育児支援を効果的に進め、より満足度を高めるための教材を作成することである。方法はA県内の施設で出産した外国人女性に無記名自記式質問調査を実施した。また、web調査も併用した。対象者は在留外国人の多い順に、中国、ベトナム、韓国、フィリピン、ブラジル、ネパールの7ケ国である。その結果、121名から回答を得、母乳育児支援について期待していることが明らかになった。これらの結果をもとに支援教材の作成にあたっては、外国人女性が母乳育児に関する疑問や問題解決に役立つように指導内容をわかりやすくQ&Aでまとめイラストをできるだけ取り入れイメージしやすいように工夫した。そして、日本語版で作成して冊子を、7ケ国毎と英語に翻訳し、外国人女性の母乳育児支援教材を作成した。今後、これらの冊子を活用し母乳育児支援の拡大につなげていきたい。(早川有子)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学部　　氏名　小林　亜由美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
特別支援教育従事者からみた発達障害児および発達障害が疑われる児の小学校就学に伴う支援課題と市町村保健師の役割への期待	ー	令和4年1月8-9日	第10回日本公衆衛生看護学会学術集会（オンライン開催）	発達障害児等の小学校就学に伴う支援課題と、市町村保健師に求められる役割を明らかにすることを目的として特別支援教育従事者5名のインタビュー調査を実施し、質的帰納的に分析した。「環境変化に向けた児への支援」、「適切な就学先の選択」、「適応を促す環境の調整」、「将来の適応困難のリスクへの備え」、「保護者支援」、「関係機関・関係者の連携」、「地域における支援体制の構築」の支援課題が抽出された。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） （矢島正榮、奥野みどり、廣田幸子、小林亜由美、桐生育恵）
発達障害者（児）等に対する市区町村保健師の継続支援の実態	ー	令和4年12月17日	第11回日本公衆衛生看護学会学術集会（宮城）	発達障害者（児）等に対する市区町村保健師の継続支援の実態について、全国市区町村統括保健師等に対する郵送調査を実施した。620件の回答（有効回答率35.6%）から、学齢期以降の市区町村保健師の関与機会の減少、人口規模による支援体制の特徴等が明らかになった。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） （矢島正榮、奥野みどり、廣田幸子、小林亜由美、桐生育恵）

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　中下富子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
特になし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
87.小児看護学実習における臨地実習指導者と大学教員の協働に関する研究-小児病棟の臨地実習指導者への質問紙調査より-	共著	令和5年3月受理	群馬パース大学紀要 No.29,2023	本研究は、実習指導者から捉えた小児看護学実習における実習指導者と大学教員の協働の実態を明らかにすることを目的とした。結果、実習指導者は、実習前の準備が実習指導者の役割であることを認識していた。また、大学教員との協働について「意志決定」「協調性」「情報共有」に高い傾向があげられた。実習指導者としての認識を尊重し、大学教員が関係性を築いていくことが、より適切な協働につながることが示された。[共同研究のため、担当箇所の明示は不可]　（生方明日香,内山かおる,中下富子）
88.在日ブラジル人学校の子供の生活と健康　第Ⅱ報―ブラジル人学校の中高校生への質問紙調査から―	共著	令和5年3月受理	埼玉大学紀要（教育学部）72(2)2023	本研究は、日本に在住するブラジル人の子供たちのライフスタイル、食物摂取状況、健康意識の視点から、その現状と課題について明らかにすることを目的とした。結果、ブラジルの食文化の影響を受けた食習慣、就寝時刻の遅さなどの生活習慣と、健康意識と健康行動が関連していないことを踏まえ、保護者の仕事の多忙さや不安定さ等の家庭環境などを考慮したライフスタイルへの支援が必要である。また、学習塾や家庭学習時間の少なさの要因として、言語力不足や家庭の経済力の低さ、高校進学や大学入学資格の厳しさなど様々な要因が含まれており、それらを考慮した支援の必要性が示された。[共同研究のため、担当箇所の明示は不可] （武井佑眞,中下富子,斎藤千景）

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
特になし				

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　西川　薫

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
医療観察法入院対象者による主体的なクライシス・プランの作成に携わる看護師の実践（査読付）	共著	令和5年3月1日	日本精神保健看護学会誌,32(1),57-66□	本研究の目的は、医療観察法入院対象者による主体的なクライシス・プランの作成に携わる看護師の実践内容を明らかにすることである。Berelson,B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用し、全国の医療観察法指定入院医療機関に所属する看護師1,012名に質問紙を配布し、317名から回答を得た。その結果、医療観察法入院対象者による主体的なクライシス・プランの作成に携わる看護師の実践を表す37カテゴリが形成された。 共同発表者：佐藤和也、西川薫

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
医療観察法入院対象者の主体的なクライシス・プランの活用に向けた看護実践	―	令和4年7月	第18回日本司法精神医学会（オンライン学会発表）	本研究の目的は、医療観察法入院対象者の主体的なクライシス・プランの活用に向けた看護実践内容を明らかにすることである。Berelson,B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用し、全国の医療観察法指定入院医療機関に所属する看護師1,012名に質問紙を配布し、317名から回答を得た。その結果、医療観察法入院対象者の主体的なクライシス・プランの活用に向けた看護実践を表す18カテゴリが形成された。 共同発表者：佐藤和也、西川 薫

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　萩原英子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安	―	令和4年8月	第48回日本看護研究学会学術集会 愛媛(web開催)	コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安を明らかにすることを目的として、研究への同意が得られた A 大学看護学科 4 年生 11 名を対象として面接調査を実施した。結果、【患者の家族に対する関わり方】、【患者の発達段階や疾患の特徴を踏まえた関わり】、【短時間で行う的確なアセスメント】、【患者・家族の心情に配慮した声掛け】など12のカテゴリーが形成された。これらの不安は、医療の場に存在する様々な人々と関わる機会が減少したことによるものや看護の対象理解の深化が不足することによるもの、医療の場に即した対応や看護過程展開の経験不足によるもの、ロールモデルとなる看護実践場面への参加観察の機会不足によるものが考えられ、今後はオンライン等を活用して患者とコミュニケーションが取れる機会を設けることや、紙上事例を基に、高性能シミュレーター等を用いて臨機応変な対応や看護過程の展開を学ぶ機会を設けるなどの工夫によって、不安の軽減を図ることが必要である。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (湯澤香緒里、金子吉美、日下田那美、髙橋翔、小池菜穂子、堀越政孝、萩原英子)

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　中島久美子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
特記事項なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
助産学実習への効果的な移行を目指した母乳育児支援のシミュレーション教育の学習効果と課題 「査読付」	共著	2022年9月	群馬パース大学紀要、第28号	助産学実習への効果的な移行を目指して母乳育児支援のシミュレーション教育を実施した。結果、学習効果として、授乳支援に必須の基本的助産技術の獲得と助産師としてのアイデンティティの基盤が形成され、効果的な学習であることが示唆された。この研究は、母乳育児支援のシミュレーション教育の効果的な教授法を提示する資料として貢献している。 臼井淳美，中島久美子，吉野めぐみ，廣瀬文乃.
助産学実習への効果的な移行を目指した分娩期シミュレーション教育の学習効果と課題 「査読付」	共著	2022年9月	群馬パース大学紀要、第28号	助産学実習への効果的な移行を目指して分娩期シミュレーション教育を実施した。結果、学習効果として基本的な分娩技術と正常経過の助産診断に効果的な学習であることが示唆された。この研究は、分娩期シミュレーション教育の効果的な教授法を提示する資料として貢献している。 廣瀬文乃，中島久美子，臼井淳美.
死産に関わる看護者の感情に関する文献検討 「査読付」	共著	2022年9月	群馬パース大学紀要、第28号	死産に関わる看護者の感情の特徴を文献検討から明らかにし、看護者の精神的安定が図れるような死産の看護を検討した。結果、看護者の精神的安定を図るためには、看護者自身の感情や死産の看護を表出する機会を設け、看護者間の死産に対する感情や看護を臨床において共有できるツールが必要であると示唆された。 吉野めぐみ，中島久美子.
Evaluation of a pregnancy programme to enhance older primiparas' physical and mental health and marital relationships after childbirth: A non-randomized clinical trial （高齢初産婦の心身の健康と産後の夫婦の関係性を高める妊娠期プログラムの評価―非ランダム化比較研究）「査読付」	共著	2023年3月	Nursing Open (Open Access)	高齢初産婦の心身の健康と産後の夫婦の関係性を高める妊娠期プログラムを評価するため、プログラム参加群の夫婦15組（介入群）と非参加群の夫婦15組（対照群）を比較検討した。結果、介入群は対照群に比較し、夫婦の関係性が強化され、妻の心身の健康についての理解が得られた。この研究は、妊娠中からのプログラム介入により夫婦関係の向上に寄与することを示唆している。 Kumiko Nakajima, Ayano Hirose, Tomoko Nameda.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
産後クライシス予防は生まれる前から～夫婦のパートナーシップを育む助産支援～	単著	2022年7月	日総研「臨床助産ケア」	特集「産前・産後　お母さんと家族のメンタルヘルスケア」として、妊娠期からの産後クライシス予防のための夫婦のパートナーシップを育む助産支援について報告した。 中島久美子

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
助産学実習の中期段階における分娩介助シミュレーション教育の検討	—	2022年9月	第63回日本母性衛生学会（Web学会）	助産学実習の中期段階において分娩介助シミュレーション教育を実施し、その教育的効果を検討した。 中島久美子，廣瀬文乃，吉野めぐみ，堀越摂子.
Evaluation of pregnancy programs enhancing older primiparas' physical and mental health and marital relationships after childbirth: A non-randomized clinical trial（高齢初産婦の心身の健康と産後の夫婦の関係性を高める妊娠期プログラムの評価—非ランダム化比較研究）	—	2022年12月	第42回日本看護科学学会（広島国際会議場）	高年初産婦の夫婦を対象に心身の健康と夫婦の関係性を高める妊娠期プログラムを実施し、介入群と対照群との比較検討を行った。 Kumiko Nakajima,Ayano Hirose,Tomoko Nameda.

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　堀越　政孝

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安	共著	2022.08	日本看護研究学会第48回学術集会（日本看護研究学会雑誌45(3)）	【目的】COVID-19 の流行により、多くの看護学生が臨地実習の中止や実習時間の減少を余儀なくされた。臨地実習時間の減少は、既習の看護の知識・技術・態度の統合を図り、看護実践に適用する能力の育成に影響を及ぼしている可能性があり、看護実践に不安を感じている学生もいる。本研究は、コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安を明らかにした。 【方法】研究への同意が得られたA大学看護学科4年生11名を対象とした。対面による半構造化面接法にて、コロナ禍により臨地実習時間が減少したことに伴い学生が知覚する看護実践に関する不安のデータを収集し、Berelson,B.の内容分析を用いて質的帰納的に分析した。倫理的配慮として、研究協力の有無は成績に影響しないことを口頭と文書にて説明し、同意を得た。また、所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得た後に実施した（PAZ21-34）。 【結果】対象者11名の回答内容は、43文脈単位、55記録単位に分割され、＜患者の家族に対する関わり方＞＜多職種との円滑な連携方法＞＜患者の発達段階や疾患の特徴を踏まえた関わり＞など12カテゴリが形成された。 【考察】抽出されたカテゴリが示す不安を軽減するためには、看護基礎教育や看護継続教育において、実際の医療現場における看護実践場面への参加や見学の機会を充実させることが重要である。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能）湯澤香緒里、金子吉美、日下田那美、高橋翔、 小池菜穂子、堀越政孝、萩原英子

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　金子吉美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安	―	2022年8月27，28日	日本看護研究学会 第48回学術集会，愛知.	コロナ禍により臨地実習時間が減少したことに伴う学生の看護実践に関する不安を明らかにすることを目的とした。学生11名に半構造化面接を実施しデータを収集し、質的帰納的に分析を行った。不安として12カテゴリが形成され、不安の要因を考察し、不安の軽減を図るための対策への示唆を得た。 （データの収集・分析を共同で行った。） （湯澤香緒里、金子吉美、日下田那美、髙橋翔、小池菜穂子、堀越政孝、萩原英子）

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　関　妙子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学部　　氏名　萩原　一美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　堀込　由紀

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
中小規模施設における医療安全管理者による医療事故調査制度関連業務の遂行状況と担当すべき職種 ： 施設規模別、加算別での比較	共著	2022/6/1	日本医療マネジメント学会雑誌　23（1），2-7.	本研究の目的は中小規模施設における医療安全管理者の医療事故調査制度関連業務の遂行状況と業務別に担当すべき職種について明らかにすることである。全国770施設を対象とした。病床別に分類し医療事故調査制度関連業務の遂行状況と担当すべきと考える職種について、加算1と加算2で比較した。結果、施設規模に関わらず、医療事故に直接対応する業務に関して、加算1では加算2に比べ、医療安全管理者が主担当として実施している割合が高かった。施設の実情も考慮しながら、医療安全管理者が医療事故調査制度関連業務に専念できる体制の整備や業務内容に応じた医療安全管理者の活用および活用に向けた権限の明確化や研修が必要である。（共同研究のため担当部分抽出は不可能である。）末永 由理、佐々木 美奈子、李 廷秀、髙橋 静子、是村 利幸、駒崎 俊剛、本谷 園子、菅野 雄介、中山 純果、堀込 由紀、坂本 すが、宮﨑 久義

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1.　日本人看護師の外国人患者に対するケアの困難の体験と工夫	－	2022/7/9	第24回日本医療マネジメント学会学術集会、神戸ポートピアホテル	国内の病院にて、外国人患者のケァに従事しているクリニカルラダー皿レヘル以上の看護師で、同意か得られた5名を対象に、困難だと感じた体験や工夫について、半構成化面接法にてインタヒューを実し、テーマ的ナラティブ分析を実施した。日本人看護師が語る外国人患者に対するケアの困難ては、「死生観を含む価値観の違い」「治療　検査」「日常的なケア」「病院のルール」「コミュニケーション」「病院・組織全体の管理」に関連する5つのテーマか抽出された。翻訳機の活用は日常的たが、正確性が疑問視されていた。工夫については、「宗教に関連した行為への対応」、「翻訳機器や医療通訳、ビジュァルエイト等の活用」、「専門的組織ての多職種協働」が抽出された。外国人患者に対応する専門部門の介入による多職種協働は、スムースな治療に貢献てきることか示唆された。外国人患者へのケアの質を上けていくための教育プロクラムの構築においては、今後は学習ニーズを明確にしていく必要がある。堀込由紀、萩原一美

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.　オンライン・オンデマンドを用いた中医看護に関する研修会の実践報告	-	2022/9/18	日本国際看護学会第6回学術大会 Online	本研修会は、「Withコロナ時代における中医看護のホリスティックな視点で考える異文化対応能力」をテーマとした研修会のアンケートから評価を行った。概ね肯定的な解答であった。ワークショップ形式としたが、オンラインでは限界があり、今後は同テーマでオンサイトで実施していきたい。（共同研究のため担当部分抽出不可能）江角伸吾、大植崇、呉小玉、堀込由紀、横山詞果
3.　Thoughts of Nurses Working in the Ward Accepting Patients with COVID-19: Reason for Staying in the Place of Care	―	2022/10/18～10/19	The 7th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science　Online	[Objective] To explore the thoughts of the nurses who worked in the COVID-19 infection ward and the reasons they continued. [Method] We conducted semi-structured interviews with five nurses who worked in a ward that accepted patients with COVID-19 at a hospital in the Kanto area of Japan. [Results] We identified and extracted four themes: “a sense of mission and reward as a nurse,” “a sense of unity and organizational growth in the workplace,” “the joy of patient recovery,” and “an aspiration to grow as a nurse.” The importance of the management behavior of nursing managers who supported this virtuous cycle was also suggested.Yuki Horigome Anne Otake , Fuka Kobayashi 1, Shiori Takezawa ,Tomoka Tajima
4.　直接ケアにおける看護師から看護補助者への指示だし行動	-	2022/11/3	第87回日本健康学会総会、東京医療保健大学五反田キャンパス　Online併用	看護補助者との安全で円滑な協働のためには看護師の指示出し行動（意識，認識や判断，態度など）が肝要であるが、その実態は明らかでない。実働病床数300床以上の急性期病院に勤務する非管理職の看護師13名を対象として半構成的面接を行った。その結果、直接ケアにおける看護師から看護補助者への指示出し行動は，106のコードが抽出され，35のサブカテゴリーから，9のカテゴリーにまとめられた．指示出し行動について抽出された9つのカテゴリーを指示出しのプロセスの観点から整理すると，「認識・判断」，「指示・指導・調整」，「監督・評価」の3つのグループに分類され，それらは「倫理的態度」によって支えられ，安全で円滑な協働が行われることと考えられた。堀込由紀,佐々木美奈子,李廷秀,末永由理,小池洋子,髙橋静子,山本三希子
5.　日本人看護師の外国人患者へのケア時の困難体験を基にした学習ニーズ	-	2022/12/3～12/4	第42回日本看護科学学会学術集会　広島国際会議場＆Online	看護師達のケア時の困難な体験に基づく学習ニーズの探索のためのインタビュー調査を実施した。「外国人患者の日本の医療に対する認識と期待の把握」、困難と感じた外国人患者の反応が宗教や文化等の影響を受けていることに関する「外国人患者の文化・生活様式と価値観の把握」、異なる言語でも関係構築やケア提供を円滑にするための「外国人患者と相互理解を深めるためのコミュニケーションスキル」、専門部署や他の専門職種との連携・協働に関する「外国人患者に対応する多職種協働の在り方」という４つのテーマが抽出された。日本人看護師が外国人患者に安全で安楽な看護ケアを提供できるように、本研究を基礎資料とした異文化間コミュニケーションに関する教育の機会提供と効果的な教育モデルの構築を進めていく。萩原一美、堀込由紀

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　小池　菜穂子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安	―	2022年8月	日本看護研究学会第48回学術集会ハイブリッド開催	2020年度～2021年度のCOVID-19流行により、臨地実習時間が減少した。臨地実習時間の減少は、既習の看護の知識・技術・態度の統合を図り看護実践に適用する能力の育成に影響を及ぼしている可能性があり、看護実践に不安を感じている学生もいる。本研究は、コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安を明らかにすることを目的とした。対象者11名の回答内容は、43文脈単位、53記録単位に分割され、コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安を表す12カテゴリが形成された。看護実践に関する不安を表す12カテゴリから不安の要因を考察し、不安の軽減を図るための対策への示唆を得た。臨地実習は実際の患者を受け持ち、発達段階や疾患の特徴などを考慮した関わりやケアの実施を通して、看護の対象理解を深めるが、コロナ禍により実際の患者との関わりなどが不十分であり、看護の対象理解を深めることが出来なかったと考える。保育園や老人施設の様子や、患者会参加者による体験談などの動画を視聴する機会を設ける。臨地実習は、学生が実際の医療の場に身を置きながら、その場に即した対応や看護過程展開を経験するが、コロナ禍により医療の場に身を置く時間が減少し、その場に即した対応や看護過程展開を十分に経験することが出来なかったと考える。紙上事例を基に、高性能シミュレーター等を用いて臨機応変な対応や看護過程の展開を学ぶ機会を設ける。

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護　　氏名　長嶺めぐみ

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
15. 外国人患者とのコミュニケーションにおける機械翻訳の有用性の検討 （査読あり）	単著	令和4年9月	群馬パース大学紀要 第28号　P.53-57	１５． 日本に滞在する外国人の数は年々上昇しており、これに伴い外国人が日本の病院に受診する機会も増えている。医療通訳の介入により、外国人患者とのコミュニケーション改善に一定の効果はあるが、外来窓口や受付などでの依頼は現実的ではない。このような場合、機械翻訳での対応が現実的といえる。しかし、医療機関において、機械翻訳が外国人患者とのコミュニケーション対応に有用性があるかどうかはまだ明らかとなってはいない。そこで本研究では、医療機関での機械翻訳の有用性について検証した。 研究代表者：**長嶺めぐみ**
16. 遠隔医療通訳サービスコールセンターアプリを用いて行った医療通訳の有用性の検討 （査読あり）	共著	令和4年10月	日本遠隔医療学会雑誌 18巻2号	１６． 外国人患者が日本の医療機関を受診する際、医療通訳の存在は欠かせない。医療通訳の介入を「遠隔」で行うことができれば、少ない人材を有効に活用することができ、外国人患者と医療従事者のコミュニケーションの改善が期待される。本研究では、前回理由として上がった項目を改善した遠隔医療通訳サービスを病院に導入し、そのアンケート調査結果から有用性を明らかにすることを目的とした。 研究代表者：**長嶺めぐみ** 共同研究者：森淑江、長嶺俊、瀧澤清美 共同研究により担当箇所抽出不可能
17. 日本人看護学生と外国人介護学生の異文化相互理解のための授業 （査読あり）	共著	令和4年12月	看護教育 第63巻6号　P.732-738	１７． 日本は超高齢化社会を迎え、介護人材の不足が問題となっている。この人材不足を補う施策の１つとして「介護ビザ」の運用2017年より開始となった。医療施設においても在留外国人などが受診する機会が増加しており、看護職・介護職の異文化コミュニケーション能力の獲得が期待されている。今回、看護学科と福祉専門学校とで合同授業を行い、看護学生及び外国人留学生が互いに文化を理解するための教育的介入を行った。 研究代表者：**長嶺めぐみ** 共同研究者：上星浩子 共同研究により担当箇所抽出不可能

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
33. NURSING EDUCATION PRACTICE DURING THE COVID-19 PANDEMIC (THE FIRST REPORT) - OVERVIEW OF A TREND IN RESEARCH （COVID-19流行下における看護教育実践(第1報)―研究タイプの概観―）	共著	令和4年4月	25nd East Asian Forum of Nursing Scholars	33. ＜Backgraund＞ In 2020, as COVID-19 became widespread all over the world, online classes were held at universities nationwide. The issue of how to conduct practical lessons and clinical training while preventing the spread of COVID-19. ＜Aim＞ The purpose of this study was to get an overview of trends in research on basic nursing education practice during the COVID-19 pandemic published in 2020-2021, and to find ideas for online lessons and clinical training in basic nursing education. 研究代表者：**Megumi Nagamine** 共同研究者：Hiroko Joboshi 共同研究につき担当箇所抽出不可能
34. NURSING EDUCATION PRACTICE DURING THE COVID-19 PANDEMIC (2ND REPORT) - DIFFERENCES IN ONLINE CLASS EFFORTS BETWEEN 2020 AND 2019- （COVID-19流行下における看護教育実践(第2報) ―2020年とCOVID-19流行以前のオンライン授業の取り組みの差異―）	共著	令和4年4月	25nd East Asian Forum of Nursing Scholars	34. ＜Backgraund＞ Even before the COVID-19 epidemic, online classes were already being conducted. However, online classes in 2020 were a choice to continue education. In addition, they differs from past classes in that teachers who have never conducted online education had no choice but to conduct online classes too. ＜Aim＞ This study clarifies commonalities and differences between the online classes held in 2020 that had been held before the pandemic, with the purpose get suggestions for conducting online classes in the future. 研究代表者：**Megumi Nagamine** 共同研究者：Hiroko Joboshi 共同研究につき担当箇所抽出不可能
35. Approach and issue of Basic Nursing Practice under the COVID-19 outbreak （新型コロナウイルス感染拡大下における基礎看護実践の取り組みと課題）	共著	令和4年4月	25nd East Asian Forum of Nursing Scholars	35. In 2020, the COVID-19 epidemic forced us to shorten the training time and change the training content. In order to clarify whether or not the student's learning and achievement of the practical training goal have been achieved, we have analyzed the efforts for the on-campus training and the student's practical training evaluation. 研究代表者：Hiroko Joboshi 共同研究者：**Megumi Nagamine** 共同研究につき担当箇所抽出不可能
36 遠隔医療通訳サービスコールセンターアプリを用いて行った医療通訳の有用性の検討	共著	令和4年10月	第26回日本遠隔医療学会学術大会	36 外国人患者が日本の医療機関を受診する際、医療通訳の存在は欠かせない。医療通訳の介入を「遠隔」で行うことができれば、少ない人材を有効に活用することができ、外国人患者と医療従事者のコミュニケーションの改善が期待される。本研究では、前回理由として上がった項目を改善した遠隔医療通訳サービスを病院に導入し、そのアンケート調査結果から有用性を明らかにすることを目的とした。 研究代表者：**長嶺めぐみ** 共同研究者：森淑江、長嶺俊、瀧澤清美 共同研究により担当箇所抽出不可能

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
37 在留外国人患者の医療機関受診時のコミュニケーション上の困難さの構造化	共著	令和4年12月	第42回日本看護科学学会学術集会	37 本研究は以下の2つを目的に行った：①日本語が母国語でない在留外国人患者が日本の医療機関を受診した際の経験から、コミュニケーションに起因した困難さを明らかにして構造化する、②在留外国人患者への適切な医療提供のためのコミュニケーション上の方策を検討する 研究代表者：**長嶺めぐみ**

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　千葉　今日子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25.看護学臨地実習指導者自己教育力尺度による実習指導者の自己教育力の関連要因の特徴	―	2022年8月	日本看護学教育学会誌32巻学術集会講演集 Page198	看護学臨地実習指導者自己教育力尺度による実習指導者の自己教育力の関連要因の特徴を明らかにした。300床以上の病院に勤務する指導者に自記式質問紙調査を実施した．自己教育力総点（千葉ら,2019）を高い群・低い群の2値として説明変数とのχ_2検定により有意差を確認し，ロジスティック回帰分析を実施した．指導者の自己教育力の高い群は326名，低い群は692名で、ロジスティック回帰分析の結果，実習目標を達成できるように指導している人2.00倍，看護を伝える力は重要であるととらえている人1.97倍，実習指導を振り返っている人1.62倍などであった． 自己教育力の高い指導者は，自身の実習指導を振り返り，自身の看護観を大切に伝えており(伊藤ら,2021)，実習指導に向き合う指導者の特徴が明らかになった。 千葉今日子　冨田幸江　小林由起子　中澤沙織
26.看護学臨地実習指導者の自己教育力に最も関連が強かった要因の特徴 -看護学臨地実習指導者自己教育力尺度を用いて-	―	2022年12月	日本看護科学学会学術集会講演集42回 Page P2-67	実習指導者の自己教育力に最も関連が強かった要因の特徴を明らかにした。300床以上の病院に勤務する指導者に自記式質問紙調査を実施した．指導者の自己教育力の総点と説明変数について2変量解析を実施し、有意差（p＜0.05）のあった変数と重回帰分析を実施した。重回帰分析で最も係数の強かった要因を上位30％とそれ未満に分け、ロジスティック回帰分析を行った。その結果、指導者の自己教育力に最も関連が強かった変数は、看護師の職業的IDであり職業的IDの高い指導者の特徴として、職務効力感、シニシズム、学生が実施した看護を意味づけているなどであった。 千葉今日子　冨田幸江　小林由起子　中澤沙織

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　傳谷典子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　反町真由

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
子育て期の女性がん療養者の意思決定を支える訪問看護実践(査読付き)	共著	2023.1受理採択	群馬パース大学紀要第29号	子育て期の女性がん療養者の意思決定を支える訪問看護師の看護実践を明らかにすることを目的に、同意が得られた訪問看護師10名に半構成的面接を行い、質的帰納的に分析した。訪問看護実践として6つのカテゴリが抽出され、看護の示唆が得られた。共著者：反町真由・林恵・小林亜由美

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　氏名　安田弘子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
該当なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
該当なし				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
該当なし				

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　湯澤（池田）香緒里

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10.コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安	―	2022年 8月～10月	日本看護研究学会第48回学術集会 （ハイブリッド開催）	コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安を明らかにするために、11名の看護学生を対象に半構造化面接を実施した。対象者11名の回答内容は、43文脈単位、53記録単位に分割され、【患者の家族に対する関わり方】、【患者に実施した経験が少ない看護技術の提供】などコロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安12カテゴリが明らかになった。 （共同研究につき本人担当部分抽出不可能） （湯澤香緒里、金子吉美、日下田那美、髙橋翔、小池菜穂子、堀越政孝、萩原英子）

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　日下田那美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　廣瀬　文乃

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1 助産学実習への効果的な移行を目指した母乳育児支援のシミュレーション教育の学習効果と課題（査読付）	共著	2022年	群馬パース大学紀要第28号	学内での母乳育児支援のシミュレーション教育を通した学びの内容と助産学実習に活かされた内容から、助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育のあり方を検討した。デザインは、質的記述的研究デザインである。学生は、シミュレーション教育で実践場面を想定した母乳育児支援を実践し理解することにより、コミュニケーション技術や知識不足等に気づきを得ていた。助産診断能力の向上に向けた教育の必要性が明らかになった。 （共同研究につき、本人担当分抽出不可） 共著者：中島久美子、吉野めぐみ、廣瀬文乃
2　助産学実習への効果的な移行を目指した分娩期シミュレーション教育の学習効果と課題（査読付）	共著	2022年	群馬パース大学紀要第28号	分娩期シミュレーション教育を通した学びの内容、助産学実習に活かされた内容を明らかにし、助産学実習への効果的な移行を目指した分娩期シミュレーション教育の学習効果と今後の課題を検討した。デザインは、質的記述的研究である。分娩期のシミュレーション教育は、基本的な分娩技術と正常経過の助産診断に効果的な学習であることが示唆された。 共著者：廣瀬文乃、中島久美子、臼井淳美

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1　助産学実習の中期段階における分娩期シミュレーション教育の検討	-	2022年9月	第63回日本母性衛生学会総会	分娩介助中期段階（実習中期）のシミュレーション教育が実習後期に活かされた内容を明らかにし、助産学実習のシミュレーション教育のあり方を検討した。助産課程の学生を対象に実習中期に学内実習を実施し、分娩介助技術到達度および実習後半に活かされた学びの内容を調査した。受け持ち時や実習態度において、学内実習よりも実習後期の得点が高く、有意差が見られた。 共同発表者：中島久美子、廣瀬文乃、吉野めぐみ、堀越摂子
2　Evaluation of pregnancy programs enhancing older primiparas' physical and mental health and marital relationships after childbirth: A non-randomized clinical trial（高齢初産婦の産後の心身と夫婦関係を高める妊娠期プログラムの開発）	-	2022年12月	第42回日本看護科学学会	高齢初産婦への身体的及び精神的健康と産後の夫婦関係を強化する妊娠期プログラムを作成し、その評価を行った。夫は出産後に妻が受ける身体的負担をよりよく理解し、家事への支援を行うことで妻の満足度が向上することがわかった。そのため、プログラムが夫婦関係を強化する可能性があることが示唆された。 共同発表者：中島久美子、廣瀬文乃、行田智子

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　佐藤 和也

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
医療観察法入院対象者による主体的なクライシス･プランの作成に携わる看護師の実践（査読付）	共著	令和5年3月1日	日本精神保健看護学会誌,32(1),57-66	本研究の目的は、医療観察法入院対象者による主体的なクライシス･プランの作成に携わる看護師の実践内容を明らかにすることである。Berelson,B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用し、全国の医療観察法指定入院医療機関に所属する看護師1,012名に質問紙を配布し、317名から回答を得た。その結果、医療観察法入院対象者による主体的なクライシス･プランの作成に携わる看護師の実践を表す37カテゴリが形成された。 共同発表者：佐藤和也、西川薫

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
医療観察法入院対象者の主体的なクライシス･プランの活用に向けた看護実践	共著	令和4年7月	第18回日本司法精神医学会（オンライン）	本研究の目的は、医療観察法入院対象者の主体的なクライシス･プランの活用に向けた看護実践内容を明らかにすることである。Berelson,B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用し、全国の医療観察法指定入院医療機関に所属する看護師1,012名に質問紙を配布し、317名から回答を得た。その結果、医療観察法入院対象者の主体的なクライシス･プランの活用に向けた看護実践を表す18カテゴリが形成された。 共同発表者：佐藤和也、西川薫

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学部 看護学科　　氏名　吉野　めぐみ

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
助産学実習への効果的な移行を目指した母乳育児支援のシミュレーション教育の学習効果と課題（査読付）	共著	2022年9月	群馬パース大学紀要 第28号 pp. 3-13	本研究では、助産師学生を対象にシミュレーション教育後及び助産学実習後の2時点で調査を行い、シミュレーション教育の学習内容と実習に向けた課題、シミュレーション教育が助産学実習に活かされた内容とシミュレーション教育で学びたかった内容を明らかにした。そして、シミュレーション教育の効果および課題が示唆された。 （データ分析を担当） 共著者：臼井淳美、中島久美子、吉野めぐみ、廣瀬綾乃
死産に関わる看護者の感情に関する文献検討（査読付）	共著	2022年9月	群馬パース大学紀要 第28号 pp. 43-51	本研究の目的は、死産に関わる看護者の感情の特徴を文献検討から明らかにし、看護者の精神的安定が図れるような死産の看護を検討することである。看護者の感情の特徴は、【夫婦や死児に対する感情】と【死産の看護に対する感情】であった。看護者の精神的安定を図れ、積極的な看護の実践のためには、看護者自身の感情や死産の看護を表出する機会を設け、看護者間の死産に対する感情や看護を臨床において共有できるツールが必要である。（分析、本文作成）（筆頭論文） 共著者：吉野めぐみ、中島久美子

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6　助産学実習の中期段階における分娩介助シミュレーション教育の検討	―	2022年9月	第63回日本母性衛生学会総会・学術集会	本研究の目的は、分娩介助中期段階のシミュレーション教育が実習後期に活かされた内容を明らかにし、助産学実習のシミュレーション教育のあり方を検討することである。実習の3時点で分娩介助技術到達度を比較した結果、実習後期において受け持ち時と実習態度においての得点が高かった。正常初産婦編では「一つ一つの分娩介助技術の課題の明確化」「産婦に伝わるコミュニケーションスキル」「実習前半を振り返り実習後半に活かされた助産実践」、正常経産婦編では「経産婦のスピードに対応できる助産診断」「産婦の状況に適した柔軟な声かけ」「正常経過からの逸脱時の冷静な対応」の学びがカテゴリ化された。 （データ分析を担当） 共同発表者：中島久美子、廣瀬文乃、吉野めぐみ、堀越摂子

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　森田　綾子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属 看護学部看護学科　氏名　佐藤美保

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1. 「看護教員が臨地実習において学生の違和感に気づき介入に至るまでのプロセスに関する研究」 （修士学位論文）	単著	令和4年3月	群馬パース大学大学院修士課程	1.本研究は、看護教員が臨地実習において学生の違和感に気づき介入にいたるまでのプロセスを明らかにする事を目的とした。結果看護教員が臨地実習において学生の違和感に気づき、介入にいたるまでのプロセスは、看護教員が【学生の患者との接し方への違和感】を感じることから始まった。次に【学生の看護援助への違和感】、【他者との関係性への違和感】へと至った。さらに、看護教員はこれらの違和感を抱きながら、各々の学生の臨地実習における学習活動を注視し、相互に関連しながら【継続的な個別の介入の必要性への見極め】を行っていた。（全33頁）
2. COVID-19流行下における基礎看護学実習Ⅱの看護技術到達度の実態と課題 -2020年度と2019年度の看護技術到達度の比較から-	共著	令和4年3月	群馬パース大学紀要　第27号	2.本研究は基礎看護学領域の「COVID-19流行下における基礎看護学実習Ⅱの看護技術到達度の実態と課題」を明らかにしたものである。その結果、COVID-19による看護技術習得への実態として、概観すると、80%以上の学生が到達できた項目は2020年度の方が少なかた。COVID-19の終息は今後も予測できない。講義・演習を通し学んだ知識や技術を科学的根拠に基づき、かつ対象者の状況を判断し、安全・安楽に看護技術を提供できるための総合的な補完、支援が必要である。（全10頁） （比較検討において、表の作成と分析を担当） 共著者：上星浩子、萩原一美、長嶺めぐみ、星野健、佐藤美保

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　林　恵

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1　子育て期の女性がん療養者の意思決定を支える訪問看護実践(査読付き)	共著	未定（2023年1月受理）	群馬パース大学紀要第29号	子育て期の女性がん療養者の意思決定を支える訪問看護師の看護実践を明らかにすることを目的に、同意が得られた訪問看護師10名に半構成的面接を行い、質的帰納的に分析した。訪問看護実践として6つのカテゴリが抽出され、看護の示唆が得られた。 共著者：反町真由・林恵・小林亜由美 担当：共同研究のため担当部分抽出不可能
2 医療的ケア児の児童発達支援または保育所等の利用開始に向けた訪問看護実践(査読付き)	共著	未定（2023年1月受理）	日本看護科学学会誌	修士論文の内容を投稿論文にしたものである。共著者：林恵、飯田苗恵、横山京子 担当：研究計画、調査、分析、論文作成等の全ての過程（筆頭論文）

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1　未就学の医療的ケア児の通所利用開始に向けた訪問看護実践	―	2022年12月4日	第42回日本看護科学学会学術集会、広島国際会議場	本研究は、未就学の医療的ケア児の通所利用開始に向けた訪問看護実践を明らかにすることを目的とした。小児訪問看護の熟練看護師に半構造化面接を実施し、Berelson,B.の内容分析の方法を参考に分析した。研究対象者は10人の訪問看護師であり、15コアカテゴリが形成された。子どもの将来を思慮しつつ親による通所利用の意思決定を支援し、申請手続きを見守りながら通所利用による変化を予測した看護の必要性が示唆された。

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　看護学科　　氏名　綿貫　真歩

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
該当なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
該当なし				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
該当なし				

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　　氏名　佐藤満

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1. Analysis of skeletal characteris-tics of flat feet using three-dimensional foot scanner and digital footprint (3次元フットスキャナとデジタルフットプリントを用いた偏平足の骨格特性の解析)	共著 (査読あり)	2022年8月	BioMedical Engineering OnLine, 21, Article number 56, 1-12. doi:10.1186/s12938-022-01021-7	足部の特徴を測定する3次元フットスキャナとデジタルフットプリントデバイスを開発し,両者の測定結果の相関関係を明らかにし,3次元的特徴に基づくフットプリントから偏平足の評価を予測した．またフットプリントでは分からない偏平足の立体的な特徴を明らかにした．研究企画と原稿校閲を担当(全頁)。共著者：Yamashita T, Yamashita K, Sato M, ほか
2. Differences in foot features between children and older adults assessed using a three-dimensional foot scanning system: A cross-sectional observational study (3次元足スキャンシステムを使いて評価した子供と高齢者の足の特徴の違い:横断的観察研究)	共著 (査読あり)	2022年9月	Advanced Biomedical Engineering, 11, 172–178 doi:10.14326/abe.11.172	子供と大人の足の特徴を調べる3次元フットスキャナとデジタルフットプリントデバイスを開発し，発育中の子供(154人)の足の特徴を成人(403人)の足の特徴と比較した．測定結果と足長比は大人と子供で個人差があったが、かかと幅に差はなく、前足部の平坦化は大人の方が大きかった．成人では足長と舟状骨高が増加したが、かかとの特性は子供と成人の間で差がなく，結果は子供用履物の人間工学分析に重要な意味を持つ．研究企画と原稿校閲を担当(全頁)。共著者：Yamashita T, Yamashita K, Sato M, ほか

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　理学療法学科　木村　朗

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　要
実践身体活動学	単著	2022年6月1日	三共出版	健康管理やリハビリテーションにおいて、身体活動量の定量化は重要な概念である。本書では、身体活動量のあらましを示し、測定方法の歴史から現在のアクティブトラッカーを用いた実践方法を記した。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　要
Factors Affecting the Incidence of Sarcopenia Obesity in Independent Living Olderly People in Ogimi Village(査読付)※(大宜味村の自立生活高齢者におけるサルコペニア肥満の発生に影響を及ぼす要因について)	単　著	2022年9月	JJPHPT, No9, 1. ISSN2189-5899. pp. 1-4.	沖縄の健康長寿地域で自立した生活を送る90歳代集団におけるサルコペニア肥満の発生率と身体活動に対する意識との関連性を調べた。コホート研究のサブ解析であった。アウトカムは、サルコペニア肥満の罹患率、年齢、身長、体重、生活習慣病の有無、生体インピーダンス法による筋肉量割合と体脂肪量、握力、1ヶ月以内の運動不足の自覚であった。サルコペニア肥満の発症率と意識間で有意な関連は見られなかった。サルコペニア肥満のない集団では、運動不足に対する意識が有意に高かった($p<.05$)。大宜味村で自立した生活を送る女性高齢者集団は、サルコペニア肥満の回避と運動不足の自覚の関連性が高い傾向が認められた。
Characteristics of Intergenerational Health Literacy among Women Farmers in Tsumagoi Village in Japan(査読付)※(嬬恋村の女性農家における世代間ヘルスリテラシーの特徴)	単　著	2022年9月	JJPHPT, No9, 1. ISSN2189-5899. pp. 5-10.	キャベツの出荷量が日本有数で生産量も多い群馬県嬬恋村の女性農業者の健康問題について、ヘルスリテラシーの把握を目的として、同職種の女性集団における世代間差異の存在要因を探索した。JA嬬恋村の組合員女性669人を対に対し、2021年3月、群馬県嬬恋村のJA嬬恋本部で行った。HLS-EUコンソーシアム(2012)を使用した。結果、2022年3月の調査には28人が参加した。ヘルスリテラシーの得点に寄与する因子構造は、50代以下と60代以上とで有意に異なっていた。50代以下では、ウイルス性疾患の流行に関するリテラシーが高いことがプラスに作用し、60代以上では、自分の健康に関する身体活動関連のリテラシーが高いことが、総得点にプラスに作用したことが示唆された。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Reasons for the formation of a fatal weakness in the public health capacity of Japanese-style physical therapists(査読付)※(日本理学療法士において公衆衛生能力に致命的な弱点が生まれた理由)	単　著	2022年9月	JJPHPT,No9,1.ISSN2189-5899.pp.11-15.	2021年、日本の医療制度では、これまで医師のみが行っていた医療行為の業務が移行し、理学療法士を除く放射線技師、臨床検査技師、臨床工学技士、看護師が行える医療行為の種類が増えたが、日本の理学療法は諸外国の理学療法との乖離が生じていた。発展著しいシンガポールの理学療法士のコアコンピテンシーと日本の理学療法士養成プログラムのコアコンピテンシーを比較した。シンガポールの理学療法の知識レベルが日本の理学療法の知識レベルと同程度とみなされるのが基本的には国際大学ランキング100位以内に入っていることであった。2022年現在、この基準を満たす日本の大学は京都大学だけであった。理学療法をさらに発展させるための技術開発において、根本的な弱点となるのは、その基礎を理解する学力の不足である。一つの解決策として、日本式の理学療法士に基礎学力をつけるプログラムを提供することを提案した。
加速度に注目した身体活動定量化に内部障害の予測性を加えた計測科学のエッセンスを：身体活動量の定量化その過去・現在・未来	単　著	2022年9月	福岡県理学療法士学会誌 35、50-56.2022. ISSN： 1342-1433	理学療法に計測科学を導入することの有効性について、加速度に注目した身体活動定量化に内部障害の予測性を加えた計測科学のエッセンスを：身体活動量の定量化その過去・現在・未来について述べた。血糖値管理にCGMと身体活動量、食事内容の組み合わせで視覚化された経験知がもたらされ、自験例として、血糖コントロールに成功した例をしめした。運動療法のあり方において24時間の身体活動の中での相対的な活動量のあり方が重要であり、今後さらに加速度計などのアクティブトラッカーおよび生理的センシングのもたらす理学療法は革新的な変化を遂げる可能性について述べた。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Hazard Factors for Sustainability of Independent Living among the Elderly in Longevity Areas in Okinawa（沖縄の長寿地域における高齢者の自立生活持続のための危険因子）	-	2022/11/7	America Public Health Association,100th Congress	健康な超高齢者の自立生活の長期継続に関連する有意な因子をコホート研究（縦断的、面接ベース、観察研究）にて抽出した。期間 2016年8月から2021年12月まで。沖縄県大宜味村のコミュニティで自立して生活する85歳以上の高齢者145名に曝露因子は行動嗜好の有無、血管機能障害の有無、BMI異常の有無。主要アウトカム評価項目自立生活期間、自立生活の終了とした。結果参加者n=145、男性30人、女性115人。血管機能低下のない健康な超高齢者の縦断的自立生活期間は、行動嗜好の影響を受けなかった。血管機能障害の存在は有意に短い自立生活期間と関連しており、これは長期にわたる行動制限のもとで行われた。正確な判断には不足する情報が認められるものの行動嗜好性の重要さを示唆した。A Kimura,
Factors Supporting Independent Physical Activity among the Very Older Adults in Longevity Regions（長寿地域における超高齢者の自立した身体活動を支える要因）	-	2022/11/9	Archives of Physical Medicine and Rehabilitation.Volume 103, Issue 12, December 2022, Page e72 https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S0003999322012059	血管機能障害を含む超高齢者の自立生活の長期継続に関連する有意な因子を同定するコホート研究（縦断的、面接ベース、観察研究）のサブ解析結果を報告した。2016年8月から2021年12月。場所は沖縄県大宜味村のコミュニティ。自立して生活する85歳以上の高齢者145名より、曝露因子は行動嗜好の有無、血管機能障害の有無、BMI異常の有無。主要アウトカム評価項目とした。 血管機能が低下した群では、自立生活期間の有意な短縮が観察された。 血管機能障害の存在は有意に短い自立生活期間と関連しており、これは長期にわたる行動制限の中で認められた。さらに正確な判断には、一定期間の相対リスク比を用いて評価し、さらにバイアスを調整する必要があることを指摘した。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
動的な視空間情報を通電信号によって人が視覚によらず通電信号で知覚するための通電周波数に関するパイロット研究	-	2023/3/4	第85回情報処理学会 電気通信大学 (ONLINE)	失明者が視覚依存型情報を取得する方法に通電信号を用いることを提案するために、便益性に優れる実験系をノーコード系情報処理手法を用いることでコストを抑え一定の精度を保ちながら目的のデータを取得するに至ったプロセスをMESHを用いたノーコードプログラミングを実験系に用いることで、これまでプログラミングの難しさが障壁となって実験系を構築が困難であった障害者の行動支援の一対策として動的空間からの危険な人接近を早期に検知する研究手法の実装性を示した。
郊外在住の高齢失明者が遭遇するスマートフォン利用時障壁の実例	-	2022/10/7	第81回日本公衆衛生学会 山梨県	群馬県草津町在住の高齢視覚障害者において2020年を基準年として、それまで取得できていた情報が実際に取得できなくなったケースについて調査を行った。スマートフォンを使用したいが、使い方が分からないというニーズが存在する。商用ではないアクセサビリティの立場で情報機器の操作に関する研修の機会を情報の取得に対する障壁を下げるための施策に含めて検討する意義について報告した。
明治大正の大相撲力士の寿命	-	2023/3/17	第33回日本疫学学会 浜松市（online）	肥満が寿命の決定要因の一つであることは知られているが、身体機能として筋力を増強してきた相撲力士の寿命データの寿命決定因を調べた。明治時代の相撲力士において、BMIは寿命と負の相関を示し、身長は正の相関を示した。現在の欧米基準の肥満群に限ると明治時代の力士の寿命は体重の影響を受けていることが示された。

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　理学療法学科　　氏名　　鈴木　学

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
理学療法学生の実習施設内行動レベルと性格特性との関連について（原著）（査読付き）	単著	2022/8/1	理学療法科学 vol.37（4） pp393-398	学生の実習施設内行動レベル（以下,行動レベル）と性格との関連を明確にすることとした．A大学理学療法学科4年生82名に対し8週間の臨床実習後にK-T性格検査による性格要素の強さとの判定と実習施設内での行動レベルの程度との関係を検討した．「自己抑制型」は28項目，「自己解放型」は2項目，「繊細型」は7項目の実習行動で有意な負の相関が，「着実型」では8項目の実習行動で正の相関がみられた．また主たる性格が「自己抑制型」では他の性格よりも低い行動レベルであった． 著者:鈴木学

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　理学療法学科　　氏名　目黒力

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　理学療法学科　　氏名　岡崎大資

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16　電磁波療法Ⅰ　高周波療法　―超短波療法・極超短波療法―	単著	令和4年10月	総合リハビリテーション	物理療法で用いる超短波治療器、極超短波治療器の機器特性と使用方法、人工電磁場環境におけるリスク管理、適応と禁忌などについて、新卒理学療法士もしくはリハ職を目指す学生向けに解説した。 1267-1271 岡崎大資
17　電磁波療法Ⅱ　光線療法―赤外線・レーザー―	単著	令和4年11月	総合リハビリテーション	物理療法で用いる赤外線治療器、レーザー治療器の機器特性と使用方法、星状神経節ブロック様効果を目的とした生理学的作用、リスク管理、適応と禁忌などについて、新卒理学療法士もしくはリハ職を目指す学生向けに解説した。 1393-1398 岡崎大資

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　理学療法学科　　氏名　宗宮　真

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1.神経変性疾患の高次脳機能障害と運動障害への相乗効果を目指したリハプログラムの構築	単著	2022年6月19日	科学研究費助成事業研究成果報告書（平成30～令和3年度）	パーキンソン病の前頭葉機能と運動障害に対するリハビリテーション効果との関連を、Frontal assessment battery(FAB) 、三次元動作解析装置、動的重心動揺計により検討した。リハビリテーション後、FAB高値群では、重心の総移動距離、第7頚椎(C7)マーカーの総移動距離、最大移動距離、前後方への最大速度の有意な減少を認めた。FABスコアはC7マーカーの最大移動距離の減少と有意な相関を示した。多重ロジスティック回帰分析による検討で、FABスコアはC7マーカーの最大移動距離と前方への最大速度の減少の予測因子だった。また、歩行と姿勢反射の改善との有意な相関がFAB高値群で認められた。（実験の遂行、全体の考察、執筆を担当）　宗宮　真

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　理学療法学科　　氏名　浅田　春美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　理学療法学科　　氏名　城下　貴司

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Relationship between the modified Ankle MWM and Y balance test	ー	2022.6.18～20	World Physiotherapy-AWP Regional Congress 2022	ブライアンマリガン先生が考案された Ankle MWM の臨床的妥当性を発表した。
厚底靴が走行・歩行に与える影響につい て	ー	2022.9.10～11	第41回関東甲信越ブロック理学療法士学会	厚底靴を履くことで走行だけでなく歩行も重心が前方した
静的ストレッチがY-バランステストに与える影響について	ー	2022.9.10～11	第41回関東甲信越ブロック理学療法士学会	ストレッチとYバランステストの関係性が得られなかった。これらの考え方に見直しが必要であった。
足趾機能と Y-バランステストの関係性	ー	2022.9.10～11	第41回関東甲信越ブロック理学療法士学会	母趾にパッドを添付すると、前方方向が有意に増加した。先行研究からの比較より母趾刺激による回内作用により前方移動が増加のではないと考察した

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　理学療法学科　　氏名　　洞口　貴弘

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
The effect of different reaching interval on the course of prism adaptation	共著	2022年12月	nginition & Rehabilitati	視覚的な目標への迅速で正確な到達は、視覚運動学習や適応によって獲得される。力場適応とプリズム適応の研究では、それぞれのフィードバックによる適応の進行や神経基盤が調査されている。力場適応では1秒の間隔が最適とされているが、プリズム適応では最適な間隔が明らかにされていなかった。この研究では、1秒未満の到達間隔でもプリズム適応が見られることが示されましたが、1秒以上の間隔の方がより速い適応が起こることがわかった。これは力場適応の研究と一致しており、今後の調査が期待される。
Effects of purposeful activity-based electrical stimulation therapy for a stroke patient with severe upper-limb paresis on cerebral hemodynamics: trial of a home-based support program	共著	2022年12月	nginition & Rehabilitati	重度の上肢麻痺を持つ慢性の脳卒中患者において、目的を持った活動に基づく電気刺激療法の効果を調べた。脳機能の評価にはfNIRSを使用し、結果から脳内の酸素化ヘモグロビン濃度の増加が確認された。しかし、運動機能の改善には効果が限定的だった。この研究は、脳機能の活性化における同側性の下行経路の影響を示唆している。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
慢性脳卒中中等度片麻痺上肢の合目的的電気刺激療法に係る脳機能効果：事例	共著	2023年3月	第21回 日本電気生理運動学会	本研究は、合目的的電気刺激療法（PA-EST）が慢性脳卒中患者の上肢麻痺に及ぼす脳機能への影響を機能的近赤外分光法（fNIRS）を用いて解明することを目的とした。 70代の男性参加者に対し、PA-ESTプログラムを3ヶ月実施。fNIRSによる脳血流の評価を行った。結果: PA-EST後の評価では、上肢運動項目の改善や車の運転が目標達成された。fNIRSでは、指を開く動作で有意な血流変化が観察された。 本研究からは同側の血流変化は確認されなかったが、対側の血流量の軽減が示唆され、PA-ESTが中等度の上肢麻痺に対して有望な治療法である可能性が示唆された。
重度片麻痺上肢に対する合目的的電気刺激療法が脳循環動態と運動機能に及ぼす効果（事例）	共著	2022年11月	第24回群馬県作業療法学会	慢性脳卒中の重度片麻痺上肢に対する合目的的電気刺激療法（PA-EST）の効果を検討するため、fNIRSを用いた事例研究が行われた。70歳代の女性の参加者にPA-ESTプログラムを3カ月実施し、前後で評価を行った。結果として、運動機能の改善が認められ、fNIRSによる脳循環動態の測定では運動野の酸素化ヘモグロビン（OX-Hb）濃度の増加が示された。また、日常生活動作や目標達成スケールでも改善が見られた。この結果から、PA-ESTが脳の運動領域に早期に良い影響を与える可能性が示唆された。今後、さらなる事例の積み上げが必要である。

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　理学療法学科　　氏名　黒川 望

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
なし				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
なし				

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　理学療法学科　　氏名　橋口　優

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Effects of orthoses on muscle activity and synergy during gait（査読付） （歩行中の筋活動及び筋シナジーに対する装具の影響）	共著	2023年2月9日	PLoS One	歩行中の筋活動及び筋シナジーに対して、短下肢装具、長下肢装具を着用した影響について比較検討した。[著者]Yu Hashiguchi, Ryosuke Goto, Toru Naka

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
靴型スマートセンサーによる歩行分析	共著	2022年10月23日	第29回群馬県理学療法士学会	加速度計と各速度計を内蔵した靴型スマートセンサーによる歩行分析手法の有効性について検討した。

研究活動の記録（2022年1月～2022年9月）

所属　理学療法学科　　氏名　　田辺　将也

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
腰痛を予防し、医療・介護従事者が働き続けられる職場づくりを	共著	R4.8	週刊医学界新聞第3482号、医学書院	田辺将也、高橋稚菜

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　理学療法学科　　氏名　加茂智彦

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Prediction Model including Gastrocnemius Thickness for the Skeletal Muscle Mass Index in Japanese Older Adults.(日本人高齢者における腓腹筋厚を含む骨格筋量指数予測モデル)（査読有）	共著	2022年5月	Int J Environ Res Public Health 29;19(7):4042	本研究では、超音波検査による腓腹筋厚を含む骨格筋量指数（SMI）予測モデルを構築することを目的とする。65歳以上の日本人193名が参加した。SMIはBIAにより測定し、皮下脂肪厚と内側腓腹筋厚を超音波検査により測定し、年齢、性別、体格指数（BMI）、握力、歩行速度も収集した。SMIを従属変数とし、年齢、性別、BMI、腓腹筋の厚さ、その他の要因を独立変数として組み込んだステップワイズ重回帰分析を行った。計算式は以下の通りであった。SMI = 1.27 × gender (men: 1, women: 0) + 0.18 × BMI + 0.09 × gastrocnemius thickness (mm) + 1.3 がSMIの予測モデルとして示された. このSMI予測モデルは高い精度を有しており、日本人高齢者のSMIを予測するための非侵襲的で簡便な代替方法となり得るものであった。(研究計画立案補助、データ測定、解析補助を担当) 共著者：Yuguchi S, Asahi R, Kamo T, Azami M, Ogihara H.
Co-contraction of lower limb muscles affects gait stability in patients with diabetic peripheral neuropathy(糖尿病性末梢神経障害患者における下肢筋の共収縮は歩行の安定性に影響する)（査読有）	共著	2022年5月	Japanese Journal of Physical Therapy for Diabetes Mellitus 1(1)：20-30	【背景・目的】本研究では、DPN患者の歩行不安定に関連する因子を明らかにすることを目的とした。 【方法】当院に糖尿病教育入院中のDPN患者40名を対象とした。重心を反映した第3腰椎棘突起に貼付した3軸加速度計を用いて、歩行時の不安定性を評価した。下腿筋の共収縮を評価するために筋電図を用い、歩行時の前脛骨筋とヒラメ筋の共収縮指数（CI）を算出した。 【結果】RMSは下腿筋のCIと有意な相関を示した（$\beta=0.45$, $p<0.01$）。さらに、この関係は年齢、性別、身長を調整した後でも有意であった（$\beta=0.54$、$p<0.01$）。 【考察】これらの結果は、DPN患者において下腿筋の共収縮が歩行時の全体的な安定性に影響を及ぼすことを示唆している。(解析補助、論文執筆補助を担当) 共著者：Suzuki Keisuke, Koike Takayasu, Kamo Tomohiko, Fukagawa Syohei, Kamogari Hiroki, Hosokawa Masato, Saito Takayoshi, Otake Satoshi

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Association with sagittal alignment and osteoporosis-related fractures in outpatient women with osteoporosis(外来通院中の骨粗鬆症女性における矢状アライメントと骨粗鬆症関連骨折との関連性)(査読有)	共著	2022年6月	Osteoporos Int 33(6):1275-1284.	目的：骨粗鬆症患者において、矢状面のアライメントが将来の骨粗鬆症関連骨折を予測するかどうかは明らかにされていない。矢状面と将来の骨粗鬆症関連骨折との関連を調べることを目的とした。 結果：骨粗鬆症に関連する骨折は、313人中33人（10.5%）に発生した。多重ロジスティック回帰分析の結果、転倒歴、SVA、PL-LLが抽出された。 結論：本研究の結果より、SVAは骨粗しょう症関連骨折と関連することが明らかとなった。(共同研究につき本人担当部分抽出不可能) 共著者：Ryoma Asahi, Yutaka Nakamura, Masayoshi Kanai, Kento Watanabe, Satoshi Yuguchi, Tomohiko Kamo, Masato Azami, Hirofumi Ogihara, Satoshi Asano
Associated Factors and Healing Process of Injury of the Lateral Malleolus of the Fibula in Lateral Ankle Sprain(足関節外側捻挫における腓骨外側踝骨折の関連因子と治癒過程)（査読有）	共著	2022年7月	International Journal of Gerontology 16(3): P277-280	背景 本研究の目的は，足関節外側捻挫における腓骨外側踝骨折の有病率と治癒経過を明らかにすることである. 方法 足首外側捻挫と診断された患者57名を対象とした。骨損傷（BI）群と特異靭帯損傷（LI）群に分けた。解析パラメータは，BIの有病率，年齢，安静期間，治療期間，受傷原因である。 結果 BI有病率は31.6%（18/57例，男性17例，女性40例）で，腓骨外側マレット骨折が6例，剥離骨折が12例であった．BIは患者の年齢と関連していた．BI群の年齢（46.8±19.7歳）はLI群の年齢（28.4±15.6歳）より有意に高年齢であった．BI群はLI群に比べ，日常生活動作中の受傷が有意に多かった。 結論 BI患者はLI患者より高齢であり，日常生活での受傷頻度も高かった。(データ解析指導、論文執筆補助を担当) 共著者：Makoto Takahashi, Koji Iwamoto, Kazuhide Tomita, Tomohiko Kamo, Shinji Ueda, Takeshi Igawa, Yukio Miyauchi
Prevalence and Risk Factors of Sarcopenia in Patients with Dizziness.(めまい患者におけるサルコペニアの有病率と危険因子)（査読有）	共著	2022年8月	Otol Neurotol 43(9):e1024-e1028.	目的 本研究は、めまい患者におけるサルコペニアの有病率およびサルコペニアに関連する因子を調査することを目的とした。 対象はめまいや立ちくらみを主訴とする65歳以上の患者162名（めまい群）、地域在住高齢者132名（対照群）とした。 結果　めまいのある患者162名（めまい群）のうち，53名（32.7%）がサルコペニアと分類された。めまい群と対照群ではサルコペニアの有病率に有意差があった($p < 0.01$)。サルコペニアに有意に影響する因子は、オッズ比の大きい順に、HADS_A、年齢、DHI_Totalであった。 結論 本研究は，めまい患者におけるサルコペニアの有病率は，地域在住の高齢者よりも高い，年齢，HADS_A，DHIはめまい患者のサルコペニアと関連していた。(研究計画立案、データ測定、解析、論文執筆を担当)(筆頭論文) 共著者：Kamo T, Ogihara H, Tanaka R, Kato T, Azami M, Tsunoda R, Fushiki H.
Does Locomotive Syndrome Severity Predict Future Fragility Fractures in Community-Dwelling Women with Osteoporosis?(ロコモティブシンドロームの重症度は、地域在住の骨粗鬆症女性における将来の脆弱性骨折を予測するか？)（査読有）	共著	2022年8月	Mod Rheumatol (In Press)	目的 ロコモティブシンドローム（LS）の重症度が骨粗鬆症患者の将来の脆弱性骨折に影響を及ぼすかどうかを検討した。 方法 315名の骨粗鬆症女性（平均追跡期間2.8年）が検討され、そのうち244名が解析に含まれた。ベースライン時に，医療情報，腰椎と大腿骨頚部の骨密度，矢状縦軸（SVA）を取得した。さらに、2段階、立ち上がり、25問の老年運動機能評価尺度（GLFS）スコアを用いて、LSリスクを評価した。 結果 脆弱性骨折は315人中37人（11.8%）に発生した。本研究では，SVAおよびLS重症度が脆弱性骨折発生に対する独立危険因子となったことが明らかにされた。 結論 本研究では，LSの重症度が脆弱性骨折の発生を予測することが明らかとなった.（データ解析補助、論文執筆補助を担当） 共著者：Asahi R, Nakamura Y, Koike Y, Kanai M, Watanabe K, Yuguchi S, Kamo T, Azami M, Ogihara H, Asano S.

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Efficacy of supervised vestibular rehabilitation on functional mobility in patients with chronic vestibular hypofunction(慢性前庭機能低下患者における監視下前庭リハビリテーションの機能的移動に対する有効性)（査読有）	共著	2022年8月	J Phys Ther Sci 34(8):584-589.	【目的】本研究は、慢性的な片側前庭機能低下症の患者において、異なる介入頻度が歩行能力およびバランスに及ぼす影響を比較することを目的とした。 【参加者と方法】 複数回介入（週1回）群と単回介入群の2群のいずれかに割り当てられた。ベースライン時と前庭リハビリテーションプログラム開始4週間後に測定された。 【結果】Timed Up and Goテスト値、Dynamic Gait Index、Functional Gait Assessmentスコアは、複数介入群では4週間後に有意に改善された。 【結論】慢性片側前庭機能低下症患者において、理学療法士による複数回の介入は、1回の介入と比較して、比較的短期間で有意に大きな効果をもたらす。(研究計画立案補助、データ測定、解析指導、論文執筆指導を担当) 共著者：Tanaka R, Kamo T, Ogihara H, Kato T, Azami M, Tsunoda R, Fushiki H.
Effects of in-hospital rehabilitation on preventing hospital readmissions in patients with cirrhosis: a retrospective cohort study.(肝硬変患者の再入院予防に対する院内リハビリテーションの効果：レトロスペクティブ・コホート研究)(査読有)	共著	2022年9月	Arch Phys Med Rehabil 103(9):1730-1737.	目的：肝硬変患者の病院再入院に対するリハビリテーションの影響を調査することである。 結果：リハビリテーションは1177名（19.0%）の患者に提供された。傾向スコアマッチングの結果、リハビリテーションは30日および90日後の再入院と関連していた。 結論：本研究では、肝硬変患者において、リハビリテーションが30日および90日の再入院の割合の低下と関連することが示された。したがって、リハビリテーションは、肝硬変で入院した患者の再入院のリスクを低減する方法の一つであると考えられる。(研究計画立案、解析、論文執筆を担当)(筆頭論文) 共著者：Kamo T, Momosaki R, Azami M, Ogihara H, Yuguchi S, Asahi R, Suzuki K.
Repetitive peripheral magnetic stimulation for impairment and disability in people after stroke(脳卒中後遺症に対する反復性末梢磁気刺激療法)（査読有）	共著	2022年9月	Cochrane Database Syst Rev 9(9):CD011968	目的 脳卒中後の人々の日常生活動作や機能的能力の改善に対するrPMSの効果を評価すること。 研究デザイン　システマティックレビュー 結果 合計139名の参加者を含む4つの試験（3つの並行群間RCTと1つのクロスオーバー試験）が含まれた。 結論 脳卒中後の患者に対するrPMSの日常的な使用について結論を出すには、十分なエビデンスがない。脳卒中後のrPMSの確実なエビデンスを提供するためには、サンプルサイズの大きな追加試験が必要である。(データ抽出、データ解析、論文執筆を担当)(筆頭論文) 共著者：Kamo T, Wada Y, Okamura M, Sakai K, Momosaki R, Taito S.
The utilization and demographic characteristics of in-hospital rehabilitation for acute vestibular neuritis in Japan(日本における急性前庭神経炎に対する院内リハビリテーションの利用状況と人口統計学的特徴)(査読有)	共著	2022年10月	Auris Nasus Larynx 49(5):762-767.	目的：日本医療データセンター（JMDC）のデータベースを用いて，急性前庭神経炎患者の院内リハビリテーションの利用状況と人口統計学的特徴を調査した 結果：本研究の対象となる患者は809名で，そのうち59名（7.3%）がリハビリテーションを受け，750名は受けなかった．多変量ロジスティック回帰分析において、リハビリテーションサービス利用に有意に影響する因子は、オッズが大きい順に、プライマリ・ケア、内科、年齢であった（オッズ比＝4.42、2.17、1.33）。 結論 本研究では，（1）急性期前庭神経炎患者のリハビリテーションサービスの利用率は低いこと，（2）年齢，内科への入院，プライマリ・ケアへの入院がリハビリテーションサービスの利用と関連していることが示された。(研究計画立案、解析、論文執筆を担当)(筆頭論文) 教書者：Kamo T, Momosaki R, Ogihara H, Tanaka R, Kato T, Tsunoda R, Fushiki H

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Factors affecting the outcome of vestibular rehabilitation in patients with peripheral vestibular disorders(末梢前庭障害患者における前庭リハビリテーションの結果に影響を及ぼす要因)（査読有）	共著	2022年12月	Auris Nasus Larynx 49(6):950-955.	目的 本研究は、末梢性前庭障害患者における理学療法士監修の前庭リハビリテーションの転帰に関連する因子を、めまいがQOLに与える影響を主な転帰として明らかにすることを目的とした。 方法 末梢性前庭障害を有する47名の患者を対象とした。理学療法士が週1回40分の前庭リハビリを4週間行った。介入前後のDHI変化率を目的変数とし、重回帰分析を行った。 結果 重回帰分析では，ABC尺度がDHI変化率に有意に影響する因子として同定された（β = -0.428, p < 0.01）. 結論 ABCスケールの得点が高いほど，DHI変化率が低い（すなわち，改善度が高い）ことが確認された。(研究計画立案補助、解析補助、論文執筆補助を担当) 教書者：Ogihara H, **Kamo T**, Tanaka R, Azami M, Kato T, Endo M, Tsunoda R, Fushiki H.
Effect of Vestibular Rehabilitation Program Using a Booklet in Patients with Chronic Peripheral Vestibular Hypofunction: A Randomized Controlled Trial(慢性末梢性前庭機能低下患者における小冊子を用いた前庭リハビリテーションプログラムの効果： ランダム化比較試験)(査読有)	共著	2023年1月	Prog Rehabil 14;8:20230002	本研究では、慢性末梢性前庭機能低下症患者を対象に、小冊子を用いた指導付き在宅前庭リハビリテーションプログラムの歩行機能およびめまいへの影響を検討した。二元配置反復測定分散分析では、FGA、DGI、DHI総スコア、DHI感情スコアについて有意な交互作用が見られ（P<0.05）、VR群は対照群よりも改善が見られた。本研究の在宅前庭リハビリテーションプログラムは、慢性末梢前庭機能低下症患者の歩行機能とめまいを改善するのに有効であった。(研究計画立案補助、データ測定、解析指導、論文執筆指導を担当) 共著者：Tanaka R, Fushiki H, Tsunoda R, **Kamo T**, Kato T, Ogihara H, Azami M, Honaga K, Fujiwara T.
Relationship of Phase Angle to Locomotive Syndrome, Malnutrition, and Sarcopenia Alone and Co-Existence in Community-Dwelling Women Aged 60 Years and Older(60歳以上の地域在住女性におけるロコモティブシンドローム、栄養不良、サルコペニアの単独および併存と位相角との関係)(査読有)	共著	2023年3月	International Journal of Gerontology 17(2)：105-109	本研究は、ロコモティブシンドローム、栄養失調、サルコペニアの単独または併存と位相角との関係を調べ、これらの症候群の位相角のカットオフ値を決定することを目的とした。 年齢と肥満度を調整した多項ロジスティック回帰分析により、位相角とロコモティブシンドローム、栄養失調、ロコモティブシンドロームとサルコペニア、ロコモティブシンドロームと栄養失調、3症候群の併存との関係が示された。(研究計画立案補助、データ測定、解析補助を担当) 共著者：Ryoma Asahi ; Satoshi Yuguchi ; **Tomohiko Kamo** ; Masato Azami ; Hirofumi Ogihara
Sagittal alignment cut-off values for predicting future fall-related fractures in community-dwelling osteoporotic women(地域在住の骨粗鬆症女性における将来の転倒関連骨折を予測するための矢状面アライメントのカットオフ値)(査読有)	共著	2023年3月	Eur Spine J 32(4):1446-1454.	本研究では、転倒関連骨折のリスクが高い骨粗鬆症患者を検出するための矢状面アライメントの最適なカットオフ値を決定した。多変量Cox回帰分析により、SVA（ハザード比[HR]=1.022、95%信頼区間[CI]=1.005-1.039）が転倒による骨折発生の唯一の独立予測因子であった。(データ解析補助、論文執筆補助を担当) 共著者：Asahi R, Nakamura Y, Koike Y, Kanai M, Yuguchi S, **Kamo T**, Azami M, Ogihara H, Asano S.
Clinical features of persistent postural-perceptual dizziness with isolated otolith dysfunction as revealed by VEMP and vHIT findings(VEMPおよびvHIT所見から明らかになった孤立性耳石機能障害を伴う持続性姿勢知覚性めまいの臨床的特徴)(査読有)	共著	2023年3月	Front Neurol 16;14:1129569	本研究は、前庭機能検査を用いて、耳石器機能単独障害を伴う、または伴わないPPPDの臨床的特徴を明らかにすることを目的とした。球形嚢と卵形嚢障害の共存は、PPPD患者のめまい症状を悪化させる可能性がある。PPPDにおける耳石損傷の有無と程度を決定することで、PPPDの病態生理と治療戦略に関する有用な情報が得られると考えられる。(研究計画立案補助、データ測定、解析補助、論文執筆補助を担当) 共著者：Azami M, Fushiki H, Tsunoda R, **Kamo T**, Ogihara H, Tanaka R, Kato T.

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Non-pharmacological interventions for persistent postural-perceptual dizziness (PPPD)(持続性姿勢知覚性めまい (PPPD) に対する非薬理学的介入)(査読有)	共著	2023年3月	Cochrane Database Syst Rev 3(3):CD015333.	目的 持続性姿勢知覚性めまい (PPPD) に対する非薬物的介入の有益性と有害性を評価すること。非薬理学的介入がPPPDの治療に有効かどうかを判断し、潜在的な有害性を伴うかどうかを評価するためには、さらなる研究が必要である。(データ抽出、解析補助、論文執筆補助を担当) 共著者：Webster KE, **Kamo T**, Smith L, Harrington-Benton NA, Judd O, Kaski D, Maarsingh OR, MacKeith S, Ray J, Van Vugt VA, Burton MJ.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　理学療法学科　　氏名　　林　翔太

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1.Relationship of the brief-balance evaluation systems test with physical functioning and activities of daily living: A cross-sectional study among hospitalized acute stroke patients（査読付き）	共著	2022年6月	NeuroRehabilitation. 2022;50(4):417-423.	脳卒中急性期患者のBrief-BESTestスコア分布の特徴を明らかにし、身体機能や日常生活動作との関連を検討した。Brief-BESTest は、急性脳卒中入院患者の床と天井の機能の影響を受けず、それぞれのバランス要素に異なる身体機能が関連付けられていました。(測定の遂行、全体の構成)（共著論文） Tatsuya Igarashi, Ren Takeda, Shota Hayashi
2.Minimal clinically important difference of the Berg Balance Scale and comfortable walking speed in patients with acute stroke: A multicenter, prospective, longitudinal study.（査読付き）	共著	2022年6月	Clin Rehabil. 2022 Nov;36(11):1512-1523.	急性期の脳卒中患者における Berg Balance Scale(BBS) と快適歩行速度との間の臨床的に重要な最小限の差(MCID)を決定すること。BBSのMCIDは6.5-12.5点、快適歩行速度のMCIDは0.18-0.25m/sが示唆された。(測定の遂行、全体の構成、執筆の担当)(筆頭論文) Shota Hayashi, Kazuhiro Miyata, Ren Takeda, Takamitsu Iizuka, Tatsuya Igarashi, Shigeru Usuda
3.Short-term effects of pedaling exercise combined with integrated volitional control electrical stimulation in an older patient hospitalized for subacute stroke: ABA single-case design.（査読付き）	共著	2023年1月	J Phys Ther Sci. 35(1):82-87.	高齢の脳卒中患者において、統合意志制御電気刺激と組み合わせたペダリングの短期介入が歩行指標に及ぼす影響を検討することであった。統合された意志制御電気刺激と組み合わせたペダリングからなる短期介入は、歩行異常の改善に貢献する可能性が示唆された。(測定の遂行、全体の構成)(共著論文) Tatsuya Igarashi, Yuta Tani, shota Hayashi, TomoyukiAsakura.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1.亜急性期脳卒中患者における舌圧、MASAの臨床上意味のある最小重要差(MCID)の検討.	-	2022.9	第28回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会	急性期脳卒中患者の舌圧と嚥下機能(MASA)に対する臨床的意義のある最小重要差(MCID)について検証することを目的とした。舌圧とMASAのMCIDが示唆された。(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 小林悠人、大矢亜衣、石井みなみ、捧健人、林翔太.

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.亜急性期循環器疾患患者における退院時歩行速度および下肢機能と退院1ヶ月後の身体活動量との関連性の検証.	-	2022.9	第41回関東甲信越ブロック理学療法士学会	亜急性期循環器疾患における退院時歩行速度と下肢機能が退院1ヶ月後の身体活動量に関連するかを検証した。退院1ヶ月後の低強度身体活動と入院中の歩行速度と下肢機能には密接な関連が示唆された。（共同研究につき、本人担当部分抽出不可能）小野拓斗,小池 智紗,林翔太,小川嘉壱,五十嵐達也.
3.亜急性期入院軽症脳卒中患者の退院時の6分間歩行距離による退院6ヶ月後の地域での歩行能力の予測判別の検証	-	2022.10	第20回日本神経理学療法学会学術大会	脳卒中患者の退院後の歩行能力を予測した報告はあるが、その多くが横断的な検証や予測指標に機能的自立度や歩行速度を用いており、実生活の地域での歩行を予測した報告は少ない。本研究の目的は、亜急性期入院脳卒中患者のコホートにおいて、退院時に測定した6分間歩行距離の退院 6 ヶ月後の地域での歩行能力の予測精度を明らかにし、最適なカットオフ値を確立すること。亜急性期入院軽症脳卒中患者では退院時の歩行持久性が高い者ほど、退院 6 ヶ月後の地域での歩行能力に優れていることが明らかとなった。また、地域での歩行能力の予測判別に優れた 6分間歩行距離のカットオフ値が明らかとなった。 五十嵐達也、武田廉、谷友太、高橋直哉、小野拓斗、石井良樹、林翔太、臼田滋
4.従来の方法と新たな方法でのMinimal clinically important difference（MCID）の検討-亜急性期脳卒中患者の6分間歩行距離での検証-	-	2022.10	第28回群馬県理学療法士学会(群馬)	亜急性期脳卒中患者の6-Minute Walking Distance(6MWD)に対するMCID predとMCID ROCを比較することを目的とした。MCID ROCは101.0m(AUC 0.82)、MCID predは80.7m(95%CI 43.1-118.7m)、事後確率0.55(95%CI 0.39-0.70)であった。 林翔太、武田廉、宮田一弘、飯塚隆充、五十嵐達也、臼田滋
5.多発性脳梗塞により重複障害を呈した患者に対し、早期から段階的難易度調整立位スケールによる立位練習と免荷式歩行器による歩行練習を施行し、基本動作能力が向上した症例	-	2022.10	第28回群馬県理学療法士学会(群馬)	脳卒中後の重複障害を呈した症 例に関する介入報告は少なく、早期より段階的難易度調 整立位スケールによる立位練習とBWS(Body Weight Supported)装置の 1 つである免荷式歩行器を使用した歩行練習を行うことで、基本動作能力が向上した症例報告を実施した。段階的難易度調整立位スケールを用いた介入は、Contraversive pushingを呈した回復期脳卒中症例に対して有用性が報告されているが、発症早期の症例に対しても有用である可能性が示唆された 小川嘉壱、林翔太、五十嵐達也

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　作業療法学科　　氏名　石井良和

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
１．人間作業モデルを用いた作業療法実践の構造～計量テキスト分析を用いた文献研究(査読付き)	共著	2022年6月	作業療法41(3)294-304	本研究は，日本で行われている人間作業モデル（以下，MOHO）に基づく作業療法実践の特徴を検討することを目的とした．方法は日本で発表されたMOHOを用いた事例報告を対象に計量テキスト分析を行い，テキストデータからMOHO実践の特徴を捉えた．その結果，最も多く実践で用いられる治療戦略は“明らかにする”であった．また，日本のMOHO実践は7つのカテゴリに分類された．これらのカテゴリのなかでも，クライアントと作業の関係性を明らかにすることに重きを置いていた．実践家はMOHOにより明らかになった作業を基にクライアントの支援を組み立てていた． 著者：川原 宇央，石橋 裕，石橋 仁美，石井 良和
２．精神障害者の就労継続に影響する就労準備性と作業参加の特徴に関する検討(査読付き)	共著	2022年9月	作業行動研究26(2),73-80	本研究では,個人の就労準備状況と作業参加状況を捉え，就労定着支援における着眼点とすることを目的とした．結果は，既存の就労準備性では就労継続を予測することができず，作業療法における作業参加の視点，習慣化，コミュニケーションと交流技能が就労継続に寄与していた．このことから就労定着支援では，就労準備性ではなく作業参加の視点を用いた支援が有効である可能性を示唆した． 共著者：馬場順子，谷村厚子，石井良和
３．　アクチュアリティの間主観的共有によりBPSDの改善を呈した一例～クライエントが「良い」と感じた作業療法場面～（査読付き）	共著	2022年9月	作業行動研究26(2)，92-101	80歳代前半の認知症を患う男性が，作業療法で意味のある作業に取り組み，短期間でBPSDの改善が見られた経過と作業療法士の関わりを考察した．男性の改善は，作業療法士の関わりを含めた作業療法場面を純粋経験により「良い」ものと感じ，その中で意味のある作業に従事することにより生じたアクチュアリティを作業療法士と間主観的に分かち合ったことによる，個人的原因帰属の安定と習慣の改善，役割の獲得が，作業適応につながったものであった．認知症高齢者にとって，アクチュアリティを間主観的に分かち合える関係と「良い」と感じられる作業療法場面の重要性が確認された事例の報告である． 著者：大松慶子，石立登紀子，石井良和

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
４．Subjective erceptions that affect the continued emloyment of ppersons with mental disabilities in Japan:A mixed-methods study.（日本における精神障害者の雇用継続に影響を与える主観的認識） （査読付き）	共著	2023年1月	WORK 75, 711-725	精神障害者が就労支援を受けながら就労を継続する能力に影響を与える主観的特性を明らかにするために，混合法による研究を行った．その結果，働き続ける参加者の現在の仕事の維持と将来に関する主観的認識について，５つの包括的上位概念と12の下位概念が明らかになった．本研究は，精神障害者の主観的ニーズに基づく就労支援システムの開発を促進し，その結果，精神障害者の就労継続に寄与する可能性がある． 著者：Naoko BABA, Atsuko TANIMURA, Yoshikazu ISHII

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１．苦手な遊びへの取り組みが増え,遊びでの達成感が得られた事例~発達障害のある児へ SCOPE を使用して~		2022年6月	第31回日本作業行動学会学術集会（高崎市）	達成感が得られない発達障害のある児に対し，短縮版小児作業プロフィールを用いて評価し，苦手さが認められた意志に関する項目に着目して介入を行った．その結果，苦手な遊びへの取組が増え，達成感が得られるようになり，落ち着きのなさの軽減につながった． 共同演者：池田史恵，吉岡和哉，石井良和
２．精神障害者の就労継続に影響を与える主観的認識－混合研究法		2022年6月	第49回日本職業リハビリテーション学会．仙台市（オンライン）．	本研究では，就労を継続している精神障害者の主観的認識にどのような概念があるか，混合研究法を用いて検討した．その結果，就労を継続している精神障害者には働く前，仕事の維持のため，就労を継続することによる新たな認識の概念が明らかになった． 共同演者：馬場順子，谷村厚子，石井良和
３．地域在住要支援・要介護高齢者の肯定的な作業同一性を維持するための要因		2022年9月	第56回日本作業療法学会（京都市）	本研究の目的は,高齢者の縦断的量的データを用いて,肯定的な作業同一性を維持するための要因を明らかにすることであり，３ヶ月後の作業同一性尺度における項目６と10に相関が認められ，これらの要因の影響を介入に以下説可能性が示唆さ

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属 ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学部 作業療法学科　氏名 竹原敦

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1 認知症の人のコミュニケーションと社会的役割の促進からみたQOL（繁田雅弘・竹原敦/編：認知症の人の生活を考える―患者・家族のQOLのために―）	単著	令和4年4月	Monthly Book Medical Rehabilitation273:6-11,2022.	認知症の人のQOLを社会的役割と関連づけ，情緒的調整，ネガティブバイアス，エラーレスラーニング，非言語的コミュニケーション，多様性のある役割の5つと捉えて解説した. 著者：竹原敦
2 認知症の人が社会参加をするための作業療法～「想い」「役割」「先入観」に焦点を当てて～	単著	令和4年4月	作業療法41(2)：166-170,2022.	認知症の人が社会参加をするための作業療法について，想い，役割，先入観という視点から考察した．認知症の人の言動に内在する本人の想いを受け止めること，役割獲得モデルによって段階に応じた役割獲得を支援すること，認知症の人に対する先入観，レッテル，スティグマ，偏見を払拭し，認知症の人の多様な可能性を示すことによって，多くの認知症の人が希望を持って社会参加することが可能になると思われる．作業療法士は，認知症の人を受け入れる社会の素地を創ること，すなわち，認知症の人が安心して生活できる社会に変えることが必要だと考えている. 著者：竹原敦
3 第31回日本作業行動学会学術集会　大会長講演　温故知新～作業療法の未来図～	単著	令和5年3月31日	作業行動研究26(4):183-187,2023	第31回日本作業行動学会の学会長講演を事例，個人の歴史的内容等を大幅に割愛し要約したものである．作業療法にとって歴史を探ることが，温故知新であることを伝えた．次に，国内外の作業療法の歴史におけるトピックスを紹介し，これらの歴史が私たちに何を伝えているかを考察した．最後に，歴史の変化に関わらず作業療法士が大切にしている「当たり前を科学する」ことについての捉え方の重要性を示した. 竹原敦

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1 第29回秋田県作業療法学会特別講演「高齢者や認知症の人がより良い人生を継続するために～作業療法士は何ができるのか？～」	単独	令和4年6月4日	秋田県作業療法士会	認知症の人がより良い人生を継続するために作業療法は何ができるかを高齢者や認知症の人の想い，役割，先入観という視点で検討した．秋田県は高齢化率が1位ですが，そのことを活用する作業療法のために，高齢者や認知症の人が何もできることはないとあきらめることがない，希望をもたらす作業療法実践を提案した． 竹原敦
2 興味のある作業により生活豊かさが再獲された事例～意志質問紙と作業を用いて～	共同	令和4年6月18日～19日	第31回日本作業行動学会学術集会（群馬）	その人らしい生活を送るためには，日常生活の向上だけではなく，したいと思い楽しみながら行える作業に満たされる必要がある．本事例は，興味があり楽しい作業を行うことによって，他者との交流の促進，意欲の向上，責任感や所属感などが見られると同時に，新たな作業が獲得された．VQなどMOHOの評価を用いることで，口数のすくない本事例が自分のことを語り，協業の促進が得られたと思われる．
3 温故知新～作業療法の未来図～（第31回日本作業行動学会学術集会 大会長講演）	単独	令和4年6月18日	第31回日本作業行動学会学術集会	国内外の作業療法の歴史，役割獲得，人間作業モデルを通して，作業療法の未来図について講演した． 竹原敦
4 研究は臨床に役立つのだろうか ?～認知症に関する研究を読みながら～	単独	令和4年7月10日	第18回東京都作業療法学会	臨床家にとって研究はどのように役立つかを考察した．世の中には，作業療法というキーワードではなくても，作業療法の視点が多くある．あたりまえのことを論文に，うまくゆかないことを論文にすることがよい．研究疑問（research question）は何かを明確にすること，論文をしっかり書くことは高度な技能なので，せめて研究論文の読むことができるようにすることが大切． 竹原敦
5 認定作業療法士取得研修選択　老年期　老年期障害の作業療法②高齢者に対する作業療法	単独	令和4年10月1日～2日	日本作業療法士協会	認定作業療法取得条件のための研修を行った．老年期の作業療法実践の評価，介入，成果の示し方，事例検討などを実施した． 竹原敦
6 図書館は認知症の人と家族に何を求められているのか	単独	令和4年10月4日	令和４年度岐阜県公共図書館協議会職員研究集会認知症と図書館	認知症の人の特徴を示した上で，認知症の人を支える図書館はどのような機能を持っているのか，図書館の認知症の人への任務と目標について検討した．図書館を通して，認知症の人がより安心して元気に暮らせる社会を図書館職員と共に創ることができる工夫について考察した． 竹原敦
7 臨床作業療法学演習 認知症の人と家族に対する作業療法実践について	単独	令和4年10月27日	神奈川県立保健福祉大学	認知症の人と家族に対する作業療法実践を，背景，症状，評価，アプローチと成果の視点で講義した．臨床実習を補完する実践的な内容を伝えた． 竹原敦
8 認知症の方の生活支援に作業療法は何ができるのか	単独	令和5年2月12日	第14回茨城県作業療法学会	認知症の人と家族に対し，作業療法は特に，その人の実生活に焦点を当てた評価を行うべきである．しかしその実際的な方法については，悩んでいる作業療法士も多い．今回はより具体的な点について考察する． 竹原敦
9 認知症アップデート研修：認知症の行動・心理症状（BPSD）の原因・背景および障害構造の理解	単独	令和5年2月26日	東京都作業療法士会	日本作業療法士協会からの委託を受けて行っている認知症アップデート研修．本講座では，特に，BPSDの原因，背景，症状と作業療法実践について述べた． 竹原敦

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　作業療法学科　　氏名　南征吾

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
作業療法リーズニング―の教科書	共著	2022.8	メディカルビュー社	第3章領域別のリーズニング「緩和ケアにおけるリーズニングの特徴」を担当し執筆した。pp137-148

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Effects of purposeful activity-based electrical stimulation therapy for a stroke patient with severe upper-limb paresis on cerebral haemodynamics: Trial of a home-based support programme 脳卒中の重度上肢麻痺患者に対する合目的的電気刺激療法が脳血行動態に及ぼす影響について：在宅支援プログラムの試み	共著	2022年12月	Cognition & Rehabilitation	この研究の目的は、慢性脳卒中生存者の機能的近赤外分光法（fNIRS）を使用して、脳機能に対する合目的的電気刺激療法（PA-EST）の効果を判断することでした。 Seigo Minami, Ryuji Kobayashi, Ken Kondo, Takahiro Horaguchi, Takuya Ishimori, Hideaki Aoki, Yoshihiro Fukumoto, Tomoki Aoyama
特集：リハビリテーションにおけるメディカルDX 上肢用アシストロボット	共著	2022年11月	運動器リハビリテーション	上肢ロボットシステムとリハビリテーションを組み合わせた技術を、デジタル・トランスフォーメンションを活用して社会実装していく課題は、「私らしく生きる」を各専門技術者が共同で考えることで、麻痺のある上肢をもつ人が創造性のある生活・仕事に再び挑戦する変化を与えるだろう。これによって、さらなる技術がうまれ、それに沿った機器やシステムが開発され、いままで見過ごされていた人たちの生活の質を増進させるだろう。 南征吾，小林隆司，青山朋樹
慢性重度片麻痺上肢の回復に有効なサイバネティック機能的電気刺激装置の開発	共著	2022年11月	立石科学技術振興財団助成研究成果集	本研究では，手の作動する環境（物体）の距離や高さをデータ処理できるよう画像センサを用いて測定する。手の動くシステムは，指導モードと実施モードによって調整する電気刺激装置の開発研究である。その研究報告をした。 南征吾，小林隆司

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Purposeful activity-based electrical stimulation therapy focusing on the adaptation to life of chronic stroke survivors: A case study 慢性脳卒中の生活適応力を重視した合目的的電気刺激療法：症例研究	共著	2022年7月	15th International Socienty of Physical and Rehabilitation Medicine World Congress	本事例研究の目的は、脳卒中慢性期患者の重度片麻痺上肢が緩和され、生活への適応を高めた合目的的敵電気刺激療法(purposeful activity-based electrical stimulation therapy; PA-EST)の実践事例を報告した。 Seigo Minami,Ryuji Kobayashi,Yoshihiro Fukumoto, Aoki Hideki, Aoyama Tomoki
Purposeful-Electrical stimulation therapy based on individual roles and habits for patients with chronic severe hemiplegic upper limbs: A case report 慢性重度片麻痺上肢患者に対する役割と習慣に基づいた合目的的電気刺激療法：症例報告	共著	2022年8月	18th World Federation of Occupational Therapists	この研究の目的は、慢性重度上肢麻痺患者の役割と習慣に従って、電気刺激装置と目的のある活動を使用した在宅作業療法のプログラムを開発することでした。事例を通して、回復のプロセスを示した。 Seigo Minami, Ryuji Kobayashi
「家族介護者の生活行為への関与」に関する質問紙の併存妥当性の検討 ―在宅生活を支援する家族介護者の心境の整理―	共著	2022年9月	第56回日本作業療法学会	我々は,家族介護者の生活行為に焦点化した質問紙(南ら;2017)を試作した.本質問紙の内容は,家族介護者の介護状況(14項目)と作業経験(19項目),対処環境(9項目)の３因子に整理され,家族介護者自身で回答することにより,コーピング課題の明確化が行え,家族介護者の生活行為の状態に考慮した支援への活用が期待できる.本研究では,本質問紙の各項目が適切に測定できているかについて,心理的状態とストレス対処状態を確認できるState trait anxiety inventory (STAI)とStress coping inventory (SCI)との併存妥当性を検討した. 南征吾,小林隆司,佐野伸之,菅沼一平,青木秀哲
合目的的電気刺激療法により生活期上肢の機能および生活場面での使用頻度が向上した一事例	共著	2022年9月	第33回全国介護老人保健施設学会	本報告は、生活期において麻痺側上肢の使用が生活場面で低い通所リハビリを利用する人に対して、PA-ESTを約3ヶ月間実施した。結果、麻痺側上肢機能の回復および生活場面での麻痺側上肢の使用頻度が増加に至ったので報告した。 髙山久実, 吉田恵美, 石森卓矢, 藤田真介, 腰塚洋介, 南征吾, 美原恵里
重度片麻痺上肢に対する合目的的電気刺激療法が脳循環動態と運動機能に及ぼす効果（事例）	共著	2022年11月	北関東作業療法学会	本事例研究では，機能的近赤外分光分析法（functional Near-Infrared Spectroscopy: fNIRS by Shimazu）を用いて，PA-EST後のオキシヘモグロビン（oxyhemoglobin: OX-Hb）の変化による脳循環動態を確認し，脳の機能と運動機能についての関係性を検討した．その結果，PA-ESTのプログラム実施後に運動機能の改善を認め，運動野のOX-Hb濃度が増加したので報告する． 南征吾，小林隆司，近藤健，洞口貴弘，石森卓矢,青木秀哲，福元喜啓，青山朋樹

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　作業療法学科　　氏名　宮寺寛子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
作業参加の視点から保育所等訪問支援における保育士への助言を行った事例	共著	2022年10月	ぐんま作業療法研究	作業療法の実践モデルを用いて，保育所等訪問支援において，保育士に対するアドバイスを行った．結果，保育士のスキル向上に寄与し，対象児の問題行動も減少した． 宮寺寛子，比良亜希子

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　作業療法学科　　氏名　馬塲　順子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
ゼロから始める就労支援ガイドブック	共著	2022年8月	メジカルビュー社	作業療法士向けの障害者就労支援における指南書．就労支援の理論，障害別支援方法，社会資源をどのように利用するか等のガイドブック． 担当部分：用語集解説 共著者：芳賀大輔，金川善衛，福富宏之（編集），馬塲順子他．

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1.精神障害者の就労継続に影響する就労準備性と作業参加の特徴に関する検討 （査読付き）	共著	令和4年 9月	作業行動研究 26(2),73-80.	日本の精神障害者の職場定着率の低さが問題になっており，障害者の就労能力を客観的に可視化し，支援を行う必要があるものの，この分野の研究は不足している．本研究では，個人の就労準備状況と作業参加状況を捉え，就労定着支援における着眼点とすることを目的とした．結果，既存の就労準備性では就労継続を予測することができず，作業療法における作業参加の視点，習慣化，コミュニケーションと交流技能が就労継続に寄与していた．このことから，就労定着支援では，就労準備性ではなく作業参加の視点を用いた支援が有効である可能性を示唆した． 担当部分：研究計画，データ収集，分析，論文執筆 共著者：馬塲順子，谷村厚子，石井良和
2.精神障害者地域移行・地域定着支援の連続した実践事例に関する文献研究 （共著論文，査読付き）	共著	令和4年 10月	ぐんま作業療法研究25 3-9.	精神障害者の地域移行・地域定着支援における連続した実践事例を対象に，どのような領域に着目した実践か，またその内容を概観することを目的に文献研究を行った．その結果，特にICF領域の活動参加で「健康に注意すること」「基本的な経済取引き」と，環境因子の「保健サービス・制度・政策」が多くの文献から抽出された．多機関・多職種連携において退院前から地域生活維持までの切れ目のない支援で，それぞれの専門職による専門性を発揮した包括的支援が行われることが重要であると考えた． 担当部分：研究計画，データ収集，分析，論文執筆 共著者：馬塲順子，岡田直純
3.認知症クライアントの選択・決定支援に関する一考察～「エピソード記述」と「再動機づけ過程」の介入戦略 （共著論文，査読付き）	共著	令和4年 10月	ぐんま作業療法研究25 28-34.	認知症クライアントの自己決定に寄り添い，本人が作業に向かい続けるためにどのような関りが必要か，臨床の作業療法場面での関りを振りかえり考察した．作業療法士の励ましや助言は，探索段階にあったクライアントの自己決定の促しに繋がり，能力の認識の変化に至った．これには，エピソード記述によりクライアントの思いを理解し，再動機づけ過程からクライアントの意志の段階に即した介入が関係していると考えられた． 担当部分：共同研究のため担当部分抽出不可能 共著者：岡田直純，馬塲順子

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
4.Subjective perceptions that affect the continued employment of persons with mental disabilities in Japan: A mixed-methods study （日本における精神障害者の雇用継続に影響を与える主観的認識： 混合研究） （共著論文，査読付き）	共著	令和5年 1月	WORK 75 711-725,2023. DOI：10.3233/wor-220144	精神障害者が就労支援を受けながら就労を継続する能力に影響を与える主観的特性を明らかにするために、混合法による研究を行った。その結果、働き続ける参加者の現在の仕事の維持と将来に関する主観的認識について、5つの包括的上位概念と12の下位概念が明らかになった。本研究は、精神障害者の主観的ニーズに基づく就労支援システムの開発を促進し、その結果、精神障害者の就労継続に寄与する可能性がある。 担当部分：研究計画，データ収集，分析，論文執筆 共著者：Naoko Baba，Atsuko Tanimura，Yoshikazu Ishii ※本論文は，IOS Press Showcase on Kudosへの掲載論文として選出された. 【URL】 https://www.growkudos.com/publications/10.3233%25252Fwor-220144/reader

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1.精神障害者の就労継続に影響を与える主観的認識：混合研究法	―	令和4年 8月	第49回日本職業リハビリテーション学会	精神障害者の1年以内離職が多い中，その離職理由には個人的理由が上位にあるものの，就労支援において当事者の主観を評価する手法は確立されていない．本研究では，就労を継続している精神障害者の主観的認識にどのような概念があるか，混合研究法を用いて検討した．結果，就労を継続している精神障害者には働く前，仕事の維持のため，就労を継続することによる新たな認識の概念が明らかになった． 担当部分：序論，方法，結果，考察の全て 共著者：馬塲順子，谷村厚子，石井良和
2. 第56回日本作業療法学会専門作業療法士セミナー	―	令和4年 9月	第56回日本作業療法学会	専門作業療法士セミナー（就労支援）講師 馬塲順子，大川浩子，北上守俊
3.第56回日本作業療法学会シンポジウム座長	―	令和4年 9月	第56回日本作業療法学会	シンポジウム1自分らしい働きがいのある仕事のために座長 座長：馬塲順子 シンポジスト：清野一博，若尾勝己，鈴木玲央，根本歩美

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　作業療法学科　　氏名　吉岡　和哉

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
苦手な遊びへの取り組みが増え，遊びでの達成感が得られた事例 ～発達障害のある児へSCOPE を使用して～	共著	令和4年6月	第31回 日本作業行動学会（群馬）	達成感が得られない発達障害のある児に対し，短縮版小児作業プロフィール（以下，SCOPE）を用いて評価し，苦手さが認められた意志に関する項目に着目して介入を行った．その結果，苦手な遊びへの取り組みが増え，達成感が得られるようになり，落ち着きのなさの軽減につながった 共同演者：池田史恵，吉岡和哉，石井良和
小学校教諭の相談内容の変化について一定期的な勉強会の取り組みからー	単著	令和4年9月	第56回 日本作業療法学会（京都）	発達領域のOTの働き方として，教諭との連携がある．教諭と勉強会を開催した１年目と3年目で内容の違いを検討そた．1年目はネガティブな内容が中心であったが，3年目ではネガティブとポジティブな両方の内容が認められた．これらの結果から，課題に対する取り組み方と合わせてクラス全体の様子など共有することが1つのポイントとして考えられる．また，1年目と3年目の比較であったことを受けて捉え方への変化には時間が必要な内容もあり重要なポイントである．
新型コロナウイルス感染拡大による臨床への影響－会員へのアンケート調査からー	共著（FA）	令和4年11月	第39回日本感覚統合学会研究大会（オンライン）	概要：COVID-19により消毒時間やスペースの確保，人数制限，ボールプール等の使用遊具の制限など，療育や集団指導に大きな影響が出ていた．マスクの着用は，個々の感覚特性に合わせて対応など，SI学会員の中には個々の子どもの感覚特性に合わせた対応の重要性を理解し，柔軟な対応が検討されていた． 共同演者：吉岡和哉，髙橋明日香，浜田昌義，石井孝弘，土田玲子

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　作業療法学科　　氏名　　岡田直純

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
事例報告：認知症クライアントの選択・決定支援に関する一考察～「エピソード記述」と「再動機づけ過程」の介入戦略～	共著	2022年10月	ぐんま作業療法研究25, 28-34頁	著者：岡田直純，馬場順子，認知症クライアントが作業場面にいかにして主体的な自己決定をおこなっているか、エピソード記述を用いてその方略について考察した.
研究論文：精神障害者地域移行・地域定着支援の連続した実践事例に関する文献研究　,馬場順子、ぐんま作業療法研究　25	共著	2022年10月	ぐんま作業療法研究25, 3-9頁	著者：馬場順子，岡田直純，精神障害者が地域移行支援・地域定着支援を用いることで地域生活を継続している報告を分析し、地域で生活を続けるための要因を分析した.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　作業療法学科　　氏名　近藤健

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
電子版上肢機能評価システムを使用した 若年者と高齢者のリーチ機能比較	共著	2022年5月	電気学会論文誌C 142(5)	電子版上肢機能評価の信頼性を検証し、若年者と高齢者の反応の比較をしました。高齢者の方のリーチ機能低下が読み取ることができ、臨床現場で役立つ可能性が示唆されました（査読あり） 小口達也，小田垣雅人，野口直人，近藤健，秋山稜登，李範爽
導電性繊維を用いた体圧・接近センサによる車椅子への移乗時における体圧応答の評価	共著	2022年5月	電気学会論文誌C 142(5)	車椅子移乗動作を客観的に評価するために、体圧・接近センサーを開発しました。圧分布が適切に計測できることが確認でき、車椅子移乗動作の技能を評価することに役立つ可能性が示唆されました（査読有り ） 黒﨑 紘史，白畑 紘夢，川原 潤也，近藤 健，李 範爽，小田垣 雅人
Effects of purposeful activity-based electrical stimulation therapy for a stroke patient with severe upper-limb paresis on cerebral hemodynamics: trial of a home-based support program 脳卒中の重度上肢片麻痺患者に対する合目的電気刺激法が脳血行動態に及ぼす影響について：在宅支援プログラムの試み	共著	2022年12月	Cognition & Rehabilitation 3(1) 29-34	合目的電気刺激法の影響を単一患者で調査しました。重度片麻痺患者の為上肢機能改善は見られませんでしたが、脳機能の改善は見られ、長期的な効果を考慮する必要性が示唆されました。(査読付き）。 Minami Seigo, Kobayashi Ryuji, Kondo Ken, Horaguchi Takahiro, Ishimori Takuya, Aoki Hideaki, Fukumoto Yoshihiro, Aoyama Tomoki
終末期がん患者の在宅復帰に影響する予測因子－リハビリテーションを実施した患者に対する後方視的観察研究－	共著	2023年2月	作業療法42(1)，26-33	終末期がん患者の自宅退院に関わる因子を調査しました。結果として、生命予後、家族が因子として影響することがわかりました（査読有） 藤井洋有，近藤健
医療従事者からみたパウチ飲料開封用自助具の満足度調査	共著	2023年3月	日本作業療法研究学会雑誌25(1)，1-6	パウチ飲料を開封するための自助具を開発し、医療従事者からみた満足度を調査しました。開発した自助具は、医療従事者の満足度は高く、患者に提供されやすい可能性があることが示唆されました(査読有）。 近藤健，野口直人，秋山稜人，田中浩二，村田和香，李範爽

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Predictive factors associated with continued disposable diaper use in hospitalized elderly patients 入院中の高齢患者における紙おむつ継続使用に関連する予測因子	共著	令和4年9月	第56回日本作業療法学会（学会発表）	入院患者のテープ付き紙おむつ使用の継続因子を調査しました。その結果、社会的コミュニケーションがその影響因子として抽出され、テープ付き紙おむつ離脱のためには患者と職員の相互のコミュニケーションが必要なことが示唆されました（査読有り） ken kondo, Keisuke Sekine, Siyeong Kim, Waka Murata, Bumsuk Lee
Predictive Factors Affecting Lift Equipment Use after Home Discharge in Hospitalized Patients with Severe Disabilities 重度障害のある入院患者における自宅退院後のリフト機器使用に影響する予測因子	共著	令和4年9月	第56回日本作業療法学会（学会発表）	入院患者の移動用リフトの在宅で継続する因子を調査しました。その結果、リハ職員の家族指導が大きく影響していることが明らかになりました（査読有り） Toshiki Kitagaki, Ken Kondo, Akiko Ooka, Chika Yoshihara, Atsushi Kumon
Characteristics of hand-intrinsic muscle activities in manipulating real and simulated foods with chopsticks 箸を用いた実食物と模擬食物の操作における手指固有筋活動の特徴	共著	令和4年9月	第56回日本作業療法学会（学会発表）	箸操作時の筋活動を、実際の食物と模擬的な物品を使用し、調べました。その結果、模擬物品は主観的な難易度が低いが、筋活動は実際の食物と同等なことが示唆されました（査読有り）Quoc Duy Vo, Naoto Noguchi, Ryoto Akiyama, Ken Kondo, Bumsuk Lee
Characteristics of Hand-intrinsic Muscle Activities and Grip Force Control During Precision Grips 精密把持時の手指固有筋活動と握力制御の特徴	共著	令和4年9月	第56回日本作業療法学会（学会発表）	圧センサーを使用し、物品を把持する際の手指の筋活動を調べました。その結果、持ち方によって、筋活動が変化することを圧センサーが捉えることができることを確認できました（査読有り）Naoto Noguchi, Bumsuk Lee, Quoc Duy Vo, Ken Kondo, Tsuneo Yamazaki
終末期がん患者の退院時の日常生活動作及び看取りの予測因子の検討	共著	令和4年9月	第56回日本作業療法学会（学会発表）	終末期がん患者の日常生活動作及び院内で見取りになる予測因子を検討しました。結果、アルブミン値、FIM運動が因子として抽出され、これらのアセスメントの重要性が示唆されました（査読有り）藤井　洋有　，近藤　健　，小田　俊一　，関根　圭介
制作活動により精神的ストレスが軽減した乳がんを併発した脳梗塞患者の報告	共著	令和4年9月	第56回日本作業療法学会（学会発表）	制作活動を用いた作業療法介入を報告しました。 制作活動は入院患者の精神心理面の安定に寄与する可能性が示唆されました（査読有り）町田　知駿，近藤　健，藤井　洋有，小田　俊一，関根　圭介
急性期病棟における高齢入院患者の身体拘束とテープ付き紙おむつ使用状況の調査	共著	令和4年9月	第56回日本作業療法学会（学会発表）	入院患者のテープ付き紙おむつ、身体拘束の状況を調査しました。結果、テープ付き紙おむつ使用は軽減しました。一方、身体拘束軽減は難しく、課題が残りました（査読有り）常深　志子，中野　美佐，藤原香子，近藤　健

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
看護職とリハビリテーション職における「チーム医療に対する態度」と「対人葛藤方略」の関連	共著	令和4年9月	第56回日本作業療法学会（学会発表）	チーム医療における態度と対人葛藤対処方略の関係を調査しました。葛藤方略とチーム医療の態度には、統合解決には正の関係、支配には負の関係が確認できました（査読有り） 深澤　彩，高田　幸子，関根　圭介，近藤　健，李　範爽
作業療法士を含む認知症ケアチームが介入した患者の臨床的変化	共著	令和4年10月	臨床神経学 62(学会発表) S404-S404	認知症ケアチームの効果を単一グループで調査しました。 その結果、日常生活活動向上、身体拘束や紙おむつ軽減に効果が認められました（査読付）。 常深 志子，近藤 健，中野 美佐
パウチ飲料開封用自助具の操作手及び固定手への影響の検討	共著	令和4年11月	第7回北関東信越ブロック学会（学会発表）	パウチ飲料を開封する自助具を開発し、操作手だけでなく、固定手にも影響するかどうか調べました。結果、操作手だけでなく、固定手の運動負荷を減らす可能性が示唆されました（査読有） 近藤健，川田佑奈，野口直人，村田和香，李範爽
重度片麻痺上肢に対する合目的的電気刺激療法が脳循環動態と運動機能に及ぼす効果（事例）	共著	令和4年11月	第7 回北関東信越ブロック学会（学会発表）	合目的電気刺激法の影響を単一患者で調査しました。fNIRSを用いて、運動機能だけでなく脳循環動態の改善が示唆されました(査読付き）。南征吾，小林隆司，近藤健，洞口貴弘，石森卓矢，青木秀哲，　福元喜啓，青山朋樹
意欲的に行える課題を提供したことで，麻痺側上肢の活動レベルが改善した視床出血の一例	共著	令和4年11月	第7回北関東信越ブロック学会（学会発表）	脳血管障害発症後の上肢機能改善のための戦略を一事例を通して報告しました。治療者の一方的な練習内容の提示ではなく、対象者と協働することが重要であることが示唆されました（査読有） 町田知駿，近藤健，黒崎みのり，関根圭介
つまみの違いが物品操作における手指接触時間に与える影響について	共著	令和4年12月	日本作業療法研究学会雑誌　（学会発表）	圧センサーを使用し、つまみの種類の違いの手指接触時間への影響を調査しました。圧センサーはつまみの種類変化を識別できることが確認できました（査読有） 野口 直人，李 範爽，近藤 健，秋山 稜登，Quoc Duy Vo，佐藤 里沙，山崎 恆夫
脳卒中患者におけるトレイルメイキングテスト遂行時の視覚探索プロセスに関する検討	共著	令和4年12月	日本作業療法研究学会雑誌　（学会発表）	電子版TMT、アイトラッカーを使用し、脳血管障害患者の視覚的探索プロセスを調査しました。視覚探索のプロセスには上肢機能が影響していることが明らかになりました。（査読有） 秋山 稜登，野口 直人，近藤 健，Munkhbayasgalan Buambadorj，李 範爽
熟練者と初心者のベッド車椅子間の移乗介助動作の違い	共著	令和4年12月	日本作業療法研究学会雑誌　（学会発表）	移乗動作介助の効率性の指導を行うために、熟練者と初心者の違いを調査しました。調査の結果、初心者は熟練者に比べ上肢の負担が大きく、遂行時間が長いことがわかりました。これらの結果は、初心者への移乗介助指導時に役立つことが示唆されました（査読有）。 近藤 健，黒崎 紘史，白畑 紘夢，小田垣雅人，Lu Zhang，李 範爽，村田 和香
脳卒中中等度片麻痺上肢の合目的的電気刺激療法に係る脳機能効果:事例	共著	令和5年3月	第21回日本電気生理運動学会大会（学会発表）	合目的電気刺激法の影響を単一患者で調査しました。上肢機能改善だけでなく、脳機能も改善することを示唆しました(査読付き）。 南征吾，小林隆司，洞口貴弘，近藤健，福元喜啓，青木秀哲，石森卓矢，青山朋樹

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　作業療法学科　　氏名　石代 敏拓

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
家事に困難さを感じている脳卒中後遺症者の作業選択に関する研究−家事の遂行に焦点を当てた分析−	−	2022年9月	第56回日本作業療法学会（京都）	脳卒中後遺症者が家事をする際，どのような促進要因が影響しているかを明らかにすることを目的とした．7名の脳卒中後遺症者へのインタビューにより，家事の困難と，それらの困難があっても家事をする理由等を聴取し，質的に分析した．結果，日常生活の文脈が影響し，家庭維持者としての主体感，家事の許容範囲，家庭内や地域の物理的環境などが影響していた． （共同発表者：石代敏拓，小林法一）

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属 言語聴覚学科　　氏名　白坂　康俊

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
言語聴覚療法におけるアクティビティケア	ー	2022年6月25日	日本言語聴覚学会シンポジウム４「アクティビティケアがもたらすコミュニケーション力」での「言語聴覚療法におけるアクティビティケア」の発表とシンポジスト	ICFを基盤としたリハビリテーションでの活動をケアあるいは、支援することがアクティビティケアであり、医学モデルでなく社会モデルとして行われる。 言語聴覚障がいのある方に対する具体的なアクティビティの実践を紹介するとともに、「共生の街づくり」につながるアクティビティの理念とあり方について発表し、他のシンポジストとともに、言語聴覚療法とアクティビテイケアについて議論した。
言語聴覚療法におけるアクティビティケア	ー	2022年10月8日	八王子言語聴覚士ネットワーク□第３５回講演会講師	ICFの活動レベルのケアであるアクティビティケアについて、言語聴覚士の領域で具体的にどう展開するかを解説した。地域で実践しているST対象に、医療モデルではなく社会モデルにそって共生の街づくりにつながる実践とするにはどうするかを示した。
これからのアクティビティ・ケアについて ～ICFの枠組みで考える実践～	ー	2023年3月17日	NPO 法人 芸術と遊び創造協会「オンラインおもちゃゼミナール」講師	芸術と遊び想像境界のアクティビティインストラクター向けに、彼らの実践の理論的背景となる障害者権利条約とICFについて解説し、実践の妥当性を検証した。

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　言語聴覚学科　　氏名　齊藤吉人

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
言語聴覚療法技術ガイド第２版	共著	2022年11月	文光堂	言語聴覚士の臨床における技術を網羅して、一冊にまとめたガイドブック. 本人担当部分:総論,言語聴覚療法の基本的な知識と技術,多職種・同職種の連携と協働小児における連携,P77-80(4p記述)

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　言語聴覚学科　　氏名　神山政恵

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
なし				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
なし				

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　言語聴覚学科　　氏名　浅見知市郎

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
Angiotensin From the Kidney to Coronavirus 1st Edition Chapter15 Morphological aspect of the angiotensin-converting enzyme 2	共著	2023年2月	Elsevier	アンジオテンシン変換酵素2（ACE2）は、ACE（アンジオテンシン変換酵素）のホモログであり、哺乳類の血圧、体液量、血清電解質などを調節するレニン-アンジオテンシン系（RAS）の重要な調節因子として働くことが明らかにされてきた。本稿ではACE２の各臓器における局在に関して論じた。 Ken Yoshimura,Yasuo Okada,Shuji Toya,Tomoichiro Asami,Shin-Ichi Iwasaki

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
血清中サイトカイン（IL-4とIL-6）濃度と生活習慣の関連について（査読付き）	共著	2022年8月	日本未病学会雑誌 28巻2号　p102-104	血清中のIL-4,IL-6が日頃の生活習慣から受け る影響について検討した。大学教職員及びスポーツクラブに所属している高齢者のうち同意の得られた35名を対象とし、生活習慣の調査と採血を実施した。その結果、運動習慣のあると回答した群のIL-4濃度は中央値0.97pg/ml、運動習慣が無いと回答した群のIL-4濃度は1.47pg/mlとなり、運動習慣のあると回答した群はないと回答した群に比して有意に低下した(p<0.01)。一方、飲酒習慣や喫煙習慣の有無によるIL-4,IL-6濃度の変化は認められなかった。以上により、運動習慣はIL-4濃度を低下させアレルギーなどのリスクを低減させる可能性がある。その理由として、サイトカインの一部は筋肉を介して放出されているものであるため、飲酒や喫煙などの筋肉運動を伴わない習慣ではIL-4に影響を与えなかったと考えられた。藤本友香、浅見知市郎、柳川益美、時田佳治、古田島伸雄、林由里子、小河原はつ江、村上正巳
The red ruffed lemur, Varecia rubra (É. Geoffroy Saint-Hilaire, 1812): a comparative morphology investigation of lingual papillae and connective tissue cores（査読付き）	共著	2023年3月	Anatomical Science International 97(4) september 2022	ストレプシア属のアカエリマキキツネザル（Varecia rubra）の舌乳頭とその下の結合組織芯の形態を光学および走査電子顕微鏡を用いて研究した。舌の根元に分布する糸状乳頭は、体部や頂部に分布する構造物より大きかった。舌身と舌根の境目には6～8個の乳頭がY字型に配列していた。舌の後側縁には葉状乳頭が観察された．走査型電子顕微鏡で糸状乳頭の上皮層に一次突起と多数の補助突起を確認した。上皮除去後の糸状乳頭の結合組織芯は，やや後方に延びる楕円形の窪みを囲む複数の突起を示し，舌後部に大きな楓形の糸状乳頭が見られた。茸状乳頭の結合組織芯は、縦に畝のある円柱状の構造を示した。葉状乳頭の結合組織芯には、多数の管状突起が溝に沿って配列し、基部には唾液腺導管があった。レムール科の種として、アカエリマキキツネザルの菌状乳頭と糸状乳頭の外観は、ワオキツネザルの先行研究で報告されているものと似ているが、特に基部と舌体境界部の糸状乳頭結合組織コアに違いがあることが判明した。これらの結果は、キツネザルの分類学的・系統学的起源と、食餌の多様性の影響を示唆している。 Ken Yoshimura,Kaori Ono, Junji Shindo, Tomoichiro Asami, Shin-Ichi Iwasaki ,Ikuo Kageyama

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Study on Taste Threshold in Subjects of University Students	共著	2023年3月	北陸大学紀要 第54号	若年者の味覚に関する基礎データを収集することを目的として18歳から22歳の大学生31名（平均年齢： 19.7歳）を対象に、アンケートにより食嗜好性を行い、甘味、塩味の4つの基本的な味覚について、定量的な味覚検査を行った。濾紙ディスク法を用いて、舌の鼓索神経と舌咽神経支配領域の両側の認知閾値の総平均値を評価した。その結果、男性2名に軽度の異常が見られたものの、男女ともに総平均値は正常範囲内であることが確認され、閾値分布も観察された。収集したデータの結果から、若い被験者では、男性が女性よりも味覚閾値が高い可能性が示唆された。 Junko Takahashi, Hiroshi Watanabe , Tomoichiro Asami David Andrews, Shin-ichi Iwasaki

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
新型コロナウイルスワクチン接種における免疫脳への影響について	-	2022/11 /12	第29回日本未病学会学術総会	3回目の新型コロナウイルスワクチン接種の前後で採血を実施し、CD4/CD8比、キラーT細胞比率、NK細胞比率、並びに中和抗体価の測定を行った。また、ワクチン接種後に副反応に関するアンケート調査を実施した。 ワクチン接種前後の検討：CD8+細胞比率はワクチン接種前の平均値26.4％±8.9に比してワクチン接種後22.0％±6.3で減少傾向が見られた(p=0.08）。中和抗体はワクチン接種前152.9±91.5に対し、ワクチン接種後2227.8±1439.2となり有意な増加が認められた(p<0.01)。発熱の有無における検討：ワクチン接種後の副反応で発熱が37.5℃以下の者（4名）と37.5度以上の者(10名)とで比較検討したところ、リンパ球サブセットの各々の項目で有意差は認められなかった。しかし、中和抗体は37.5℃未満の発熱した者の群は1025.5±367.9に比して、37.5℃以上の発熱した者の群は2708.7±1430.9と有意に高値を示した(p<0.01)。高熱の副反応の発熱のあった群は発熱が無かった群に比して有意に高い抗体価を示すことが明らかとなった。藤本　友香、梁　明秀、宮川　敬、浅見　知市郎、林　由里子、白井　達也、佐田　充、長田　誠、亀子　光明、木村　博一、小河原　はつ江

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　言語聴覚学科　　氏名　三浦康子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
該当なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
「発話明瞭度の信頼性について～理学療法士、作業療法士との比較による発話明瞭度の限界ならびに課題と聴き取り力向上の可能性の検討」（査読付き）	共著	（2023年３月採択決定、現在印刷中）	群馬パース大学紀要	発話明瞭度の信頼性について検者内信頼性、検者間信頼性の両面から検討したところ、共に0.7以上の高い信頼性が得られた。しかし、言語聴覚士間の検者間信頼性は他のリハビリテーション職種に比べ低く、障害像を他の言語聴覚士に正しく伝えるためには発話明瞭度の評価に加え、他の客観的評価との列記が望ましい。一方で多くの構音障害患者の音声を聞くことで“聞き取り力”が向上する可能性が示され、聞き取りのトレーニングにより重症患者とのコミュニケーションが円滑になる可能性が示唆された。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
該当なし				

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　言語聴覚学科　　氏名　　丹下弥生

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
該当なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1.発話明瞭度の信頼性について ～理学療法士、作業療法士との 比較による発話明瞭度の限界ならびに課題と聞き取り力向上 の可能性の検討～	共著	2023年3月採択決定。印刷中	群馬パース大学紀要	発話明瞭度の信頼性について検者内信頼性、検者間 信頼性の両面から検討したところ、共に0.7以上の 高い信頼性が得られた。しかし、言語聴覚士間の 検者間信頼性は他のリハビリテーション職種に比べ 低く、障害像を他の言語聴覚士に正しく伝えるため には発話明瞭度の評価に加え、他の客観的評価との 列記が望ましい。一方で多くの構音障害患者の音声 を聞くことで“聞き取り力”が向上する可能性が

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
該当なし				

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　言語聴覚学科　　氏名　後藤 遼佑

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
該当なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Coordination within paraspinal muscles during bipedalism in humans, a white-handed gibbon, and a Japanese macaque. (ヒト、テナガザル、ニホンザルにおける二足歩行時の傍脊柱起立筋の協調的活動) (査読付き)	共著	2023年3月	Journal of Human Evolution 179: 103356	ヒトとテナガザルの傍脊柱筋において、二足歩行時に共通する特徴的な活動パターンが存在すること明らかにした。ヒトとテナガザルでは二足歩行時に傍脊柱筋が頭側から尾側へ活動してゆく。両者は先天的な二足歩行者である。しかし、非常習的な二足歩行者であるニホンザルに二足歩行を学習させ運動をさせると、そのパターンが観察されないことが分かった。この結果は、二足歩行ではロコモーション様式特異的な体幹制御メカニズムが存在することを示唆する極めて貴重な実証データであった。 (実験の計画と実施、分析、考察を担当) 共著者：後藤 遼佑、Neysa Grider-Potter、設樂哲弥、木下 勇貴、岡 健司、中野 良彦
Coordinatin of trunk motion during bipedal walking in the frontal plane: A comparison between Homo sapiens, Macaca fuscata, and exploratory study on a gibbon. (二足歩行における前額面での体幹運動の協調：ヒト、ニホンザルの比較と、テナガザルに関する探索的研究)（査読付き）	共著	2022年11月	American Journal of Biological Anthropology 180; 316-327	ヒトの体幹運動は種特異的であるといわれるが、ヒトの歩行では、支持相では骨盤が遊脚側に、胸チンパンジーの二霊長類以外の動物における二足歩行時の体幹の動きと歩幅の関係に関する研究は限られており、他の霊長類種とのさらなる比較が必要である。本研究では、ヒトに加え、ニホンザルとシロテナガザルの体幹運動を計測し比較した。その結果、ヒトにおける体幹の前額面内運動は霊長類の中でも特異的であるという仮説が支持された。 (実験の計画と実施、考察を担当) 共著者：木下 勇貴、後藤 遼佑、中野 良彦、平崎 鋭矢
Effects of orthoses on muscle activity and synergy during gait. (装具が筋活動とシナジーに与える影響)（査読付き）	共著	2023年2月	PLOS ONE 18 (2):e0281541	足関節装具（AFO）と膝踝足関節装具（KAFO）の2種類の装具が下肢筋の筋活動とシナジーに与える影響を検証した。筋活動を分析すると、いくつかの筋に有意な活動の増減が認められた。しかしながら、筋シナジーに基づく解析では、シナジーの数や筋シナジーの複雑さは装具の有無、種類は影響しなかった。すなわち、装具による直接的な機械的拘束は筋シナジーの枠組みを変化させいことが分かった。 (分析、考察を担当) 共著者：橋口 優、後藤 遼佑、中 徹

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
不連続な支持基体におけるニホンザルのラテラル・シーケンス歩容と霊長類的歩容の進化的要因に関する考察	－	2022年9月	第76回日本人類学会、第38回日本霊長類学会連合大会	霊長類はダイアゴナルシーケンス・ダイアゴナルカプレット（DSDC）歩容と呼ばれる派生的な歩容で歩くが、なぜ霊長類がその歩容で歩くのか、その進化上の利点は100年以上も未解明のままである。今回、新規な実験デザインのもとニホンザルの四足歩行実験を行い、DSDC歩容の適応的な利点を明らかにした。実験の結果、DSDC歩容の利点は(1) 前肢の固有感覚を頼りに後肢の着地位置を誘導できること、そして、(2) DSDC歩容では前肢と後肢が近接する時間が長いので、霊長類が樹上を移動する際に手で把持した樹枝を後肢へ直接渡すことができる点にあることが分かった。この2点を満たすDSDC歩容は樹上など支持基体が不連続な環境において適応的である考えられた。 発表者：後藤遼佑、木下勇貴、平崎鋭矢
シロテテナガザルの二足歩行および垂直木登りにおける脊柱起立筋活動	－	2022年9月	第76回日本人類学会、第38回日本霊長類学会連合大会	脊柱起立筋は、ロコモーション時に活動して体幹姿勢保持に関与する体幹筋であり、霊長類では二足歩行時と四足歩行時に類似した活動パターンを示すとされている。今回は新たに垂直木登りと二足歩行における脊柱起立筋活動の類似性を明らかにすべく、シロテテナガザル1頭の二足歩行と垂直木登りにおける脊柱起立筋の筋電図を解析し、筋電波形の定性的比較に加え、運動周期における筋活動量のピーク値、ピークを示すタイミング、周波数因子などの比較を運動間で行なった。その結果を踏まえ、シロテテナガザルの二足歩行と木登りにおける脊柱起立筋活動の類似点と相違点について報告した。 発表者：岡健司、後藤遼佑、中野良彦
体幹部加速度と筋電図の位相差に基づくヒト直立二足歩行の体幹運動制御-歩行速度の影響に関する予備的報告-	－	2022年11月	第43回バイオメカニズム学術講演会	ヒトの二足歩行時における固有背筋の活動と体幹の前後方向加速度の関係を調査した。ヒトの二足歩行では下肢の着地で生じる地面反力の前後方向成分の作用で体幹は後方に加速する。この時の後方加速成分には二つの成分があることが分かった。二つの成分は時間的にずれており、最初の後方加速と対応して固有背筋が活動した。また、最初の後方加速は下部体幹だけにみられ上部体幹には認められない。そして、二つ目の後方加速は体幹全体にみられ、そのタイミングが文節間でほぼそろっていることが分かった。これらの特徴と関連する機能にすいてはまだ分からないが、ヒトの直立二足歩行の体幹を動態を考えるうえで今後有益な資料になると考えられた。 発表者：後藤 遼佑、橋口 優

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　言語聴覚学科　　氏名　　岡野　由実

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
1.『聞こえ方は、いろいろ　片耳難聴Ｑ＆Ａ』	単著	2023年3月	学苑社	片耳難聴に関する日本初の専門書。30のQ&Aにより片耳難聴に関する基本的知識が学べる。全4章、116ページ

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1.『一側性難聴による聞こえの障害場面の発達的変容に関する検討』	共著（筆頭）	2022年9月	コミュニケーション障害学 39巻 p74-83 （日本コミュニケーション障害学会）	就学前に難聴の診断を受けた成人一側性難聴者（20-30歳台）12名を対象にインタビュー調査を実施し、内容をエピソードの語られた年代別に分析を行った。騒音下にて最も困難感が高い傾向が示され、発達的変容では年代が上がるにつれ困難場面が具体化かつ不可避的となる傾向を示した。特に社会人以降の情報の高次化に伴い、問題が顕在化することが明らかとなり、診断期からその後の発達経過を見据えた継続した支援の重要性について指摘した。 （研究の遂行、全体の考察、執筆を担当） 共著者：岡野由実、廣田栄子

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1.『軽中等度難聴児保護者の難聴に対する認識と療育態度に関する調査；重度難聴児との比較』	― （筆頭）	2022年5月	第48回日本コミュニケーション障害学会学術講演会	軽中等度難聴児保護者15名を対象として、児の障害認識および養育態度に関するアンケートを行い、結果を重度難聴児保護者を対象に行った調査と比較し、軽中等度難聴特有の課題について口演した。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共同研究者：岡野由実、廣田栄子、瀬戸由記子
2.『軽度難聴のある高校生2症例の英語聴取における補聴器装用効果』	― （筆頭）	2022年7月	第17回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会	英語聴取の困難さを契機に補聴器装用を開始した軽度難聴高校生2名を対象として、補聴器による英語聴取の校かを客観的に評価し、英語の習得度に影響を受けない英語聴取能の評価法を検証し、口演した。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共同研究者：岡野由実、角田玲子、坂崎弘幸、伏木宏彰
3.『軽中等度難聴児保護者におけるストレス状態に関する調査』	― （筆頭）	2022年10月	第67回日本聴覚医学会総会・学術集会	軽中等度難聴児保護者15名を対象として、診断時および現在の精神状態について、エジンバラ産後うつ尺度への回答を求めた。難聴程度の軽い児であっても診断時には高いうつ状態にあり、療育や同障児保護者との交流を経て、平常な精神を取り戻していく過程が示された。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共同研究者：岡野由実、廣田栄子、瀬戸由記子
4.『補聴器臨床における言語聴覚士と認定補聴器技能者の連携の実態調査り』	― （筆頭）	2023年3月	日本リハビリテーション連携科学学会第24回大会	A県全域の聴覚臨床に従事する言語聴覚士を対象として、補聴器診療に関する業務内容についてアンケートを実施した。多くの施設で言語聴覚士と認定補聴器技能者が協働し業務にあたっていたが、その割合は施設によって異なった。言語聴覚士の専門性向上の必要性についてポスター発表を行った。 （単独での発表）

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　言語聴覚学科　　氏名　及川　翔

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　検査技術学科　　氏名　長田　誠

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
遺伝子検査技術　−遺伝子分析科学認定士テキスト−改訂第3版	共著	2023年3月	日本臨床検査同学院	日本臨床検査同学院編集，全377頁，担当：分子生物学（70頁～77頁）．基礎編，医学的基礎知識の分子生物学について執筆した．遺伝，遺伝情報，タンパク質の合成と成熟、タンパク質のプロセシング，エピジェネティクス，，microRNAとsiRNA，細胞周期と細胞分裂について図を加えわかりやすく解説した．

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Evaluation of four phosphopeptide enrichment strategies for mass spectrometry-based proteomic analysis.，	共著	2022年4月	PROTEOMICS，	Phos-tag磁気ビーズは、非リン酸化タンパク質を多く含む血清試料からのリン酸化タンパク質（ペプチド）濃縮に適しており，血清成分を添加する細胞培養用培地からのリン酸化ペプチド濃縮にも適している． （共同研究につき，本人担当部分抽出不可能） Yoko Ino,Eiji Kinoshita,Emiko Kinoshita-Kikuta,Tomoko Akiyama,Yusuke Nakai,Kohei Nishino,Makoto Osada,Akihide Ryo,Hisashi Hirano,Tohru Koike,Yayoi Kimura.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
新型コロナウイルスワクチン接種における免疫への影響について		2022年10月	日本未病学会	藤本 友香，明 秀，宮川 敬，浅見 知市郎，林 由里子，白井 達也，佐田 充，長田 誠，亀子 光明，木村 博一，小河原 はつ江
Sia test陽性を示すmonoclonal蛋白のクラス別出現頻度およびその特性に関する研究		2022年10月	日本臨床検査医学会	神宮 大輝，長澤 紀佳，林 由里子，木村 鮎子，松本 守生，澤村 守夫，長田 誠，藤田 清貴
Phosphopeptide enrichment using Phos-tag technology reveals functional phosphorylation of the nucleocapsid protein of SARS-CoV-2.		2023年3月	AOHUPO　シンガポール	Yoko Ino1，Mayuko Nishi，Yutaro Yamaoka，Kei Miyakawa，Sundararaj Stanleyraj Jeremiah，Makoto Osada，Yayoi Kimura，Akihide Ryo

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　検査技術学科　　氏名　　亀子　光明

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
臨床検査データブック 2023-2024	共著	2023/1/15	㈱医学書院	アミノ酸分析2種類（チロシン，フェニルアラニン）について，従来の分析法にLC/MS法，LC/MS/MS法を加え，先天性代謝異常の検出法を解説した．

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　検査技術学科　　氏名　古田島伸雄

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　検査技術学科　　氏名　高橋克典

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
臨床検査学講座 検査機器総論	共著	2023年1月	医歯薬出版	藤田清貴、高橋克典 他 担当：3章－Ｅ。臨床検査分野で使用する様々な分析機器の原理や最新の知見を紹介する教科書。免疫系の機器の部分を担当。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Dictyostelium Differentiation-inducing Factor Derivatives Reduce the Glycosylation of PD-L1 in MDA-MB-231 Human Breast Cancer Cells.（細胞性粘菌分化誘導因子誘導体はMDA-MB-231ヒト乳がん細胞におけるPD-L1のグリコシル化を低下させる）（査読付）	共著	令和5年３月	J.M.J 69(2)：p105-115	トリプルネガティブ乳癌(TNBC)は転移性難治性癌であり、治療の選択肢は限られている。難治性の癌細胞は、T細胞の抗癌効果を阻害する免疫チェックポイント分子PD-L1およびPD-L2を発現することが多い。細胞性粘菌の分化誘導因子DIF-1の誘導体は、種々の癌細胞サイクリンD1発現を低下させることによって強力な抗増殖活性を有するが、PD-L1/PD-L2に対するそれらの効果は検討されていない。そこで、TNBCモデル細胞株であるMDA-MB-1細胞におけるPD-L2/PD-L1およびサイクリンD3/D231の発現に対する各種DIF誘導体の効果調査し、PD-L1のグリコシル化を低下させることを見出した。共著者：Hirayama A, Ishigaki H, Takahashi K, Miura Y, Kikuchi H, Kubohara Y.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
土壌微生物由来の合成化合物による免疫制御とそのメカニズム	共著	令和4年11月	第69回日本臨床検査医学会学術集会	細胞性粘菌の分化誘導因子DIF-1の化学構造を改変したDIF誘導体による免疫制御作用の作用メカニズムについて解明し、発表した。共著者：山本泰啓、高橋克典、石垣宏尚、藤田清貴。

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　検査技術学科　　氏名　岡山香里

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1. Effects of menstrual cycle on cytological false-negatives in women with persistent cervical intraepithelial neoplasia（査読付き）	共著	令和4年5月(2022)	Cytopathology, 33(5), 591-599.	本研究は、偽陰性の細胞学的結果が分泌初期に発生する可能性が高いことを明らかにした。 分泌初期に収集されたパパニコロウ塗抹標本において、注意深い顕微鏡観察をすることにより、偽陰性の発生を減らし、細胞学的感度を改善することに貢献する可能性がある。 共著者：Okodo M, Okayama K, Misawa Y, Tsukakoshi N, Tanabe K, Teruya K, Ito C, Ishii Y, Fujii M, Oda M.(共著者としてデータの収集と解析を行った。)
2. Effects of Menstrual Cycle on Various Morphologies of High-Grade Squamous Intraepithelial Lesions in SurePath™ Liquid-Based Cervical Cytology（査読付き）	共著	令和4年6月(2022)	Acta Cytologica, 14, 1-6.	本研究より、細胞診結果と月経周期との間に統計学的に有意な関連が認められた。細胞診の偽陰性は分泌期初期に発生しやすいことが明らかとなった。分泌期初期に採取された標本ををより注意深く正確に顕微鏡で観察することは、偽陰性の発生を抑え、細胞診感度を向上させることに寄与すると思われる。 共著者：Okodo M, Okayama K,Tsukakoshi N, Misawa Y, Tanabe K, Teruya K, Ito C, Ishii Y, Fujii M, Oda M.(共著者としてデータの収集と解析を行った。)
3. Causation of cornflake artifacts: Possible association of poor dehydration with drying before mounting in Papanicolaou stain（査読付き）	共著	令和4年6月(2022)	Diagnostic Cytopathology, 50(10), 301-305.	本研究は細胞診後の残留検体を用いて、コーンフレーク・アーティファクトに対する様々な影響を顕微鏡的に評価した。その結果、キシレン浸漬時の脱水不良による細胞内の残存水分が、コーンフレーク・アーティファクトの発生につながることがわかった。本研究により、Pap スミアにおけるコーンフレーク・アーティファクトは、封入前の乾燥に加え、脱水不良が原因であることが明らかになった。 共著者：Okayama K, Ishii Y, Oda M, Okodo M.（筆頭者としてデータの収集、解析と論文執筆を行った。）

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
4. Molecular evolution of the DNA gyrase gryA gene in Pseudomonas aeruginosa（査読付き）	共著	令和4年8月(2022)	Microorganisms 10(8), 1660.	gyrA遺伝子は共通祖先が760年以上前に存在し、その子孫が複数のクラスターを形成していることを示した。キノロン系薬剤が初めて臨床で使用された1962年以前の遺伝子の進化速度は、薬剤使用後に比べて有意に低いことが示された。これらの結果から、gyrA遺伝子は、細菌がキノロン治療を克服するために進化したことが示唆された。 共著者：Sada M, Kimura H, Nagasawa N, Akagawa M, Okayama K, Shirai T, Sunagawa S, Kimura R, Saraya T, Ishii H, Kurai D, Tsugawa T, Nishina A, Tomita H, Okodo M, Hirai S, Ryo R, Ishioka T, Murakami K.（共著者としてデータの収集と解析を行った。）
5. High-resolution anoscopy for the diagnosis and treatment of human papillomavirus-related anal intraepithelial neoplasia in human immunodeficiency virus-seropositive men who have sex with men in Japan（査読付き）	共著	令和4年8月(2022)	Journal of Cancer Prevention & Current Research, 13(3) 83-88.	HIV血清陽性の男性125名の肛門パップスメアーを実施し、HIV血清陽性の男性with men (MSM) を対象とし、HRAと組織生検を実施した。その結果、HRAは高悪性度前癌病変の早期発見に有用であることを明らかにした。 共著者：Kitamura H, Itoda I, Okodo M, Okayama K, Kawai S, Teruya K, Furuse J.(共著者としてデータの収集と解析を行った。)
6. Detailed Molecular Interactions between Respiratory Syncytial Virus Fusion Protein and the TLR4/MD-2 Complex In Silico（査読付き）	共著	令和4年10月(2022)	Viruses 14(11), 2382.	RSV FタンパクとTLR4およびMD-2タンパク質複合体との間の分子相互作用を明らかにするため、 in silico 分析が実行した。その結果融合前タンパク質と融合後タンパク質の両方における部位 II および IV の中和抗体 (NT-Ab) 結合部位が、それらとTLR4 分子の間の相互作用に関与していることを示しました。 共著者：Akagawa M, Shirai T, Sada M, Nagasawa N, Kondo M, Takeda M, Nagasawa K, Kimura R, Okayama K, Hayashi Y, Sugai T, Tsugawa T, Ishii H, Kawashima H, Katayama K, Ryo A, Kimura H.（共著者としてデータの収集と解析を行った。）
7. Rhinovirus Infection and Virus-Induced Asthma（査読付き）	共著	令和4年10月(2022)	Viruses 14(12), 2616.	Rhinovirus (RV) 誘発性喘息をより深く理解するには、RV感染の性質とそれに対応する宿主防御機構を解明する必要がある。この総説では、RV誘発性喘息の複雑さを整理した。 共著者：Hayashi Y, Sada M, Shirai T, Okayama K, Kimura R, Kondo M,Okodo M, Tsugawa T, Kimura H.(共著者としてデータの収集と解析を行った。)
8. 当院における新型コロナウイルス感染症の疫学および分子疫学（査読付き）	共著	令和4年12月(2022)	群馬県医学会 116, 123-128.	受診の際に新型コロナウイルス感染症が疑われた症例を基に疫学調査ならびに分子疫学解析を行った。経験した症例は本疾患に典型的な臨床所見を示すとともに、調査期間中に複数の変異株が出現し本疾患の原因になったことが示唆された。 共著者：原田和彦，小林実穂，錦戸崇，林由里子，岡山香里，三浦佑介，佐田充，藤田清貴，木村博一，猿木信裕，伊藤一人，黒澤功.（共著者としてデータの収集と解析を行った。）

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1. 月経周期における子宮頸部由来細胞の剥離性の違い	―	令和4年6月(2022年)	第63回日本臨床細胞学会春期大会，東京	増殖初期の腟サンプルの自己採取は、サンプル量が不十分であるか、ウイルス量が少ないことを示しており、HPVジェノタイピングに影響を及ぼすことが明らかになった。 共同発表者：大河戸光章，岡山香里，伊藤千恵子，石井保吉，小田瑞恵.
2. 月経周期におけるSIL細胞の出現性の違い	―	令和4年6月(2022年)	第63回日本臨床細胞学会春期大会，東京	分泌初期に収集されたパパニコロウ塗抹標本において、注意深い顕微鏡観察をすることにより、偽陰性の発生を減らし、細胞学的感度を改善することに貢献する可能性がある。 共同発表者：三澤幸美，塚越菜津子，岡山香里，伊藤千恵子，石井保吉，小田瑞恵，大河戸光章.
3. 月経周期におけるHSIL細胞の出現形態の違い	―	令和4年6月(2022年)	第63回日本臨床細胞学会春期大会，東京	分泌期初期に採取された標本ををより注意深く正確に顕微鏡で観察することは、偽陰性の発生を抑え、細胞診感度を向上させることに寄与すると思われる。 共同発表者：塚越菜津子，三澤幸美，岡山香里，伊藤千恵子，石井保吉，小田瑞恵，大河戸光章.
4. 細胞診による潜在性腟上皮HPV 感染または腟上皮内腫瘍（VaIN）の検索	―	令和4年6月(2022年)	第63回日本臨床細胞学会春期大会，東京	子宮頸部と腟から採取した細胞を用いてHPV遺伝子型を同定した結果、ローリスク型HPVが腟上皮、ハイリスク型HPVが子宮頸部上皮に対して有意に関連していた。 共同発表者：岡山香里，笹川寿之，石井保吉，小田瑞恵，大河戸光章.
5. Koilocyteは発癌性の高いHPVによって誘発されない.	―	令和4年6月(2022年)	第63回日本臨床細胞学会春期大会，東京	Koilocyteは16、52型などの発癌性の高いHPVによって誘発されないことを受賞講演にて概説した。 共同発表者：大河戸光章，岡山香里，野地夏美，石井保吉，藤井雅彦，小田瑞恵，笹川寿之.

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　検査技術学科　　氏名　林　由里子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1. Detailed Evolutionary Analyses of the F Gene in the Respiratory Syncytial Virus Subgroup A (RSウイルスサブグループAのF遺伝子の進化的分析)(査読付)	共著	令和3年(2021年)	Viruses 15;13(12):2525,2021 (IF=4.911)	【概要】バイオインフォマティクス手法を用いてRSウイルスサブグループA (RSV-A) 融合 (F) 遺伝子の進化、系統力学、および再感染関連の抗原性を分析し、Fタンパク質の配座エピトープと中和抗体結合部位の間のミスマッチがウイルスの再感染の原因である可能性を報告した。 (共著者として実験の遂行,データ解析を担当) 共著：Saito M., Tsukagoshi H., Sada M., Sunagawa S., Shirai T., Okayama K., Sugai T., Tsugawa T., **Hayashi Y.**, Ryo A., Takeda M., Kawashima H., Saruki N and Kimura H.
2. 【COVID-19の新知見】シクレソニド(ciclesonide)とファビピラビル(favipiravir)の新型コロナウイルスに対する分子薬理学的機構(査読付)	共著	令和4年(2022年)	臨床免疫・アレルギー科 77(3):276-279,2022	【概要】喘息の治療薬である吸入ステロイド薬シクレソニドとファビピラビルのSARS-Cov-2 に対する分子薬理学的機構について解説した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著：木村博一, 佐田充, 岡山香里, **林由里子**, 白井達也, 石井晴之
3. 血清中サイトカイン（IL-4とIL-6）濃度と生活習慣の関連について(査読付)	共著	令和4年(2022年)	日本未病学会雑誌 Vol28 No.2:102-104	【概要】血清中のIL-4,IL-6が日頃の生活習慣から受ける影響について検討した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著：藤本友香、浅見知市郎、柳川益美、時田佳治、古田島伸雄、**林由里子**、小河原はつ江、村上正巳

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
4. Detailed Molecular Interactions between Respiratory Syncytial Virus Fusion Protein and the TLR4/MD-2 Complex In Silico. (RSウイルス融合タンパク質と TLR4/MD-2 複合体のインシリコによる詳細な分子相互作用)(査読付)	共著	令和4年 (2022年)	Viruses 14(11);2382,2022 (IF=4.911)	【概要】RSウイルス (RSV) のF proteinとTLR4および骨髄分MD-2タンパク質複合体との間の分子相互作用についてin silico 分析によって中和抗体 (NT-Ab) 結合部位が、TLR4分子との間の相互作用に関与している可能性を明らかにした。 (共著者として実験の遂行,データ解析を担当) 共著：Akagawa M., Shirai T., Sada M, Nagasawa N., Kondo M., Takeda M., Nagasawa K., Kimura R., Okayama K., Hayashi Y., Sugai T., Tsugawa T., Ishii H., Kawashima H., Katayama K., Ryo A., Kimura H.
5 . Rhinovirus Infection and Virus-Induced Asthma. (ライノウイルス感染症とウイルス誘発性喘息)(査読付)	共著	令和4年 (2022年)	Viruses 14(12);2616,2022 (IF=4.911)	【概要】ウイルス誘発性喘息の主な原因物質であるライノウイルス (RV)について、RV感染症と対応する宿主防御メカニズムを解説した。 (筆頭著者として全体の考察, 執筆を担当) （**筆頭論文**） Hayashi Y., Sada M., Shirai T., Okayama K., Kimura R, Kondo M., Okodo M., Tsugawa T., Ryo A., Kimura H.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1. 加齢による運動機能低下が改善するミクログリア特異的SIRPα欠損マウスにおける遺伝子発現解析	共著	令和4年7月 (2022年)	NEURO2022（第45回日本神経科学大会第65回日本神経化学大会第32回日本神経回路学会大会）	【概要】マイクロアレイ分析とRT-qPCR分析によって、高齢のMG-SIRPα cKOマウスと対照マウスの脳における遺伝子発現プロファイルを比較し、MG-SIRPα cKO マウスの脳内で発現が著しく変化している遺伝子を同定し報告した。 共著：水谷瑠衣、今井武史、富山飛鳥、松下紗世子、森田紋子、浦野江里子、橋本美穂、林由里子、的崎尚、大西浩史
2. ミクログリアにおけるCX3CR1とSIRPαの機能的相互作用	共著	令和4年7月 (2022年)	NEURO2022（第45回日本神経科学大会第65回日本神経化学大会第32回日本神経回路学会大会）	【概要】SIRPαがCx3CR1-CX3CL1シグナルと拮抗的に作用し、ミクログリアの機能を制御している可能性について報告した。 共著：今井武史、水谷瑠衣、富山飛鳥、松下紗世子、森田紋子、浦野江里子、林由里子、的崎尚、大西浩史
3. 膜型分子 SIRP αによるミクログリア活性化制御	共著	令和4年9月 (2022年)	第69回北関東医学会総会	【概要】ローターロッドテストの結果からMG-SIRPα cKO マウスは、加齢に伴う運動学習障害にも耐性を示す可能性について報告した。 共著：水谷瑠依、尾池恵摘、今井武史、正林大地、今田治子、榛澤春哉、浦野江里子、神宮大輝、林由里子、大西浩史

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. SIRP α欠損マウスにおけるミクログリア活性化領域の解析	共著	令和4年9月(2022年)	第69回北関東医学会総会	【概要】SIRPα 欠損による CD11c 陽性ミクログリア出現には領域特異性が認められ、ミクログリア活性化頻度が高い白質領域は，他の領域とは性質の異なるホットスポットであることを報告した。 共著：尾池恵摘、水谷瑠依、今井武史、正林大地、今田治子、榛澤春哉、浦野江里子、神宮大輝、**林由里子**、大西浩史
5. 測定試薬と反応するmonoclonal IgMの構造解析および反応メカニズム	共著	令和4年11月(2022年)	第69回日本臨床検査医学会学術集会	【概要】クリオグロブリンがTIA法のIgM測定第一試薬と反応し、免疫グロブリン量が偽低値を示した極めて稀な例について報告した。 共著：**林 由里子**、神宮 大輝、長澤 紀佳、小林 悠希、佐伯 仁志、河合 健、木村 俊久、藤田 清貴
6. Ultrafree-MC 遠心フィルターユニットを用いた簡易monoclonal IgA1精製法の開発	共著	令和4年11月(2022年)	第69回日本臨床検査医学会学術集会	【概要】Ultrafree-MC遠心フィルターユニットによるmonoclonal IgAの簡易精製法について報告した。 共著：高橋蓮、神宮大輝、長澤紀佳、**林由里子**、諏訪部章、藤田清貴
7. Cibacron Blue F3G-A affinity chromatographyを用いた硫酸基と反応するmonoclonal IgG1の段階的NaCl濃度勾配法による分離・精製に関する検討	共著	令和4年11月(2022年)	第69回日本臨床検査医学会学術集会	【概要】Cibacron Blue F3G-Aを用いた寒天ゲルと反応性を示すM蛋白の分離・精製手法について報告した。 共著：長澤紀佳、神宮大輝、**林由里子**、石井一歩、奈良拓弥、藤田清貴
8. Sia test陽性を示すmonoclonal蛋白のクラス別出現頻度およびその特性に関する研究	共著	令和4年11月(2022年)	第69回日本臨床検査医学会学術集会	【概要】M蛋白血症におけるsia test陽性のクラス別出現頻度とその特性について報告した。 共著：神宮大輝、長澤紀佳、**林由里子**、仲間盛之、松本守生、澤村守夫、長田誠、藤田清貴

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　検査技術学科　　氏名　荒木泰行

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
血清フェリチン値が体外受精・胚培養成績・妊娠率に与える影響についての検討	-	2022年7月28日（木）～29日（金）	第40回日本受精着床学会総会・学術講演会	我々は以前、血清フェリチン（Fe）値が低いと多核率が高く、Fe値が受精率に影響を与えている可能性を報告したが、今回は症例を増やし、体外受精・胚培養成績・新鮮初期胚移植の妊娠率、流産率について検討を行った。今回の結果においてもFe値が低いと多核率が高くなったことから、重度の鉄欠乏は正常受精率を低下させる可能性が再確認された。剱持智恵美，藤村佳子，中楯真朗，大場奈穂子，神沢典子，椛嶋香央里，加藤喜愛，大村生和子，八木遥香，荒木泰行，志村隆行，上村るり子，山口貴史，久保祐子，佐藤雄一
凍結融解後に人為的収縮操作を加えた胚盤胞の収縮度の違いによる妊娠率の検討	-	2022年7月28日（木）～29日（金）	第40回日本受精着床学会総会・学術講演会	本研究では、融解後の胚盤胞を人為的に収縮させ、収縮と臨床妊娠成績について後方視的に検討した。検討1. ICMとTEが良好で凍結融解直後の自然収縮で囲卵腔を確認した胚盤胞（S群）と拡張したままの胚盤胞（E群）の妊娠率と流産率を比較した。結果として妊娠率は同収縮度間で比べると形態良好胚で高く、同形態間では強収縮胚が低い傾向であった。流産率は同収縮度間で比べると形態良好な群が低い傾向であった。中楯真朗，藤村佳子，大場奈穂子，神沢典子，椛嶋香央里，剱持智恵美，加藤喜愛，大村生和子，八木遥香，荒木泰行，志村隆行，上村るり子，山口貴史，久保祐子，佐藤雄一
IVF治療歴のある男性の血清亜鉛濃度と精液所見および胚培養成績の検討	-	2022年11月3日（木）～4日（金）	第67回日本生殖医学会学術講演会・総会	今回我々は，男性の血清亜鉛濃度が精液所見および胚培養成績に影響しているのかを検討した．結果、男性の血清亜鉛濃度が高い場合，血清亜鉛濃度が低い場合よりも全精子濃度，運動精子濃度，奇形率に有意差が認められ，精液所見が良好であることが示された．また，男性の血清亜鉛濃度が高い場合で正常受精率に高い傾向が見られ，その後の分割率の向上に寄与している可能性が示唆された．大村生和子，藤村佳子，神沢典子，中楯真朗，剱持智恵美，加藤喜愛，荒木泰行，上村るり子，山口貴史，久保祐子，佐藤雄一

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　検査技術学科　　氏名　木村　鮎子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Adsorption of extracellular proteases and pyocyanin produced by Pseudomonas aeruginosa using a macroporous magnesium oxide-templated carbon decreases cytotoxicity (マクロ孔をもつ多孔質炭素MgOC150を用いた細胞外プロテアーゼおよびピオシアニンの吸着による緑膿菌の弱毒化) (査読付)	共著	2022/8/1	Current Research in Microbial Sciences, 3:100160	院内感染原因菌の中でも多剤耐性を持ちやすい緑膿菌による感染症の新規治療法の開発を目指し、マクロ孔をもつ多孔質炭素MgOC150を用いた緑膿菌培養上清中の病原性因子の吸着除去を試みた。電気泳動法と質量分析を組み合わせた実験により、緑膿菌培養上清の多孔質炭素処理によって細胞外プロテアーゼやアルカリフォスファターゼなどの細胞毒性タンパク質が除去され、結果として緑膿菌の細胞毒性が減弱化されることが明らかになった。 共著者：Hirakawa H, Kimura A, Takita A, Chihara S, Tanimoto K, Tomita H.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
マクロ孔型多孔質炭素を利用した緑膿菌の細胞外病原性因子の吸着と弱毒化 (学会ポスター発表)	共著	2022/12/1	日本分子生物学会	緑膿菌培養上清のマクロ孔型多孔質炭素処理により、緑膿菌が分泌する毒性タンパク質の吸着除去を試みた。結果として緑膿菌の細胞障害性が減弱化され、電気泳動・質量分析法により、多孔質炭素によって吸着除去された毒性タンパク質として、細胞外プロテアーゼやアルカリフォスファターゼが同定された。また、欠失変異体の解析により、これらの因子がヒト培養細胞に対する細胞障害性に関与することも確認された。 共著者：平川秀忠、木村鮎子、滝田綾子、千原清加、谷本弘一、富田治芳

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　検査技術学科　　氏名　石垣　宏尚

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Dictyostelium Differentiation-inducing Factor Derivatives Reduce the Glycosylation of PD-L1 in MDA-MB-231 Human Breast Cancer Cells	共著	2023年3月	Juntendo Medical Journal 2023. 69(2), 105-115	TNBC細胞株であるMDA-MB-231細胞におけるPD-L1/PD-L2およびサイクリンD1/D3の発現に対してのDIF誘導体の影響について検討を行った。その結果、一部のDIF誘導体においてグリコシル化PD-L1を部分的に減少させ、DIF誘導体が癌細胞に対するT細胞の活性をを促進させる可能性が示唆された。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
土壌微生物由来の合成化合物による免疫制御とそのメカニズム	－	2022年11月	日本臨床検査医学会（栃木）	T細胞系培養細胞であるJurkat細胞から誘導されるIL-2を免疫指標とし、各種DIF誘導体の作用を確認した。その結果、IL-2 mRNAの発現に影響を与えるDIF誘導体が確認された。さらにWb法、レポータ遺伝子アッセイの結果、DIF誘導体の作用点がAP-1あるいはNFκbであることが示唆された。
1蒟蒻粥の長期摂取の糖・脂質代謝に与える影響の検討	－	2022年11月	日本臨床検査医学会（栃木）	習慣的蒟蒻接種による満腹感と糖・脂質代謝への影響を解明することを目的とした。被検群に1日1袋2週間の蒟蒻粥摂取を行ってもらい、採血を実施した。その結果、TG代謝の中心的役割を担うLPLは粥摂取によって増加が認められ、運動時間が短い人でHbA1cの低下が認められた。蒟蒻摂取は、運動時間が短く、メタボ傾向の強いものに効果的であることが示唆された。

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　検査技術学科　　氏名　三浦　佑介

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1.当院における新型コロナウイルス感染症の疫学および分子疫学　（査読付）	共著	2022年12月	群馬医学 No.116 pp.123-128	医療法人社団美心会黒沢病院の発熱外来などを受診し、新型コロナウイルス感染症が疑われた症例を基に疫学調査ならびに分子疫学解析を行った（調査期間2021年4月～8月）。その結果、感染者の臨床症状、重症度および変異株の時期的な変遷において、既報と同様の結果が得られた。変異株のウイルス排出量の差異がみとめられ、感染拡大の要因となっていることが示唆された。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 原田和彦、小林実穂、錦戸崇、林由里子、岡山香里、**三浦佑介**、佐田充、藤田清貴、木村博一、猿木信裕、伊藤一人、黒沢功
2.Dictyostelium Differentiation-inducing Factor Derivatives Reduce the Glycosylation of PD-L1 in MDA-MB-231 Human Breast Cancer Cells（細胞性粘菌分化誘導因子の誘導体は、ヒト乳がん細胞株 MDA-MB-231 における PD-L1 のグリコシル化を低減する）（査読付）		2023年3月	Juntendo Medical Journal Vol.69(2), pp.105-115	細胞性粘菌由来の分化誘導因子であるDIFの誘導体が、乳がん細胞株 MDA-MB-231における免疫チェックポイントPD-L1/PD-L2の発現に影響を及ぼすかどうか検討した。誘導体の一部がグリコシル化 PD-L1 を部分的に減少させ、非グリコシル化 PD-L1 を増加させた。PD-L1 のグリコシル化はT細胞によるがん細胞への攻撃を防ぐため、DIF誘導体はがん細胞に対するT 細胞の攻撃を促進する可能性がある。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） Airi Hirayama, Hirotaka Ishigaki, Katsunori Takahashi, **Yusuke Miura**, Haruhisa Kikuchi, Yuzuru Kubohara

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28.尿中コレステリルエステルと腎障害の関連	-	2022年8月	日本医用マススペクトル学会第７回東部会 オンライン開催	慢性腎臓病は末期まで自覚症状が現れないため、腎機能検査や尿検査による早期発見が重要である。腎機能悪化の新たな予見バイオマーカーの開発への期待が高まりつつあるが、未だ確立には至っていない。本発表では、これまでの尿中コレステリルエステル（CE）と腎障害に関連する研究の成果と尿中CE増加の機序に関する仮説について、CE代謝を中心に解説した。 共同発表者：櫻井俊宏、**三浦佑介**、高田康徳、Divyavani Gowda、陳 震、関島将人、千葉仁志、惠 淑萍、

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　検査技術学科　　氏名　藤本　友香

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1.血清中サイトカイン（IL-4とIL-6）濃度と生活習慣の関連について	共著	2022年8月	日本未病学会雑誌.28(2),p102-104	血清中のIL-4,IL-6が日頃の生活習慣から受ける影響について検討した。群馬パース大学研究倫理審査委員会承認（PAZ14-14）後、大学教職員及びスポーツクラブに所属している高齢者のうち同意の得られた35名を対象とし、生活習慣の調査と採血を実施した。その結果、運動習慣のあると回答した群のIL-4濃度は中央値0.97pg/ml、運動習慣が無いと回答した群のIL-4濃度は1.47pg/mlとなり、運動習慣のあると回答した群はないと回答した群に比して有意に低下した(p<0.01)。一方、飲酒習慣や喫煙習慣の有無によるIL-4,IL-6濃度の変化は認められなかった。以上により、運動習慣はIL-4濃度を低下させアレルギーなどのリスクを低減させる可能性がある。その理由として、サイトカインの一部は筋肉を介して放出されているものであるため、飲酒や喫煙などの筋肉運動を伴わない習慣ではIL-4に影響を与えなかったと考えられた。藤本友香、浅見知市郎、柳川益美、時田佳治、古田島伸雄、林由里子、小河原はつ江、村上正巳(本人担当部分　筆頭：研究計画、研究の実施、検体保存、統計解析並びに論文作成等実施した)
2．新型コロナウイルスワクチンが免疫細胞に及ぼす影響	共著	2022年8月	日本未病学会雑誌.28(2),p53-57	新型コロナウイルスワクチン接種前、1回目接種後、2回目接種後に採血できた74名を対象に、CD4/CD8比、キラーT細胞比率、幼若NK細胞比率並びに成熟NK細胞比率を測定した。その結果、CD4/CD8比率は接種前に比して、1回目ワクチン接種後、2回目ワクチン接種後で有意に増加した(p<0.01)。その原因は、CD4陽性細胞比率の増加と、CD8陽性細胞比率の低下にあった。また、キラーT細胞は接種前に比して1回目のワクチン接種後で有意な増加が認められた（p<0.01）。幼若NK細胞と成熟NK細胞比率は共に、ワクチン接種前に比して1回目、2回目ワクチン接種後に有意な増加が認められ(p<0.01)、免疫記憶に関わるキラーT細胞やNK細胞が増加することでSARS-CoV-2に対して有益な免疫反応がなされるとこが明らかとなった。藤本友香、木村博一、小河原はつ江.　（本人担当部分　筆頭：研究計画、研究の実施、検体保存、統計解析並びに論文作成等実施した)

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
2．新型コロナウイルスワクチンが免疫細胞に及ぼす影響	共著	2022年8月	日本未病学会雑誌. 28(2),p53-57	新型コロナウイルスワクチン接種前、1回目接種後、2回目接種後に採血できた74名を対象に、CD4/CD8比、キラーT細胞比率、幼若NK細胞比率並びに成熟NK細胞比率を測定した。その結果、CD4/CD8比率は接種前に比して、1回目ワクチン接種後、2回目ワクチン接種後で有意に増加した(p<0.01)。その原因は、CD4陽性細胞比率の増加と、CD8陽性細胞比率の低下にあった。また、キラーT細胞は接種前に比して1回目のワクチン接種後で有意な増加が認められた（p<0.01）。幼若NK細胞と成熟NK細胞比率は共に、ワクチン接種前に比して1回目、2回目ワクチン接種後に有意な増加が認められ(p<0.01)、免疫記憶に関わるキラーT細胞やNK細胞が増加することでSARS-CoV-2に対して有益な免疫反応がなされるとこが明らかとなった。藤本友香、木村博一、小河原はつ江(本人担当部分　筆頭：研究計画、研究の実施、検体保存、統計解析、論文作成等実施した)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
大学院生時代の思い出	単著	2022年	群馬大学医学部 保健学科25周年記念誌	群馬大学医学部保健学科25周年記念誌の寄稿 大学院時代の研究や先生方、友人との思い出について書かせていただいた。

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　検査技術学科　　氏名　高橋　あゆ子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　検査技術学科　　氏名　長澤　紀佳

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1. Molecular evolution of the DNA gyrase gryA gene in Pseudomonas aeruginosa. (緑膿菌におけるDNAジャイレースgryA遺伝子の分子進化)（査読付）	共著	2022年8月17日	Microorganisms 2022；10(8)；1660	PseudomonasaeruginosaのDNAジャイレースA遺伝子（gyrA）について分子進化に関する研究を行った。gyrAはPseudomonas aeruginosaを含む種々の細菌のゲノム複製に重要な役割を果たしており、gyrAの変異はキノロン系抗生物質に対する耐性と関連していることが明らかになった。gyrA遺伝子および関連するキノロン系抗菌薬、シプロフロキサシンに対する耐性の詳細な分子進化解析を行い、ベイジアンマルコフ連鎖モンテカルロ（MCMC）法を用いて作成した進化系統樹から、gyrA遺伝子は細菌がキノロン系抗菌薬を克服できるように進化したことを報告した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：Sada M, Kimura H, Nagasawa N, Akagawa M, Okayama K, Shirai T, Sunagawa S, Kimura R, Saraya T, Ishii H, Kurai D, Tsugawa T, Nishina A, Tomita H, Okodo M, Hirai S, Ryo A, Ishioka T, Murakami K
2. Detailed molecular interactions between respiratory syncytial virus fusion protein and the TLR4/MD-2 complex in silico. （呼吸器合胞体ウイルス融合タンパク質とTLR4/MD-2複合体とのin silicoでの詳細な分子間相互作用 ）（査読付）	共著	2022年10月28日	Viruses 2022 Oct 28;14(11):2382	呼吸器合胞体ウイルス（RSV）融合蛋白質（F蛋白質）と細胞受容体Toll様受容体4（TLR4）および骨髄分化因子-2（MD-2）蛋白質複合体との分子間相互作用は不明である。そこで、これらの詳細な分子間相互作用を明らかにするために、様々なバイオインフォマティクス技術を用いたin silico解析を行った。今回のシミュレーションデータから、Fタンパク質のコンフォメーション変化に起因するこの結合親和性の増加は、RSV感染細胞内で合胞体を形成することができる可能性があり、これらの結果は、RSVの感染性と病原性（合胞体形成）をより深く理解することに貢献すると報告した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：Akagawa M, Shirai T, Sada M, Nagasawa N, Kondo M, Takeda M, Nagasawa K, Kimura R, Okayama K, Hayashi Y, Sugai T, Tsugawa T, Ishi H, Kawashima H, Katayama K, Ryo A, Kimura H
3. Acquisition of neutralizing antibodies against SARS-CoV-2 from mRNA-1273 in Japanese young people. （日本人若年者におけるmRNA-1273からのSARS-CoV-2に対する中和抗体の獲得） （査読付）	共著	2022年12月30日	日本未病学会雑誌 Vol.28 No.3	日本人大学生におけるmRNA-1273からのSARS-CoV-2に対する中和抗体（NT-Ab）の獲得について検討した。SARS-CoV-2スパイク（S）蛋白に対するNT-Abを高感度法で測定した。その結果、S蛋白に対するNT-Abはワクチン2回接種で1回接種の10倍以上誘導された（$p<0.05$）。これらの結果は、mRNA-1273ワクチンによって、血清中のNT-Abがウイルスおよびそのいくつかの変異体に対する防御レベルまで十分に上昇したことを示している。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：Sato-Fujimoto Y, Nagasawa N, Sada M, Shirai T, Miyakawa K, Akihide R, Hirokazu K

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
4. Molecular Evolutionary Analyses of the Pseudomonas-Derived Cephalosporinase Gene. （緑膿菌由来セファロスポリナーゼ遺伝子の分子進化解析）（査読付）	共著	2023年1月11日	Microorganisms 2023 Mar 1;11(3):635	シュードモナス由来セファロスポリナーゼ（PDC）の塩基配列多型が臨床に与える影響の証拠が増えつつあるにもかかわらず、そのコード遺伝子であるblaPDCの分子進化は依然として解明されていない。これを解明するために、我々はblaPDCの包括的進化解析を行った。 緑膿菌においてblaPDCは高度に保存されており、PDCは遺伝子型によらず同様の抗生物質耐性機能を示すことを報告した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：Shirai T, Akagawa M, Makino M, Ishii M, Arai A, Nagasawa N, Sada M, Kimura R, Okayama K, Ishioka T, Ishii H, Hirai S, Ryo A, Tomita H, Kimura H.
5. 麻疹ウイルス抗原蛋白とウイルス受容体との分子間相互作用に関する研究	単著	2023年2月	修士　学位論文	麻疹ウイルス（MeV）は小児の主要な死亡原因となっており再感染は非常に稀であるとされているが、その詳細な機序は未だ不明である。本研究ではバイオインフォマティクス技術を用いてMeVの宿主細胞への感染・再感染予防機序の理解を深めることを目的とした。その結果、立体配座エピトープと中和抗体結合部位の一致がMeVの再感染を抑制すること、中和抗体から逃れる変異は細胞受容体との結合能低下を招き、本ウイルス感染にとって有益でないことを明らかにした。 （実験の遂行、全体の考察、論文執筆）

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1. Cibacron Blue F3G-A を用いた硫酸基と反応するM 蛋白の分離・精製に関する検討	―	2022年11月18日	第69回日本臨床検査医学会学術集会 栃木県総合文化センター	M蛋白のスクリーニング検査には支持体として寒天ゲルを使用する免疫電気泳動を用いているが、M蛋白の中には寒天ゲルに含まれるアガロペクチンの主成分である硫酸基と反応し、同定を困難にする例が少なくない。本研究では、硫酸基を有しているCibacron Blue F3G-Aを用いることにより硫酸基と反応するM蛋白を容易に分離・精製できるのではないかと考え検討を行った。Cibacron Blue F3G-Aを用いた段階的NaCl濃度勾配法は，温和な条件で硫酸基と反応するM蛋白を分離・精製できることが確認されたことから、この手法は寒天ゲルと反応するM蛋白の解析に大いに威力を発揮するものと報告した。(筆頭) 長澤紀佳，神宮大輝，林由里子，石井一歩，奈良拓弥，藤田清貴
2. Ultrafree-MC 遠心フィルターユニットを用いた簡易monoclonal IgA1 精製法の開発	―	2022年11月18日	第69回日本臨床検査医学会学術集会 栃木県総合文化センター	Ultrafree-MC遠心フィルターと比較的少量の担体を用いた蛋白質精製法を報告した。新規簡易精製法では、従来使用されてきたカラムを用いた精製法と比較し精製度にほとんど差がなかったことが確認された。また、この新規精製法では、これまで問題視されてきた長時間を要する点、高コストの点、操作が煩雑である点などを解決することができた。さらに、簡易な操作で蛋白質を精製することができることから、臨床現場でもM蛋白などの異常蛋白の解明が容易になり、その応用が期待される。 髙橋蓮，神宮大輝，長澤紀佳，林由里子，諏訪部章，藤田清貴
3. 測定試薬と反応するmonoclonal IgM の構造解析および反応メカニズム	―	2022年11月18日	第69回日本臨床検査医学会学術集会 栃木県総合文化センター	クリオグロブリンの性状を示すmonoclonal IgMがTIA法において測定試薬と反応する症例に関して、TIA法の第一試薬に含まれる成分の反応していることが明らかにした。さらにWestern blotting分析及び質量分析計による解析により、正常分子のμ鎖以外に低分子化されたμ鎖バンドが複数検出されたことから、この異常低分子μ鎖がクリオグロブリンの性状に深く関与している可能性が示唆された。 林由里子，神宮大輝，長澤紀佳，小林悠希，佐伯仁志，河合健，木村俊久，藤田清貴

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. Sia test 陽性を示す monoclonal 蛋白のクラス別出現頻度およびその特性に関する研究	―	2022年11月18日	第69回日本臨床検査医学会学術集会 栃木県総合文化センター	M蛋白血症におけるSia test陽性のクラス別出現頻度とその特性について明らかにすることを目的とした。結果として、Sia test陽性を示すM蛋白のクラスはIgM型が非常に多く、そのL鎖タイプはκ型に偏っていることが確認された。さらに質量分析計による解析ではSia test陽性例ではμ鎖、γ鎖、κ鎖以外に補体（C3）が検出された。また、Sia test陽性および陰性のmonoclonal IgM、monoclonal IgGの分子構造解析では、いずれにおいても両者の間に分子量の違いは確認されなかった。以上のことからSia test陽性の白濁現象は分子構造異常によるものではなく、補体が関与している可能性が高いと考えられる。 神宮大輝，長澤紀佳，林由里子，木村鮎子，松本守生，澤村守夫，長田誠，藤田清貴

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　放射線学科　　氏名　渡邉　浩

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
19 日本放射線技術史第三巻	共著	2022年4月	日本放射線技術学会	診療放射線技師が会員となっている最大の学会である日本放射線技術学会が定期的に学術の記録を編纂している。今回の編纂にあたって、核医学の放射線安全管理（110～111ページ）を担当執筆した。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
33 ERCP検査におけるX線診療室内の散乱線量の個人線量当量としての測定（査読付）	共著	2022年4月	日本放射線技術学会雑誌　2022;78(4):364-371	ERCP検査に従事する医師等の職業被ばく線量を測定した。渡邉が開発したポール法を基に、水晶体等価線量限度を順守するための年間検査件数の推定法を開発した論文。研究責任者。（渡邉　浩、近野正哉、藤田佑香、栗原　翔、外處花奈、萩原未稀、山本和幸、坂本　肇、竹中　完、細野　眞）
34　医療機関における放射線業務従事者に対する放射線防護研修に関する調査報告（査読付）	共著	2022年4月	日本診療放射線技師会雑誌　2022；69（834）：49-56.	職業被ばくに関する改正法令の2022年4月1日施行を契機に、医療従事者の職業被ばく低減が求められている。本論文では全国の医療機関を対象に放射線業務従事者の放射線管理状況を調査した結果のうち、放射線防護研修に関する結果をまとめた論文である。職業被ばく低減には教育が基本であり、その拡充を求めた。研究責任者。（渡邉　浩、山本和幸、坂本　肇、今尾　仁、瀬下幸彦、加藤英幸、竹中　完、赤羽恵一、神田玲子、鳥巣健二、三上容司、細野　眞）
35　医療機関における放射線業務従事者に対する基本的な放射線管理に関する調査報告（査読付）	共著	2022年7月	日本診療放射線技師会雑誌　2022；69（837）：28-35.	職業被ばくに関する改正法令の2022年4月1日施行を契機に、医療従事者の職業被ばく低減が求められている。本論文では全国の医療機関を対象に放射線業務従事者の放射線管理状況を調査した結果のうち、基本的な放射線管理状況に関する結果をまとめた論文である。医療従事者の職種によって放射線業務従事者としての登録率が異なっていることを明らかにした。研究責任者。（渡邉　浩、山本和幸、坂本　肇、今尾　仁、瀬下幸彦、加藤英幸、竹中　完、赤羽恵一、神田玲子、鳥巣健二、三上容司、細野　眞）

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
36　神奈川県における血管撮影・IVR領域の診断参考レベル（DRL）に関する実態調査報告	共著	2022年9月	かながわ放射線だより 2022；75（3）：15-25.	神奈川県内の血管撮影・IVRを実施している医療機関を対象に診断参考レベルに関する実態調査を行った結果に基づく報告である。線量の測定が行われていない医療機関が一定程度あることを明らかにした。研究責任者。（山本和幸、岩崎真之、渡邉浩、田島隆人、坂野智一、前原善昭、新田正浩）
37 X線CTの遮蔽計算法であるJapanese-DLP法を改良するための検証研究	共著	2022年9月	保健物理，57（2），87 ～ 92（2022）	CTは現在の医療に必要不可欠な医療技術であるが、放射線を発生する装置であるため、病院に設置する場合は事前に安全評価を行うことが求められている。特に、CTは一般撮影（通称レントゲン）よりも100倍線量が高いとされ、CT室内の散乱線量も高いことが知られている。日本のCTの遮蔽計算法は、渡邉らが提唱したJapanese-DLP法がスタンダードになっている。本論文は、Japanese-DLP法の改良を目的に検証した研究で、四肢の散乱係数設定と体幹部の散乱係数の合理的な見直しが可能であることを示した。研究責任者。（渡邉 浩，上原 拓馬，白崎 由徳，林 卓郎，岩井 譜憲）
38　IVRに関わる医師の水晶体被ばく線量および被ばく管理に関する調査研究（査読付）	共著	2022年10月	日本診療放射線技師会雑誌　2022；69（840）：32-41.	労働安全衛生法の電離放射線障害防止規則の一部が改正され，2021年4月1日から施行・適用され，眼の水晶体被ばくの等価線量限度の引き下げられた．われわれは，各医療機関におけるIVRに関わる医師の被ばく実態調査を行った．その結果，線量限度の引き下げにより線量限度を超えてしまう医師が少なからず存在し，さらに医師の被ばく線量が正しく測定されていない実態が明らかにした．副研究責任者。（荒井 一正、渡邉 浩、目黒靖浩、北山 早苗、矢部 智、佐々木 健、長谷川健、福住 徹、川﨑 英生、佐藤 洋一）
39　医療機関における放射線業務従事者への個人線量計および放射線防護機材の配布ならびに着用状況等に関する調査報告（査読付）	共著	2022年11月	日本診療放射線技師会雑誌　2022；69（841）：17-27.	2020年4月，わが国における職業被ばくの水晶体の等価線量限度が大幅に引き下げられた．法改正の過程で，多くの放射線業務従事者が個人線量計を着用していないことが明らかになった．全国の医療機関に対してアンケート調査を実施した．医療機関の71％で個人線量計を着用しない放射線業務従事者に対する指導ができていないこと，および医療機関の89％で水晶体専用個人線量計の配布基準がないことを明らかにした．研究責任者。（渡邉　浩、山本和幸、坂本　肇、今尾　仁、瀬下幸彦、加藤英幸、竹中　完、赤羽恵一、神田玲子、鳥巣健二、三上容司、細野　眞）

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
131　Achievements of the recent study supported by industrial disease clinical reserch grants（労災疾病事業の成果）	―	2022年4月	第78回日本放射線技術学会総会学術大会（横浜）	JSRT Radiation safety management / JSMP Radiological protection joint forum（JSRT関係法令委員会・JSMP防護委員会合同フォーラム）：On site actual conditions and countermeasures for non-uniform exposure management（不均等被ばく管理への現場での実態と対策）において講演した。医療従事者の職業被ばく低減のために活動した労災疾病事業研究の成果を発表した。（講演　渡邉　浩）
132　神奈川県内における一般撮影領域の2021年度線量調査報告	―	2022年6月	2022年度関東甲信越診療放射線技師学術大会（高崎）	神奈川県内の一般撮影を行っている医療機関を対象に線量等の調査を行った結果に基づく発表である。今回が2回目であるが、前回の2015年度の調査結果よりも線量が低減されていることを報告した。（新田正浩、渡邉浩、関将志、小川泰良、大村樹、前原善昭、森寿一）
133　空間線量測定における簡便かつ汎用測定法：ポール法の提案	―	2022年6月	第51回日本IVR学会総会（神戸）	IVR術者の職業被ばく低減が求められている。簡便で汎用的なIVR室内の空間線量測定法であるポール法の有用性を発表した。本発表では作業が簡便で汎用性が高いことを中心に発表した。（山本和幸、岩崎真之、渡邉　浩、坂本　肇、細野　眞、田島隆人、石川栄二、田邉頌章）
134　空間線量分布測定における簡便かつ汎用測定法(ポール法)の有用性	―	2022年7月	第30回日本心血管インターベンション治療学会（横浜）	IVR術者の職業被ばく低減が求められている。簡便で汎用的なIVR室内の空間線量測定法であるポール法の有用性を発表した。本発表では測定時間が短いことを中心に発表した。（岩崎真之，　山本和幸，渡邉浩，坂本肇，細野眞）
135　神奈川県放射線技師会における医療被ばく線量及び最適化に対する取り組み	―	2022年10月	第41回神奈川県病院学会	神奈川県放射線技師会が2015年から2021年まで実施している医療被ばく線量及び最適化に対する取り組みを発表した。医療被ばくは世界的な課題になっており、その改善に向けて積極的に活動していることと成果は示した。（岩崎真之、坂野智一、関将志、渡邉　浩、前原善昭、稲垣直之、大村樹、小川泰良、佐川知宏、白川光平、高橋康太、新田正浩、山本和幸、田島隆人）
136　放射性同位元素等の規制に関する法令 および放射線予防規程	―	2022年11月	2022年度放射線（診療）業務従事者の教育訓練（講習会）	医療放射線は放射線防護関係法令を順守して実施する必要がある。主な放射線防護関係法令の一つが放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律であり、この法令では放射性同位元素等を使用する放射線（診療）業務従事者の教育訓練を義務付けている。本講演では放射線業務従事者の職業被ばくの内容を中心に法令について示した。（講演　渡邉　浩）

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　放射線学科　　氏名　倉石政彦

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
学生を対象とした診療放射線技師教育臨床実習に関する調査	共著	2022年6月	実務教育学研究　第1号	放射線学科学生を対象に行った臨床実習に関するアンケート調査をもとに、診療放射線技師養成教育における臨床実習の意義と効果について検討した。 P.45-56 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共著者：徳重佑美子、倉石政彦

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
なし				

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　放射線学科　　氏名　　酒井　健一

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　放射線学科　　氏名　西澤　徹

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
放射線取扱主任者試験対策シリーズ（2023）放射性同位元素等規制法	単 著	2023年	デザインエッグ社	授業用として作成したテキスト＆問題集を書籍化した。過去問題を詳細に解説し、主任者試験受験者が効率的に学習できるように編集した。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　放射線学科　　氏名　加藤英樹

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Convolutional LSTMを用いた乳房画像の視線動向の予測（査読付）	共著	2022年3月	医用画像情報学会雑誌, Vol.39 No.1, pp.7-13	奥村英一郎, 加藤英樹, 本元強, 鈴木伸忠, 奥村江理香, 東川拓治, 北村茂三, 村中博幸, 安藤二郎, 石田隆行. マンモグラフィ画像の読影時に密な乳房組織に隠された小さな石灰化や病変を正しく検出することは非常に困難である. CNN:Convolutional Neural Networkによる画像観察者の視線追跡情報を検出した先行研究を参考に, 深層学習のための3ch convLSTM、自動符号化convLSTMおよびU-net convLSTMで検討し, マンモグラフィにおける視線追跡動作を高精度に予測することを目指した.3つの深層学習モデルの中では, U-net　convLSTMが高い精度で視線動向を予測した. 画像評価者の調達及び説明同意取得、観察環境のハード・ソフト面での策定と担当したが、共同研究のため担当部抽出はできない.
医療放射線の適正管理に関する検討会議事録に関するテキストマイニング分析.（査読付）	共著	2022年7月	日本診療放射線技師会誌, Vol.69, No. 837, pp709-715	齋藤裕樹, 徳重佑美子, 丸山星, 岩井譜憲, 加藤英樹, 星野修平. テキストマイニングはテキストデータを単語やフレーズに分割し,その出現頻度,共起関係, 相関関係などを分析する手法として様々な領域で用いられる. 適正管理に関する検討会の頻出語を示し, 中心的な課題抽出と全体構造を示した. 患者線量管理および安全管理体制の確立は国際的動向を踏まえて, 正当化と適正化を適正に管理することが明らかとなった. 共同研究のため担当部抽出はできない.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　医療技術学部 放射線学科　氏名　岩井　譜憲

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
23.医療放射線の適正管理に関する検討会議事録に関するテキストマイニング分析（査読付）	共著	2022年7月	日本診療放射線技師会誌	概要: 2020年4月に医療法施行規則の一部を改正する省令が施行された．厚生労働省は「医療放射線の適正管理に関する検討会」を発足させ，その議事録がテキストデータとして厚生労働省のホームページ上にある． 検討会の議事録をKHcoder3を用いてテキストマイニングを行い内容分析を行うことで，患者線量の記録および安全管理体制の確立に至った経緯を明らかにする． 医療放射線の適正管理に関する検討会議事録についてテキストマイニング分析を行った結果，患者線量管理および安全管理体制の確立は国際的動向を踏まえ，放射線診療における正当化と最適化を適正に管理するために行われていることが明らかになった． 共著者:齋藤祐樹、徳重佑美子、丸山星、岩井譜憲、加藤英樹、星野修平 本人担当部分:共同研究につき抽出不能

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
24.Webアプリケーションを使用したオンライン学習支援システムの構築（査読付）		2022年7月	第26回日本医療情報学会春季学術大会抄録集	概要:資格試験では過去に出題された問題の類似問題が出題されることが多く、試験対策として過去問題を繰り返しと行う事が有効である。 Googleが提供するGoogleForms はWeb アプリケーションであり無料で使用することができ、選択式のテスト問題を作成することが可能である。試験対策の学習達成度確認を目的として、GoogleForms で過去問題を使用したオンライン試験問題の作成支援システムを構築したので報告する。 過去問題を科目、領域ごとにコーディングを行い、指定した問題数を項目ごとにランダムに抽出する。抽出したデータをGoogleAppsScript を用いて自動でGooglForms の作成を行えるようにした。リンクにアクセスすることで、任意の時間、場所で問題の実施が可能であり、自らのタイミングで問題を繰り返し行う事が出来るようになった。問題データベースを変更することで様々な試験内容に対応することが可能である。 共著者:岩井譜憲、徳重佑美子、島崎綾子、鳴海克希、湯浅仁博、星野修平
25.X腺CTの遮蔽計算法であるJapanese-DLP法を改良するための検証研究（査読付）	共著	2022年9月	保健物理	概要:　わが国では，医療法施行規則ならびに関係通知に X線装置の遮蔽計算法が示されているが、X 線CT装置についてはこの中に具体的に示されていない。 2017 年に WATANABE らが NCRPDLP 法の課題を改良した Japanese-DLP 法を開発した。しかし，頭部の散乱係数は体幹部の散乱係数に比べて過小評価する可能性を指摘しており，Japanese-DLP 法にもまだ課題がある可能性はある。 本研究の目的は，頭部及び体幹部の散乱係数の検証と四肢の散乱係数の検討を行うことで，Japanese-DLP 法を改良するための検証を行うことである。 CT の遮蔽計算法である，Japanese-DLP 法を改良するための検証研究を行った。 Japanese-DLP 法を改良することが，CT の合理的な事前安全評価に繋がると考える。 共著者:渡邉浩、植原拓馬、白崎由徳、林卓郎、岩井譜憲 本人担当部分:共同研究につき抽出不能

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　放射線学科　　氏名　谷口　杏奈

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
新たに開発された固体検出器の精度評価	－	令和4年10月	第50回日本放射線技術学会秋季学術大会	医療法施行規則が改正され、これまで以上に診断用X線装置の品質管理が重要となった。今回、新たに開発された非接続形測定器の精度を検証した。管電圧特性による線量の誤差は±3%以下で、管電流が小さいほど誤差が大きく、100mAを超えると5%以下であった。 共同研究者：齋藤祐樹　根岸徹　加藤英樹　谷口杏奈　島崎綾子　二階堂満

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　放射線学科　　氏名　山﨑　真

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
コロナとアカデミア	共著	2022/5/1	雷音学術出版	分担執筆：相川真穂・青島啓太・阿部純・石田健一・石元みさと・板倉孝信・植松雄太・大木由以・大場健司・岡野裕行・岡本華枝・小川由香里・荻野哉・小熊良一・小椋賢治・越智徹・笠野英弘・加戸隆司・門田裕次・角山照彦・亀山光明・苅山靖・川口かしみ・北田雄一・杵渕恵太・熊谷摩耶・畔柳信吾・児島功和・小嶺智枝・阪上彩子・坂口可奈・崎濱紗奈・佐久本邦華・佐藤勢紀子・嶋田龍司・朱炫姝・庄司貴由・白岩洵・白鳥亜矢子・白戸亮吉・申貞恩・杉下辰雄・杉本卓・鈴木研太・鈴木優作・春原史寛・高橋博美・滝沢隆・竹ヶ原康弘・田中浩喜・単艾婷・塚越博史・辻本桜子・デイヴィス恵美・寺崎里水・照屋建太・中沢知史・中山新也・滑川亘希・西田彰一・西山雄二・二宮愛理・野澤聡・野中美賀子・長谷川元洋・早川公・速水紗弥・樋田有一郎・樋田大二郎・平中尚子・廣瀬航也・古田雄一・Shaun HOGGARD・堀純也・前田菜月・増地ひとみ・増渕佑亮・松中完二・松本知子・三浦麻美・宮平隆央・虫明美喜・本山仁美・森祐貴・森谷菜月・森下純弘・矢吹康夫・山﨑真・山本博・山本美紀・吉嶺加奈子・Richard LEE 担当：pp 37,pp 64 ・日本医療科学大学保健医療学部「基礎科学実験」(1年生)授業実践報告 ・群馬パース大学保健科学部放射線学科「医療基礎物理学」(1年生)授業実践報告 上記2タイトルについて，pp 37は共著，pp 64は単著
放射線物理学[第2版第2刷]	共著	2023/3/10	通商産業研究社	柴田徳思、中谷儀一郎、山﨑真、pp11－152を担当。モダリティや数学の知識だけではない物理学傾向が強い部分を担当した。第1刷で修正できなかった部分を加筆修正を行い、より分かりやすく変更した。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　放射線学科　　氏名　今尾　仁

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
医用放射線辞典第６版	共	2023年2月25日	共立出版	超音波画像診断装置，超音波画像検査について，改定，新規ワードの執筆した． 担当：複数個所のため抜粋不可 共著者：青柳泰司，秋庭弘道，穴井元昭，，今尾仁，，ほか

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1　医療機関における放射線業務従事者に対する放射線防護研修に関する調査報告（査読付）	共著	2022年4月1日	日本診療放射線技師会誌 J.J.A.R.T 2022.4,vol.69/No.834,pp.49-56	2020年4月1日にICRPソウル声明を基軸とした電離放射線障害防止規則が公布されたことをうけ，全国の医療機関における医療従事者の放射線防護の状況を調査した．各施設において基本的な管理はされているが，事務部，放射線部のどちらかだけでの管理に限界があるなど，医療機関が抱える問題と関連した課題があることが明らかとなった．（統計解析を担当した） 共著者：渡邉浩，細野眞，坂本肇，山本和幸，今尾仁
2　医療機関における放射線業務従事者に対する基本的な放射線管理に関する調査報告（査読付）	共著	2022年7月1日	日本診療放射線技師会誌 J.J.A.R.T 2022.7,vol.69/No.837,pp.28-35	2020年4月1日にICRPソウル声明を基軸とした電離放射線障害防止規則が公布されたことをうけ，全国の医療機関における医療従事者の放射線管理の状況を調査した．各施設において基本的な管理はされているが，事務部，放射線部のどちらかだけでの管理に限界があるなど，医療機関が抱える問題と関連した課題があることが明らかとなった．（統計解析を担当した） 共著者：渡邉浩，細野眞，坂本肇，山本和幸，今尾仁
3　医療機関における放射線業務従事者の個人線量計ならびに防護機材の配備・着用状況に関する調査報告（査読付）	共著	2022年11月1日	日本診療放射線技師会誌 J.J.A.R.T 2022.11,vol.69/No.841,pp.17-27	2020年4月1日にICRPソウル声明を基軸とした電離放射線障害防止規則が公布されたことをうけ，全国の医療機関における放射線業務従事者の個人線量計および防護機材の配備・着用の状況を調査した．各施設において基本的な管理はされているが，事務部，放射線部のどちらかだけでの管理に限界があるなど，医療機関が抱える問題と関連した課題があることが明らかとなった．（統計解析を担当した） 共著者：渡邉浩，細野眞，坂本肇，山本和幸，今尾仁

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
4 放射性コンシューマプロダクトの装着時における線量評価（査読付）	共著	2022年12月	日本医療科学大学研究紀要（第15号）pp.31-38	個人で使用可能な放射性物質を含む製品である放射性コンシューマプロダクト（RCP)において，天然鉱石ネックレスに着目し，放射性核種の同定，含有放射能，被ばく線量を評価した．Th系列，U系列の天然放射性核種が含まれていることが確認され，１年間装着した際の全身被爆は0.8μSvなど，ICRP勧告による講習費学の実行線量限度と超えないことを確認した．（構成，考察などを担当した） 共著者：増田智，黒田就斗，堀内勇輝，，，今尾仁，ほか
5 Low-dose whole-spine imaging using slot-scan digital radiography: a phantom study (スロットスキャンデジタルX 線撮影を使用した低線量脊椎全体イメージング: ファントム研究)（査読付）	共著	2023年1月30日	BMC Med Imaging 23, 17 (2023).https://doi.org/10.1186/s12880-023-00971-1	スロットスキャンデジタルラジオグラフィ（SSDR）には取り外し可能な散乱線グリッドと可変銅フィルタが装着されており，組合せによって被爆線量に影響があることが知られている．本研究では全脊椎撮影に着目し，0.3mmBHフィルタの使用により診断能を損なう事なく79%の線量低減が可能であることを明らかにした．（データ収集用GUIの開発，統計解析を担当した） 共著者：Shigeji Ichikawa, Hiroe Muto, Masashi Imao, Takashi Nonaka, Kouji Sakekawa, Yasutaka Sato

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
35　東京都診療放射線技師会会員における診療放射線技師法改正に関する意識調査	-	2022年5月1日	東京放射線 2022.5,vol.69/No.805,pp.11-20	[良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制の確保を推進するための医療法等一部を改正する法律案」が2021年5月21日に成立をうけ，診療放射線技師法も改正され2021年10月1日に施行された．それに伴い実施される告示研修の受講に対する東京都診療放射線技師会の会員の意識調査を実施した．追加された業務を実施しない施設については受講する意志が有意に低いことが明確になった．（立案，研究計画，調査，統計解析，考察を担当した） 共同研究者：今尾仁，飯島文洋，緒方達哉，江田哲男，飯島文洋，磯崎拓巳，城尾俊

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　放射線学科　　氏名　島崎　綾子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Web アプリケーションを使用したオンライン学習支援システムの構築	—	2022年6月	第26回日本医療情報学会春季学術大会、瀬戸内	資格試験では過去問題を繰り返す事が有効である。 Google が提供する GoogleForms は Web アプリケーションであり無料で使用することができ、選択式のテスト問題を作成することが可能である。過去問題をランダムに抽出し、抽出したデータを GoogleAppsScriptを用いて自動で Google Forms の作成を行えるようにした。リンクにアクセスすることで、任意の時間、場所で問題の実施が可能であり、自らのタイミングで問題をを繰り返し行う事がが出来るようになった。 本人担当部分：問題データベースの構築 岩井譜憲、徳重佑美子、島崎綾子、鳴海克希、湯浅仁博、星野修平
新たに開発された固体検出器の精度評価	—	2022年10月	第50回日本放射線技術学会秋季学術大会、東京	診断用X線装置の品質管理はX線管装置に直接、測定器を接続して管電圧や管電流等を管理してきた。この方法は経験が必要で、簡単に行えるようなものではない。近年、取り扱いが容易な固体検出器の普及により、1回の照射で線量からHVLまで多数の測定項目が得られ管理が簡便になりつつある。固体検出器の精度を直接接続形測定器および電離箱を用いて半価層、線量、管電圧、管電流の比較測定を行うことを目的とした。HVLは70 kV以上で± 5 % 以内、線量、管電圧は全ての線質で± 5 % 以内、管電流は100 mA以上で＋5 % 以内の精度という結果になった。 本人担当部分：共同研究のため担当部分抽出不可能 齋藤祐樹、根岸徹、加藤英樹、小倉泉、二階堂満、谷口杏奈、島崎綾子

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　放射線学科　　氏名　湯浅　仁博

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Webアプリケーションを使用したオンライン学修支援システムの構築	共著	2022年6月30日	第26回日本医療情報学会春季学術大会	資格取得を目指す医療系大学では、資格試験対策として、資格試験の過去問題を解くことで学修を行っている。学校教育の場で、Webアプリを利用し、ランダムで過去問を解くことも可能である。GoogleのGooleFormsを利用すれば、オンラインで試験問題を解答することができ、教員が学生の学修状況を把握できる。このシステムについて、報告する。岩井譜憲、徳重佑美子、島崎克希、湯浅仁博、星野修平
群馬パース大学における「放射線腫瘍学」講義の初期経験	共著	2023年2月18日	第60回群馬放射線腫瘍研究会	群馬パース大学医療技術学部放射線学科では、放射線治療の講義では放射線治療技術Ⅰ・放射線治療技術学Ⅱ・放射線治療機器工学・放射線腫瘍学・放射線技術学演習・放射線治療技術学実習・放射線治療技術学臨床実習からなる。放射線腫瘍学は3年次に15コマ実施されている。2023年度からは、さらに粒子線治療技術学が開設される。黒崎弘正、石橋章彦、湯浅仁博、岩井譜憲

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　臨床工学科　　氏名　大濵和也

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
我が国における在宅血液透析の現状	—	2022年4月	特定非営利活動法人日本医工学治療学会機関紙VOL34,P79	日本国内においての在宅血液透析の施行数は760名と透析医学会の統計調査で報告されている。この数は以前からさほど伸びてはいない。普及などの問題点について詳細を述べた。
工学技術でHHDのハードルを下げる	—	2022年6月	一般社団法人日本透析医学会Vol,55 P313	工学的技術を有したモニタリング技術は進化している。それらは在宅療法においても応用可能であり、これら技術を取り入れることによって安心、安全の確保につながることを述べた。
在宅血液透析における臨床工学技士の関わり	—	2022年6月	一般社団法人日本医科器械学会抄録集2022.6	HHDはチームの中の一員として特に臨床工学技士には患者の自宅におけるインフラ状況や透析装置の設置環境、透析液の管理を行うことが求められている。その管理等について報告した。

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　臨床工学科　　氏名　木村　博一

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1. RSV-Aの分子疫学・分子進化に関する最新知見. （査読付）	共著	2022年4月	病原微生物検出情報 (ISAR) Vol.43,No.4 pp.84-85	世界中で検出されたRSV-A・F遺伝子ならびにF蛋白の詳細な分子疫学・分子進化に関する知見を我々のデータを基盤として要約した。（主要著者として、研究企画・論文執筆を行った） 共著者：齋藤麻理子，河島尚志，津川毅，梁明秀，竹田誠，佐田充，木村博一.
2. RSウイルス感染症の流行期間開始時期　検出基準の更新.（査読付）	共著	2022年5月	Progress in Medicine 第5号 別刷 Vol,42,No.5 pp.515-521	独自の数理統計解析を用いた既報告のデータ解析方法に用いるアルゴリズムに変更を加え、都道府県別のRSV感染症の流行開始時期を解析した。 （主要著者として論文執筆を行った） 共著者：西村千織, 木村博一, 草川功, 朴澤博之, 橋本孝史, 山本ルイス, 楠田聡.
3. Whole genome sequencing and evolutionary analysis of G8P [8] rotaviruses emerging in Japan. (日本で発生したG8P [8]ロタウイルスの全ゲノム配列決定と進化的解析)（査読付）	共著	2022年6月	Virusdisease Vol.33,No.2 pp.215-218	2017年と2019年に国内で発生したヒトロタウイルス遺伝子型G8P[8]・7株の塩基配列を基盤にメタゲノム解析を行い、新興ロタウイルス G8P[8]の進化を明らかにした。（主要著者として論文執筆を行った） 共著者：Phan T, Kobayashi M, Nagasawa K, Hatazawa R, Thi Kim Pham N, Miyashita H, Komoto S, Tajima T, Baba T, Okitsu S, Khamrin P, Maneekarn N, Kimura H, Kobayashi T, Hayakawa S, Ushijima H.
4. Development of Parallel Reaction Monitoring Mass Spectrometry Assay for the Detection of Human Norovirus Major Capsid Protein. (ヒトノロウイルス主要カプシド蛋白検出のためのParallel Reaction Monitoring Mass Spectrometryの開発に関する研究)（査読付）	共著	2022年6月	Viruses Vol.14,No.7 pp.1416	HuNoVs の VP1 主要カプシド蛋白を直接検出するための、特異的かつ効率的なプロテオミクス解析法を開発した。（主要著者として論文執筆を行った） 共著者：Kimura Y, Shin J, Nakai Y, Takahashi M, Ino Y, Akiyama T, Goto K, Nagata N, Yamaoka Y, Miyakawa K, Kimura H, Ryo A.
5.Acquisition of neutralizing antibodies against SARS-CoV-2 from mRNA-1273 in Japanese young people. （日本人若年者におけるSARS-CoV-2に対するmRNA-1273からの中和抗体獲得状況）（査読付）	共著	2022年8月	The Journal of Japan Mibyou Association Vol.28,No3 pp.11-12	日本人大学生におけるmRNA-1273由来のSARS-CoV-2に対する中和抗体（NT-Ab）獲得に関する血清疫学的研究を行った。（責任著者として研究企画・論文執筆を行った） 共著者：Fujimoto-Satoh Y, Nagasawa N, Sada M, Shirai T, Miyakawa K, Ryo A, Kimura H.

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
6.新型コロナウイルスワクチンが免疫細胞に及ぼす影響（査読付）	共著	2022年8月	日本未病学会雑誌 Vol.28 ,No2 pp.53-58	ワクチン接種前, 1回目と2回目ワクチン接種後の計3回採血した74名を対象に, 末梢血中のCD4/CD8比, キラーT細胞並びにNK細胞の動態を検証した。（主要著者として論文執筆を行った） 共著者：藤本友香, 木村博一, 小河原はつ江.
7. Molecular Evolution of the Pseudomonas aeruginosa DNA Gyrase gyrA Gene.（緑膿菌DNAジャイレースgyrA遺伝子の分子進化）（査読付）	共著	2022年8月	Microorganisms Vol.10,No.8 pp.1660	GyrA遺伝子の分子進化を詳細に解析し、GyrA遺伝子とキノロン系抗生物質耐性との関連について、分子進化学的な解析を行った。 （責任著者として研究企画，論文執筆を行った） 共著者：Sada M, Kimura H, Nagasawa N, Akagawa M, Okayama K, Shirai T, Sunagawa S, Kimura R, Saraya T, Ishii H, Kurai D, Tsugawa T, Nishina A, Tomita H, Okodo M, Hirai S, Ryo A, Ishioka T, Murakami K.
8. 熱風式食器消毒装置による大腸菌の殺菌効果と試験法の確立に関する研究.（査読付）	共著	2022年8月	Paz-bulletin No.27 pp11-19	熱風式食器消毒装置を用い、種々の条件下における大腸菌の殺菌効果と試験法の確立に関する研究を行った。 （主要著者として研究企画・論文執筆を行った） 共著者：大友秀幸，前川孝，上岡悟，横山慎一郎，佐田充，木村博一.
9. Development of a monoclonal antibody targeting HTLV-1 envelope gp46 glycoprotein and its application to near-infrared photoimmuno-antimicrobial strategy. （HTLV-1 エンベロープ gp46 糖蛋白を標的としたモノクローナル抗体の開発と近赤外光免疫抗菌戦略への応用）（査読付）	共著	2022年9月	Viruses Vol.14,No.10 pp.2153	HTLV-1エンベロープgp46 糖蛋白を標的としたモノクローナル抗体を探索するとともに近赤外光免疫法による抗菌に関する研究を行った。（主要著者として研究企画・論文執筆を行った） 共著者：Hatayama Y, Yamaoka Y, Morita T, Jeremiah S S, Miyakawa K, Nishi M, Kimura Y, Mitsunaga M, Iwase T, Kimura H, Yamamoto N, Takaori-Kondo A, Hasegawa H, Ryo A.
10.Genotypes and transmission routes of noroviruses causing sporadic acute gastroenteritis among adults and children, Japan, 2015-2019. （本邦の2015-2019年における成人および小児の散発性急性胃腸炎を引き起こすノロウイルスの遺伝子型と感染経路）（査読付）	共著	2022年10月	Infect Genet Evol Vol.104 pp.105348	急性胃腸炎を引き起こすノロウイルスの成人および小児における遺伝子型の違いや、感染経路の調査、研究を行った。（主要著者として研究企画，論文執筆を行った） 共著者：Honjo S, Kuronuma K, Fujiya Y, Nakae M, Ukae S, Nihira H, Yamamoto M, Akane Y, Kondo K, Takahashi S, Kimura H, Tsutsumi H, Kawasaki Y, Tsugawa T.
11.Detailed molecular interactions between respiratory syncytial virus fusion protein and the TLR4/MD-2 complex in silico.（In silicoによる呼吸器合胞体ウイルス膜融合タンパク質とTLR4/MD-2複合体の詳細な分子間相互作用に関する研究）（査読付）	共著	2022年10月	Viruses Vol.14,No.11 pp.2382	呼吸器合胞体ウイルス（RSV）融合タンパク質（Fタンパク質）と細胞内受容体Toll-like receptor 4（TLR4）および骨髄系分化因子2（MD-2）タンパク質複合体の詳細な分子間相互作用を明らかにするために、様々なバイオインフォマティクス技術を用いたインシリコ解析を行った。（責任著者として研究企画，論文執筆を行った） 共著者：Akagawa M, Shirai T, Sada M, Nagasawa N, Kondo M, Takeda M, Nagasawa K, Kimura R, Okayama K, Hayashi Y, Sugai T, Tsugawa T, Ishii H, Kawashima H, Katayama K, Ryo A, Kimura H.
12. Detection of SARS-CoV-2 Genome for over 100 Days after COVID-19 Onset. (COVID-19発症後100日以上経過したSARS-CoV-2ゲノムの検出)（査読付）	共著	2022年11月	Jpn J Infect Dis Vol.75,Issue 6 pp. 620-622	COVID-19発症後、100日以上経過した患者由来のSARS-CoV-2のゲノム解析に関する研究を行った。 （主要著者として論文執筆を行った） 共著者：Goto K, Komatsu K, Sekizuka T, Ebisawa H, Ootake M, Honda M, Nagata N, Yoshida D, Yanaoka T, Kimura H, Kuroda M.

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
13.Rhinovirus Infection and Virus-Induced Asthma. (ライノウイルス感染と感染喘息)（査読付）	共著	2022年11月	Viruses Vol.14,No12 pp.2616	ライノウイルス関連感染喘息について、最新知見を基に概説した。（責任著者として研究企画，論文執筆を行った） 共著者：Hayashi Y, Sada M, Shirai T, Okayama K, Kimura R, Kondo M, Okodo M, Tsugawa T, Ryo A, Kimura H.
14.Generation and utilization of a monoclonal antibody against hepatitis B virus core protein for a comprehensive interactome analysis.（B型肝炎ウイルスコアタンパク質に対するモノクローナル抗体の作製と活用による網羅的インタラクトーム解析）（査読付）	共著	2022年11月	Microorganisms Vol.10,No12 pp. 2381	B型肝炎ウイルス と相互作用する宿主タンパク質を同定するために、B型肝炎ウイルスに対するマウスモノクローナル抗体 (mAb) を生成し、それを抗体ベースの in situ ビオチン化解析を行った。 （主要著者として論文執筆を行った） 共著者：Nakai Y, Miyakawa K, Yamaoka Y, Hatayama Y, Nishi M, Suzuki H, Kimura H, Takahashi H, Kimura Y, Ryo A.
15.当院における新型コロナウイルス感染症の疫学および分子疫学.（査読付）	共著	2022年12月	群馬医学 No.116 pp.123-128	SARS-CoV-2のPCR 検査でN遺伝子が検出された203例に対し、患者情報解析を主体とする疫学ならびに分子疫学解析を行った。（責任著者として研究企画，論文執筆を行った） 共著者：原田和彦，小林美穂，錦戸崇，林由里子，岡山香里、三浦佑介，佐田充，藤田清貴，木村博一，猿木信裕，伊藤一人，黒沢巧.
16.Molecular Evolutionary Analyses of the Pseudomonas-Derived Cephalosporinase Gene. （シュードモナス由来セファロスポリナーゼ遺伝子の分子進化学的解析）（査読付）	共著	2023年3月	Microorganisms. Vol.11,No3 pp.635.	特定のクローン変異体（クラスター）から選択されたblaPDC遺伝子型について、PDCとペピラシリンの分子間ドッキングシミュレーションを行い、主要な抗生物質であるペピラシリンとの相互作用を明らかにした。（責任著者として研究企画，論文執筆を行った） 共著者：Shirai T, Akagawa M, Makino M, Ishii M, Arai A, Nagasawa N, Sada M, Kimura R, Okayama K, Ishioka T, Ishii H, Hirai S, Ryo A, Tomita H, Kimura H.
17.Distribution of Human Sapovirus Strain Genotypes over the last four Decades in Japan: a Global Perspective. （日本における過去40年間のヒトサポウイルス株遺伝子型の分布：グローバルな視点からの考察）（査読付）	共著	2023年3月	Jpn J Infect Dis. JJID.2022.704	過去40年間に全国13都道府県で採取された138株のサポウイルスの詳細な遺伝子型別解析を行った。（主要著者として論文執筆を行った） 共著者：Doan YH, Yamashita Y, Shinomiya H, Motoya T, Sakon N, Suzuki R, Shimizu H, Shigemoto N, Harada S, Yahiro S, Tomioka K, Sakagami A, Ueki Y, Komagome R, Saka K, Okamoto-Nakagawa R, Shirabe K, Mizukoshi F, Arita Y, Haga K, Katayama K, Kimura H, Muramatsu M, Oka T.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　臨床工学科　　氏名　湯本　真人

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
52. Aphasia and a Dual-Stream Language Model in a 4-Year-Old Female with Landau-Kleffner Syndrome（ランダウ-クレフナー症候群の４歳女児における失語と言語処理の二重経路モデル）（査読付）	共著	令和4年8月	Neuropediatrics	非優位側の右上側頭回に主なてんかん原性焦点のあるランドウ-クレフナー症候群の4歳女児で，聴力回復や言語理解の回復が遅れる中，運動性失語の早期回復が見られた．本症例の脳画像所見と運動失語と感覚失語の回復のずれは，非優位半球も言語理解に重要な役割を果たしているとする言語処理の二重経路モデルに矛盾しないと考えられた．成人の失語と異なり，小児期においては，右半球の障害は言語や身振りの理解の遅れの原因となると報告されており，言語獲得の時期における単語の意味理解の過程は，右半球における視覚，聴覚，文脈情報の統合によりなされると考えられる． 共著者：Kawai M, Abe Y, Yumoto M, Kubota M
53. Order of statistical learning depends on perceptive uncertainty（統計学習の階層は認知不確定性に依存する）（査読付）	共著	令和5年3月	Curr Res Neurobiol.	3種類の遷移確率の異なるマルコフ連鎖音列聴取時の脳磁場応答を記録することで、統計学習の達成度を客観評価した。これまでの報告通り、遷移確率比が大きい程、大きな脳活動が記録されたが、不確実性の高い音系列程、高い階層の統計学習戦略が採用されていることを見出した。ヒトの脳は時系列事象の不確実性に応じて、統計学習の階層を変化させている可能性が示唆された。 共著者：Daikoku T, Yumoto M

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
53. 脳磁場計測のアーチファクトの由来と対処法（シンポジウム１．□体磁気計測関係のアーチファクト）	—	令和4年6月	第37回日本生体磁気学会（ロイトン札幌，Web発表）	脳磁場計測におけるアーチファクトは，磁性，電流，脳磁計由来の３種に大別可能なことを示し，それぞれの成因と対策を実例を示しつつ概説した． 共著者：湯本真人
54. 臨床生理学のための解剖・生理 「神経生理検査に必要な解剖・生理」	単著	令和5年1月	臨床検査　67巻　1号、pp.20-27	臨床検査における神経生理学的検査法に必要な解剖と生理を概説した 著者：湯本 真人

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　臨床工学科　　氏名　松岡　雄一郎

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　臨床工学科　　氏名　花田　三四郎

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Mechanical loading of intraluminal pressure mediates wound angiogenesis by regulating the TOCA family of F-BAR proteins（血管内腔圧は、F-BARタンパク質のTOCAファミリーを制御することで創傷血管新生に関与する）（査読付）	共著	2022年5月	Nature Communications	S. Yuge, K. Nishiyama, Y. Arima, Y. Hanada, E. Oguri-Nakamura, S. Hanada, ほか10名 血管内腔圧による機械的刺激において、BARタンパク質が伸展刺激を感知することで、血管伸長現象を制御していることが分かった。「微小流体デバイスを用いたex vivo血管新生モデルの実験を担当」
Enhancement and maintenance of hepatic metabolic functions by controlling 3D aggregation of cryopreserved human iPS cell-derived hepatocyte-like cells（ヒトiPS細胞由来凍結肝細胞様細胞の三次元化による代謝機能の高機能維持）（査読付）	共著	2023年2月	Journal of Bioscience and Bioengineering	F. Tao, S. Hanada, K. Matsushima, H. Arakawa, N. Ishida, Y. Kato, S. Okimura, T. Watanabe, N. Kojima ヒトiPS細胞由来凍結肝細胞様細胞を三次元化することで、CYPなどの薬物代謝機能を中心とした顕著の機能亢進と長期的な機能維持を実現した。「遺伝子および活性を指標とした代謝機能評価および論文執筆全体を担当」
Rapid and Stable Formation Method of Human Astrocyte Spheroid in a High Viscous Methylcellulose Medium and Its Functional Advantages（メチルセルロース培地により迅速形成されたヒトアストロサイトの機能的特徴）（査読付）	共著	2023年3月	Bioengineering	F. Tao, K. Kitamura, S. Hanada, K.Sugimoto, T. Furihata, N. Kojima 温度による増殖分化制御が可能なヒトアストロサイトをメチルセルロース培地法によりスフェロイドに迅速形成することで、遺伝子発現及び神経突起成長を指標とした分化能の高いアストロサイトの実現に成功した。「論文執筆全般およびアストロサイト培養の一部を担当」

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　臨床工学科　　氏名　近土真由美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Detailed Molecular Interactions between Respiratory Syncytial Virus Fusion Protein and the TLR4/MD-2 Complex In Silico （RS ウイルス間の詳細な分子相互作用融合タンパク質とTLR4/MD-2複合体のインシリコでの解析）（査読付）	共著	2022年10月	Viruses2022、14(11)、2382	呼吸器合胞体ウイルス（RSV）融合タンパク質（F タンパク質）と細胞受容体 Toll 様受容体 4（TLR4）および骨髄分化因子 2（MD-2）タンパク質複合体との間の分子相互作用を明らかにするため、バイオインフォマティクス技術を用いてin silico 分析を行った。結果、現在のシミュレーションデータは、部位 II 、 部位IV の融合前、融合後のタンパク質の両方における中和抗体（NT-Ab）結合部位がTLR4 分子との間の相互作用に関与していることを示した。さらに、融合後タンパク質と TLR4/MD-2 複合体との間の結合親和性は、融合前タンパク質とTLR4/MD-2 複合体との間の結合親和性よりも高かった。Fタンパク質のコンフォメーション変化による結合親和性の増加は、RSV感染細胞でシンシチウムを形成できる可能性がありことが示唆され、これらの結果は、RSV の感染性と病原性をより理解するのに役立つ可能性がある。 （共同研究につき，本人担当部分抽出不可能） 共著者：赤川真緒,白井達也,佐田充,長澤紀佳,近土真由美,竹田誠,長澤耕男,木村龍介,岡山香里.林由里子,菅井敏行,津川毅,石井晴之,河島尚志,片山和彦,梁明秀,木村博一
Rhinovirus Infection and Virus-Induced Asthma （ライノウイルス感染症とウイルス誘発性喘息） （査読付）	共著	2022年11月	Viruses2022、14(12)、2616	これまでの研究で、気道系の維持と恒常性は、気道系のさまざまな細胞からのサイトカインなどのさまざまな免疫メディエーターによって関連付けられ、ウイルス誘発性喘息は、維持/恒常性を乱すことが示唆されている。しかし、多面発現性とサイトカインの冗長性は、ウイルス誘発性喘息を理解する上で大きな障害となる。本レビューでは、RV 誘発喘息の病態生理をより理解するために、RV ウイルス学および生物学的防御システムに関連する多面的な調査結果に基づいて疾患について説明した。 （共同研究につき，本人担当部分抽出不可能） 共著者：林由里子,佐田充,白井達也,岡山香里,木村龍介,近土真由美,大河戸光章,津川毅,梁明秀,木村博一

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Molecular Evolutionary Analyses of the Fusion Protein Gene in Human Respirovirus 1 （ヒトレスピロウイルス 1 における融合タンパク質遺伝子の分子進化解析） （査読付）	共著	2023年1月	Viruses research 333(2023)199142	さまざまな国から収集された HRV1 株の全長融合（F）遺伝子について、時間スケールの系統解析、ゲノム集団サイズ、および選択圧解析、Fタンパク質の抗原性解析を行った。結果、時間スケール系統樹は、HRV1 F 遺伝子の共通祖先が 1957 年に分岐し、最終的に 3 つの系統を形成したと推定しました。また、系統力学的分析により、F 遺伝子のゲノム集団サイズが約 80 年間で 2 倍になったことが示されました。一方、多くのネガティブ選択部位が同定されました。各モノマーの 1 つを除いて、F タンパク質のほぼすべての立体構造エピトープは、中和抗体（NT-Ab）結合部位に対応しませんでした。これらの結果は、HRV1 F 遺伝子が長年にわたって絶えず進化し、ヒトに感染してきた一方で、その遺伝子は比較的保存されている可能性があることが示唆された。 （共同研究につき，本人担当部分抽出不可能） 共著者：高橋知子、赤川真緒、木村龍介、佐田充、白井達也、岡山香里、林由里子、近土真由美、竹田誠、梁明秀、木村博一
In silico技術によるフィブリノーゲンと汎用透析膜素材との分子間相互作用に関する研究 （査読付）	共著	印刷中	群馬パース大学紀要	透析膜は生体にとって異物であり、透析膜と血液との接触による血液凝固をはじめとする種々の生体反応が誘発されることが明らかになっている。しかしながら、膜素材が惹起する分子レベルでの凝固反応機構には不明な点が多い。本研究では、血液凝固の主体となるフィブリノーゲンと汎用透析膜素材であるポリメチルメタクリレート（PMMA）の単量体であるメチルメタクリレート（MMA）との詳細な分子間相互作用を明らかにするために、ドッキングシミュレーションを中心としたin silico解析技術を用いた基礎的検討を行った。結果、MMAは、フィブリノーゲンのいくつかのアミノ酸残基と分子間相互作用を示すものの両者の結合親和性は低く、凝固反応を誘発しにくい素材であることが示唆された。 （主要実験施行、論文執筆） 共著者：近土真由美,白井達也,松岡李奈,鯨智哉,佐田充,大濵和也,木村博一
新型コロナウイルスオミクロン変異型・亜変異型（SARS-CoV-2 Omicron Variants/Subvariants）の分子進化に関する最新知見（査読付）	共著	印刷中	感染制御と予防衛生	SARS-CoV-2は進化を続けており、様々な亜種や変種が出現している。現在までのところ、一連の系統学的研究から、SARS-CoV-2は約30のクレードに分類されることが示唆されている。その中でも、BA.1、BA.2、BA.5を含むいくつかのオミクロンの亜型が順次出現し、COVID-19パンデミックに影響を与えた。また、BJ.1亜種とBM.1.1亜種の間にできた組換えXBB亜種が現在主流となっている。これらの亜種は、原型ウイルスとは異なる抗原性を示すことが報告されている。本総説では、SARS-CoV-2の分子進化に関する最近の知見を紹介した。 （論文執筆） 共著者：近土真由美,木村龍，長澤紀佳，岡山香里，赤川真緒,林由里子,藤本友香，白井　達也，齋藤慎，原田和彦，伊藤一人，藤田　清貴，木村博一

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　臨床工学科　　氏名　島﨑直也

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
11.Experimental study on blood coagulation inhibitory effect of venous air-trap chamber of hemodialysis circuit（血液透析用回路の静脈側エアトラップチャンバの血液凝固抑制効果に関する実験的検討）	共著	2022年6月	桐蔭論叢第46号	市販の静脈側エアトラップチャンバ（14cm）と、市販のチャンバを基に全長が異なる2種類のチャンバ（10cm、18cm）を作成し、血液凝固に要する時間を計測した。また、PIVを用いて全長の異なる3種類のチャンバに対して流れの可視化を試みた。さらに、3Dプリンタを用いて血液流入口の角度を30°、45°、60°に変更したチャンバを作成し、市販のチャンバ（0°、90°）を含む計5種類のチャンバに対しても、PIVによる流れの可視化を実施した。その結果、全長が10cmで血液流入口の角度が30°のチャンバが最も血液凝固の発生を抑制できる可能性が示唆された。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共著者：Ishigaki Hideki,Makita Hiroki,Shimazaki Naoya,Oku Tomoko,Motohashi Yuka,Yamauchi Shinobu,Sato Toshio

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12.独特な先端形状を有するダブルルーメンカテーテルのへばりつき及び再循環抑制に対する先端形状効果に関する検討	－	2022年6月	第61回日本生体医工学会大会2022	圧センサ付ガイドワイヤーを用い、DLC 内部の圧力分布を測定することで、新型 DLC の PD-DLC やマハーカエリートカテーテル（MH-DLC）、パワートリアライシス（PT-DLC）の先端形状効果を明らかにすることを試みた。新型 DLC は逆接続時であっても再循環率は 10% 以下に抑えられていた。圧力分布測定と流れの可視化結果から、DLC の脱血は脱血孔の終端部分で主に行われていることが明らかとなり、逆接続時でも再循環率が低く抑えられている原因であることがわかった。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共著者：佐藤 敏夫,佐々木 優貴乃,島崎 直也,中根 紀章,山内 忍,奥 知子,本橋 由香

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13.静脈側エアトラップチャンバのチャンバ長さが抗凝固性能に及ぼす影響	-	2022年6月	第61回日本生体医工学会大会2022	チャンバ長さ L の違いがチャンバ内の血液凝固に及ぼす影響について調べた。また、粒子画像流速測定法（PIV）によるチャンバ内の流れの可視化も試みた。L を変更したチャンバに対する血液凝固完了時間は、L が短くなるのにつれて大きくなった。チャンバ内の流れを PIV で可視化した結果から、L=10cm では血液流入口から流入した速い流れがチャンバの内壁に沿って旋回流を形成しながら、下流の捕捉フィルタに向かって流れていく様子が確認できた。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共著者：佐藤 敏夫,伊原 毅,巻田 浩輝, 石垣 秀記,島崎 直也,奥 知子,本橋 由香,山内 忍
14.静脈側エアトラップチャンバの血液流入角度が抗凝固性能に及ぼす影響	-	2022年6月	1回日本生体医工学会大会2	透析回路内凝固の問題を解決するためには、チャンバ長さ L や血液流入角度θ、捕捉フィルタの形状といったチャンバの各種設計パラメータが、血液凝固系に及ぼす影響について明らかにすることが重要である。ここでは、θを変更したチャンバ上部を 3D プリンターを使って試作し、チャンバ内の流れを可視化すること で、θの違いがチャンバの抗凝固性能に及ぼす影響について調べた。θ =30°では、チャンバ全体にわたって旋回流が発生していた一方で、θ =0°、45°、60°、90°では、チャンバ内に局所的に渦流や流れの淀みが発生していた。この結果から、θ =30°が最も抗凝固性能が優れていることがわかった。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共著者：佐藤 敏夫,石垣 秀記,伊原 毅, 巻田 浩輝,島崎 直也,奥 知子,本橋 由香,山内 忍
15.チャンバ長さと血液流入角度の違いが回路内血液凝固に及ぼす影響	-	2022年7月	第67回日本透析医学会学術集会・総会	チャンバ長さLの違いによる血液凝固時間を測定した。また，血液流入角度θの異なるチャンバを試作し，粒子画像流速測定法（PIV）を用いてチャンバ内の流れの可視化も試みた。Lの異なるチャンバの血液凝固時間を測定したところ，Lが短いほど時間が延長され，血液凝固の発生を抑制できる可能性があることがわかった。さらに，θを変更したチャンバ内の流れをPIVで可視化した結果，θ＝30°ではチャンバ全体に旋回流が発生し，渦流や滞留の発生が抑制されていた。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共著者：伊原 毅,石垣 秀記,島崎 直也,奥 知子,本橋 由香,山内 忍,佐藤 敏夫
16.Investigation of the anticoagulative effect of a new design of venous-side air trap chamber based on flow analysis using computational fluid dynamics(数値流体力学による流れ解析に基づく新しい形状の静脈側エアトラップチャンバの抗凝固効果の検証)	-	2022年11月	17th TOIN International Symposium on Biomedical Engineering	抗凝固効果が期待されているアーチループの静脈側エアトラップチャンバについて、CFD解析による抗凝固効果に関する理論的検討を試みた。次に、粒子画像流速計測法（Particle Image Velocimetry ： PIV）による可視化も実施した。CFD解析結果を見ると、血液流入口から短軸方向に流入した速い流れがチャンバ内部の流れとぶつかり合い、局所的に比較的小さな渦が発生していた。また、濾過網上部に接触した流れによって大きな渦が発生し、流れが停滞する様子が確認できた。CFD解析結果とPIVによる可視化結果を比較すると、同様に局所的な渦が発生し、流れが停滞する結果が得られた。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共著者：島崎 直也, 石垣 秀記, 奥 知子, 山内 忍, 本橋 由香, 佐藤 敏夫

研究活動の記録（2022年10月～2023年3月）

所属　臨床工学科　　氏名　齋藤　慎

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
1. カテーテル透析パーフェクトマネジメント	共著	2022年11月	日本医事新報社	監修：小川智也 分担執筆：宮本雅仁、石田容子、齋藤慎、高橋良光、金山由紀、小林大樹、他37名 担当：「Option カフ型カテーテルの時期に応じた管理と消毒」（pp.164-166）

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1. 事例から学ぶ倫理審査のとおし方！“初級編”軽微な侵襲を伴う介入研究について	共著	2022年12月	日本血液浄化技術学会雑誌 30(2) pp. 209-212	軽微な侵襲を伴う介入研究にける、倫理委員会のとおし方について、具体的な事例を挙げて解説した。 （研究の遂行、全体の考察、執筆を担当）（筆頭論文） 共著者：齋藤慎、神宮宏臣、大澤英史、大山裕亮、田中俊之
2. I-HDFは透析導入期における不均衡症候群の発生を低減できるか	共著	2022年12月	日本血液浄化技術学会雑誌 30(2) pp. 250-252	血液透析（HD）導入期の合併症として不均衡症候群がある。間歇補充型血液濾過透析（I-HDF）は透析中に間歇的な補液を行う透析方法であり、血管内と細胞内の濃度の不均衡を減らすことができるため、血漿浸透圧を高く維持でき、DDSの発生を低下させる可能性がある。そこで、本研究では、導入期透析患者のDDSの予防として、I-HDFが有用かどうかを明らかにすることを目的とした。不均衡症状は、HD導入群の17件に比し、I-HDF導入群では3件と有意に低下を認めた（p< 0.01）。平均血圧はI-HDF導入群に比し、HD導入群で有意に低値を認めた（p < 0.05）。導入期透析患者において、I-HDFは血圧が維持しやすく、DDSの発生率を大きく低下させることができると考えられた。 （研究の遂行、全体の考察、執筆を担当）（筆頭論文） 共著者：齋藤慎、神宮宏臣、大澤英史、大山裕亮、田中俊之
3. Hybrid HDF plus Far-infrared therapy further improves peripheral blood flow in the lower limb	共著	2022年12月	日本血液浄化技術学会雑誌 30(2) pp. 277-279	透析患者は動脈硬化を原因とする末梢動脈疾患（PAD）を有する頻度が高く、不良な予後と関連する。本研究では、Hybrid HDFに、血管内皮機能改善作用などを有するフィラピー療法を併用し、下肢血流が改善するかどうかを明らかにすることを目的とした。フィラピー療法は、非温熱効果により、血管内皮増殖のコントロール･虚血部位の酸化ストレスの軽減･微小血管の形成能力の活性化（血管新生）などの効果があると報告されており、Hybrid HDFまたは、I-HDFにフィラピー療法を併用することで、間歇補液による末梢循環改善効果が、フィラピーの非温熱効果を増大させる可能性が示唆された。 （筆頭論文） 共著者：齋藤慎、神宮宏臣、大澤英史、大山裕亮、田中俊之

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
4. Pulse Amplitude Measured with a Portable Laser Doppler Flowmeter Is Useful for Screening of Dialysis Patients for Peripheral Arterial Disease: An Observational Study （携帯型レーザードップラー血流計で測定した脈動幅は、透析患者の末梢動脈疾患のスクリーニングに有用である。観察研究）（査読付）	共著	2022年12月	Annals of Vascular Diseases Volume 15 Issue 4, pp.301-307, 2022	The 14 patients in this retrospective study received maintenance hemodialysis (HD). We measured the blood flow and pulse amplitude on the ventral side of the first toe with a portable LDF while the patients were undergoing an HD session. The correlations between the blood flow/pulse amplitude in the toe and the ABI/TBI were examined. Both the ABI and TBI had a strong correlation with pulse amplitude. The sensitivity and specificity of the pulse amplitude measured with the LDF for detecting PAD in HD patients as determined by a receiver operating characteristic curve analysis were 1.00 and 0.88, respectively .Measuring the pulse amplitude in the toe with a portable LDF may serve as a simple and useful screening test for PAD in HD patients （研究の遂行、全体の考察、執筆を担当）（筆頭論文） Saito M, Jingu H, Oyama Y, Tanaka T, Shiono A, Machida M.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1. 特別講演	―	2022年11月	群馬CART検討会	座長（齋藤慎）
2. VAをもっと知ろう！	―	2022年11月	日本血液浄化技術学会 第13回血液浄化Step Up オンラインビデオセミナー	座長・コメンテーター（齋藤慎）
3. I-HDFの選択とその設定	―	2022年11月	第2回関東甲信越臨床工学会	特別講演（齋藤慎）
4. BPA「一般」 BPA-7～BPA-12	―	2022年11月	第2回関東甲信越臨床工学会	座長（齋藤慎）
5. 第14回血液浄化Step Upセミナー	―	2022年11月	日本血液浄化技術学会	世話人（齋藤慎）
6. フィラピー療法の基礎と有用性	―	2022年11月	第1回フィラピー研究会	講演（齋藤慎）
7. 医師のタスク・シフト/シェアの現況と高齢患者における IT の活用術	―	2022年11月	第49回千葉県透析研究会	共催セミナー講演（齋藤慎）
8. PAD透析患者に対するHot shot Hybrid-HDF ＋フィラピー療法の有用性	―	2022年12月	第6回I-HDF研究会 （於：東京）	本研究では下肢潰瘍を伴う末梢動脈疾患の透析患者に対し、Hot shot Hybrid-HDF ＋フィラピー療法を施行し、その有用性を検討したので報告する。Hot shot Hybrid-HDF ＋フィラピー療法では、下肢血流量の相対変化の上昇が認められ、創傷が早期に改善し、冷感や疼痛などの自覚症状も改善した。 （研究の遂行、執筆を担当） 共著者：小林千里、齋藤慎、大澤英史、大山裕亮、田中俊之、塩野昭彦 共同発表者：齋藤慎、神宮宏臣、田中俊之、大濱和也
9. リサーチクエスチョンを探そう	―	2023年1月	日本血液浄化技術学会 第1回研究スキルアップセミナー	セミナー講師（齋藤慎）
10. 透析関連手根管症候群に対する透析中エコー による正中神経圧迫率の経時的評価	―	2023年1月	群馬透析アミロイド症講演会	座長（齋藤慎）
11. レーザ血流計による末梢血流測定の必要性	―	2023年2月	東京都臨床工学技士会 学術委員会代謝専門部会 Webセミナー	講演（齋藤慎）
12. Ankle-brachial index, vascular calcifications and mortality in dialysis patients	―	2023年2月	日本血液浄化技術学会 第5回ジャーナルクラブ	講師（齋藤慎）

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　臨床工学科　　氏名　丸下　洋一

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
A theoretical computatona	共著	2022/11/5	nal Symposium on Biomedi	The objective of this study was to use computational fluid dynamics (CFD) analysis to investigate the effect on the vascular wall of changes in aortic blood flow before and after the treatment of Stanford type A and type B aortic dissections by artificial blood vessel replacement and staged TEVAR.

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　教養部　　氏名　星野修平

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
診療放射線学概論	共著	2022年4月	南江堂	診療放射線技師の義務と役割で使用する教科書として「診療放射線学概論」を作成し、南江堂から出版した。本書では、診療放射線学を学初学者向けに、診療放射線技師の歴史、国家資格の変遷、教育制度、業務内容、責任、義務などの項目で組み立て、診療放射線技師国家資格を目指す学生向けに、また診療放射線技師の社会的な責任や最先端技術を駆使した医療技術実践について分かりやすく学べるよう工夫した。 本人担当分：企画立案と編集を担当した。 石田隆行監修　西山篤・星野修平編集 小池貴久、新井正一、山田雅之、島雄大介、五味勉、他

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
医療放射線の適正管理に関する検討会議事録に関するテキストマイニング分析（査読付）	共著	2022年7月	日本診療放射線技師会誌	2020年4月に医療法施行規則の一部を改正する省令が施行された．厚生労働省は「医療放射線の適正管理に関する検討会」を発足させ，その議事録がテキストデータとして厚生労働省のホームページ上にある． 検討会の議事録をKHcoder3を用いてテキストマイニングを行い内容分析を行うことで，患者線量の記録および安全管理体制の確立に至った経緯を明らかにする．　医療放射線の適正管理に関する検討会議事録についてテキストマイニング分析を行った結果，患者線量管理および安全管理体制の確立は国際的動向を踏まえ，放射線診療における正当化と最適化を適正に管理するために行われていることが明らかになった． 本人担当部分:共同研究につき抽出不能 共著者:齋藤祐樹、徳重佑美子、丸山星、岩井譜憲、加藤英樹、星野修平

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Webアプリケーションを使用したオンライン学習支援システムの構築	共著	2022年7月	第26回日本医療情報学会春季学術大会抄録集	概要:資格試験では過去に出題された問題の類似問題が出題されることが多く、試験対策として過去問題を繰り返しと行う事が有効である。 Google が提供するGoogleForms はWeb アプリケーションであり無料で使用することができ、選択式のテスト問題を作成することが可能である。 試験対策の学習達成度確認を目的として、GoogleForms で過去問題を使用したオンライン試験問題の作成支援システムを構築したので報告する。 過去問題を科目、領域ごとにコーディングを行い、指定した問題数を項目ごとにランダムに抽出する。抽出したデータをGoogleAppsScript を用いて自動でGooglForms の作成を行えるようにした。リンクにアクセスすることで、任意の時間、場所で問題の実施が可能であり、自らのタイミングで問題を繰り返し行う事が出来るようになった。問題データベースを変更することで様々な試験内容に対応することが可能である。 本人担当部分:共同研究につき抽出不能 共著者:岩井譜憲、徳重佑美子、島崎綾子、鳴海克希、湯浅仁博、星野修平

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Webアプリケーションを使用したオンライン学習支援システムの構築	-	2022年7月	第26回日本医療情報学会春季学術大会	資格試験では過去に出題された問題の類似問題が出題されることが多く、試験対策として過去問題を繰り返しと行う事が有効である。 試験対策の学習達成度確認を目的として、GoogleForms で過去問題を使用したオンライン試験問題の作成支援システムを構築し、 過去問題を科目、領域ごとにコーディングを行い、指定した問題数を項目ごとにランダムに抽出したデータをGoogleAppsScript を用いて自動でGooglForms の作成を行えるようにした。問題データベースを変更することで様々な試験内容に対応することが可能である。 共同発表者:岩井譜憲、徳重佑美子、島崎綾子、鳴海克希、湯浅仁博、星野修平
診療放射線技師教育の体系化と診療放射線学概論の構築	-	2022.8.27	第16回日本診療放射線学教育学会学術集会	診療放射線技師養成は四年制大学化が進み、近年、保健学、保健科学、医療技術などの医学を支援する学術との位置領域として学術体系化が進んでいる。診療放射線技師養成は、医学、理工学の学際的領域としての特徴を持ち、さらに医学領域以外の放射線利用にもその学術範囲を広げ、環境放射線や自然放射線の人間との関係にも及ぶ。大学学部設置が進むなか、その体系を概論、総論、各論で配置し、系統づけた放射線技師養成をおこなうため、放射線技師養成に関する学術領域を診療放射線学と定義し、初学者対象として領域全体を概論として再構築した。診療放射線学とは、診療放射線技師が日常業務に関わる分野において、非電離放射線を含む放射線の科学と技術および教育などを研究対象とする学問である。 共同発表者：　星野修平・西山　篤

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　教養部　　氏名　アンドリュース　デビッド

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
1　Who Benefits from CAT（コンピューター支援翻訳で恩恵を受けるのは誰か）（査読付）	単著	2022年11月	Translator Perspectives（翻訳者の目線）2022, November 2022, JAT（日本翻訳者協会）, pp. 1-2	コンピューター支援翻訳(CAT)がもたらした翻訳業界への変化は甚だしい。翻訳者の作業効率、仕事内容、報酬の面においてCATがどのような影響を及ぼしたしたか、その動向と功罪について考察した。
2　An Innovative Approach to Business English（革新的なビジネス・イングリッシュ）（査読付）	単著	2022年12月	Speakeasy Journal（スピークイージー・ジャーナル）, December 2022, Vol. 33, JALT（全国語学教育学会）, pp. 30-32	ビジネス・イングリッシュ・コースを新規に開設するにあたり、ビジネス環境において必要なコミュニケーションスキル（ビジネスレターの書き方、電話の応対、苦情処理、問題解決、プレゼンやスピーチなど）を養成するために実用的な内容を取り入れたコースをデザインした。実際の授業活動例を示し、学生の学習効果を考察した。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
3 Study on Taste Threshold in Subjects of University Students（大学生を対象とした味覚閾値に関する研究）（査読付）	共著	2023年3月	北陸大学紀要 第54号（2022年度） pp. 237-251	The purpose of this study was to collect basic data on the sense of taste in young subjects in order to generate a quantifiable measure on which clinical examinations can be based. The test was performed on 31 university students between the ages of 18 and 22 (average age: 19.7 years). Each subjects filled out a questionnaire to determine their food qualitative preferences followed by quantitative taste examinations for the four basic tastes; sweet, salty, sour and bitter. We used filter paper disc method to evaluate the total mean of the cognitive thresholds of in both side of the chorda tympani and glossopharyngeal innervated regions of the tongue. We confirmed that the total mean values were within the normal range for both males and females, though two males showed mild abnormalities, and observed threshold distributions. These results of the data we gathered suggested that males might have a higher taste threshold than females in young subjects. （本研究の目的は、臨床検査の基礎となる数値化可能な指標を作成するために、若年被験者の味覚に関する基礎データを収集することである。臨床検査の基礎となる数値化可能な指標を作成することである。そのために 18歳から22歳の大学生31名（平均年齢平均年齢は19.7歳）。各被験者はアンケートに回答し、食の質的嗜好を調べた。その後、甘味、塩味、酸味、苦味の4つの基本味について定量的な味覚検査を行った、 酸味、苦味。濾紙ディスク法を用いて、左右の認知閾値の合計平均値を評価した。舌の鼓索および舌咽神経支配領域の両側における認知閾値の総平均値を評価するために、ろ紙ディスク法を用いた。の認知閾値の総平均値を評価した。その結果、総平均値は男女ともに正常範囲内であった。また、閾値分布も観察した。分布が観察された。これらのデータから、若年者では男性の方が女性よりも味覚閾値が高い可能性が示唆された。また、味覚閾値の分布から、若年層では男性の方が女性よりも味覚閾値が高い可能性が示唆された。） (www.DeepL.com/Translator（無料版）で翻訳しました。)（全論文校閲・英文校正） （共著：Takahashi J, Watanabe H, Asami T, Andrews D, and Iwasaki S. ）

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1　国際知的所有機関の国際調査見解書・特許性報告書（全64件）（和文英訳）	単訳	2022年4月～2023年3月	国際知的所有機関	非公開のため記載不可。
2　「ステントグラフト」（特許出願の日英特許翻訳）	単訳	2022年9月提出	特許庁	未公開のため記載不可。本開示は、縫製システム及び切断装置に関する。発明の背景は以下の通り。 大動脈瘤の治療法として、ステントグラフト内挿術が知られている。ステントグラフト内挿術では、ステントグラフトを収縮して納めたカテーテルを大動脈に挿入し、患部まで移動させた後、ステントグラフトを留置する。患部に留置されたステントグラフトは、ステントの復元力によって広がり、血管の内壁に張り付く。これにより、ステントグラフトは、大動脈瘤に対する血液の流入を抑制する。ステントグラフト内挿術は、身体を大きく切り開く外科手術が必要ないので、低侵襲な治療法である。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　「ステントグラフト」（特許出願の日英特許翻訳）	単訳	2022年10月提出	特許庁	未公開のため記載不可。本開示は、縫製システム及び切断装置に関する。発明の背景は以下の通り。 大動脈瘤の治療法として、ステントグラフト内挿術が知られている。ステントグラフト内挿術では、ステントグラフトを収縮して納めたカテーテルを大動脈に挿入し、患部まで移動させた後、ステントグラフトを留置する。患部に留置されたステントグラフトは、ステントの復元力によって広がり、血管の内壁に張り付く。これにより、ステントグラフトは、大動脈瘤に対する血液の流入を抑制する。ステントグラフト内挿術は、身体を大きく切り開く外科手術が必要ないので、低侵襲な治療法である。

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　教養部　氏名　峯村優一

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要
難病療養者のこころ-心理臨床と生命倫理の視点から-	共著	2023.2.1	創元社	難病療養者の抱える問題について、倫理原則や倫理理論を用いて考察し、どのように療養者を保護や支援するのが善いのかを論じた。特に、ALS療養者が生命維持装置を使用するかどうかの判断を迫られる際における、インフォームド・コンセントの方法を含めた倫理的問題点を考察している。 共著者：鎌田依里、峯村優一

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
Animalism and Human Persistence（動物主義と人間の持続性）（査読付）	単著	2022年12月	Formosan Journal of Medical Humanities, Vol.23	脳幹機能により人間の持続性が保たれるとされるエリック・オルソンの動物主義を批判的に分析した。オルソンに反して、脳幹機能は医療機器によって代替されることを示し、脳幹機能を失った人間は持続して生存することを明らかにした。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
医療の倫理四原則-四原則の性質と役割（Four Principles of Ethics in Medicine: Characteristeics and Roles of the Four Principles）	単	2022.10.9	第41回日本医学哲学倫理学会年次大会、於　群馬	倫理四原則の概念、また四原則間の対立が発生する事例を分析し、四原則はどのような性質をもつか、四原則の内で優先される原則はあるか、医療者また医学系研究者のために四原則が果たす主な役割等を、英語による意見交換や自由な討議を通して考察した。
The Analysis of What Constitutes the Organizational Climate: Through a Critical Examination of SORC		2023.3.31	32nd Annual APPE International Conference（オンライン開催）	組織環境を評価する尺度であるSORCを分析し、組織を構成するものとして、SORCで重視される組織の政策、規制、競争力、コミュニケーション力等のみでなく、組織を牽引するリーダーのもつ道徳性が大きな役割を果たすことを明らかにした。

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　教養部　　氏名　衣　川　隆

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
鏡視下腱板修復術後の投球時疼痛についての検討（第2報）	単著	2022年9月	群馬パース大学紀要28号	P59-63本研究報告は、腱板断裂修復術後に関節可動域拡大のための可動域訓練や基礎筋力回復トレーニングを経て、キネティックチェーン（運動連鎖）トレーニングと肩甲上腕関節・肩甲胸郭関節ストレッチを行い、全力での投球時疼痛の有無を明らかにする自験例を得たので、その経過とともに考察を加えて報告する。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属　教養部　　氏名　岩城　翔平

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概　　要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概　　要
大学野球選手におけるスイング速度に影響を及ぼす体力要素の検討	共著	令和4年3月	国士舘大学 体育研究所報 第40巻，p.11-17.（令和3年度）	本研究では、体重に対するスイング速度を評価の基準として選手を2つのタイプに分類し、スイング速度に影響する体力要素をそれぞれの特性に応じて検討した。その結果、以下の知見が得られた。 １）Skilled(体重に対してスイング速度が優れた値を示すタイプ)では、6項目（身長、体重、除脂肪量、デッドリフト、ベンチプレス、クリーン・ハイプル）にスイング速度との間に有意な正の相関関係が認められ、自身が有する力を効果的にパワー発揮へとつなげる技術をもっている可能性が示唆された。 ２）Non-Skilled(体重に対してスイング速度が劣る値を示すタイプ)では、スイング速度との間に有意な正の相関関係が認められた項目は、体重及びベンチプレスの2 項目であったこと、%クリーンパイプル及び立ち幅跳びにSkilled と有意な差があったことから、動きによって自身のパワー発揮を増大させる能力が劣っていることが示唆された。 これらの結果より、タイプによってトレーニング課題が異なることが明らかとなった。現場の指導において、選手自身に必要な課題が明らかになることは、個々に応じた適切なアドバイスを行うことを可能性にし、競技力向上に有益な知見となることが示唆された。 畑島一翔、田中重陽、岩城翔平、磯貝貴大、角田直也
野球投手における投球フォームの違いによるストレートの特徴	共著	令和5年3月	国士舘大学　体育研究所報 第41巻，p.87-91.（令和4年度）	本研究では、ボールトラッキングシステムデータ計測から得られるパラメータについて、先行研究とのデータを比較しながら、現場における投球指導への有効性について検討した。その結果、以下の知見が得られた。 1)投球フォーム別によるストレートの比較では、移動速度においては OT、TQTがSTより高い傾向を示した。しかしながら、回転スピードでは各投球フォーム間に差はみられなかった。 2)各投球フォームにおけるストレートの特徴として、ホップ成分においてはOTが大きく、TQT、STの順に低値を示す傾向がみられた。また、シュート成分においてはSTが大きく、TQT、OTの順に低値を示す傾向がみられた。 3)その投手が投じる変化球の球種には、投球フォームによって偏りがみられた。 4)変化球を投じる際には、変化の大きさや方向など、投手の意図によってフォームに変化が生じている可能性が推察された。 畑島一翔、岩城翔平、田中重陽

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要